

()

『竹むきが記』研究

九五〇二〇一

五條小枝子

目次

序章	『竹むきが記』研究の現状と課題	一
第一節	『竹むきが記』概説	一
第二節	『竹むきが記』研究の問題点	八
第二章	『竹むきが記』の環境	一三
第一節	時代的背景	一三
第二節	作者の周辺	二三
第二章	『竹むきが記』の基本的性格	三三
第一節	作品の構成	三三
第二節	記録的態度―「女房日記」としての視点―	三八
第三節	心情の記録	四四
第三章	『竹むきが記』作者の実人生と日記との隔離	六七
第一節	関係する史実の確認	六七
第二節	空白の意味―作者にとって―	八三
第三節	書かれたものと書かれなかったもの	一〇〇

第四章	『竹むきが記』作者の心の軌跡	一二六
第一節	作者名子の求道	一二六
第二節	作者の変貌―名子の行きついた場所―	一四五
おわりに		一五六
注		一六〇
参考文献目録		一七三

序章 『竹むきが記』研究の現状と課題

第一節 『竹むきが記』概説

まず始めに、本研究で対象とする素材『竹むきが記』について、その概要を把握しておきたい。

(1) 伝本

『竹むきが記』の現存する伝本は、以下のとおりである（注1）。

- 1 国立国会図書館本 本書は、本来上下別巻であったものを上下合巻本としたものである。内表紙左上の題箋には、上下巻それぞれに、「竹むきが記上」、「竹むきが記下」とある。巻首に「宮内省図書印」、「帝国図書館蔵」という印があり、本来禁裏の御文庫の所蔵であったものである。明治四四年初めて本記を発見、紹介された和田英松氏は（注2）、「其寫しはあまり古きものには非ず、享保の頃、堂上家の手寫せしものなるが如し。たゞ表紙に竹むきの記と題せるのみにて、著者の名もなく、巻末の識語も見えざれば、其傳來等詳ならねど」とされている。また、大東急記念文庫蔵『禁裡御藏書目録』には、「竹むきが記 上宗綱卿／下基綱卿 一一」とある（注3）。宗綱も基綱も、『公卿補任』によると室町時代の公卿であるが（注4）、目録の識語に「右官本万治四年正月十五日禁中炎上之時焼亡^{云々}」とありこの書は焼失している。したがって、本書の書写年代は、玉井幸助氏が「現存する国会図書館本はそんな古写本ではなく、江戸時

代中期頃の写しと思」^(注5) われるとされるに従っておきたい。松本寧至氏は、『古典文庫』解説で、宮内庁書陵部、東山御文庫の『歌書目録』に見える「竹むきか記二」がこの国会図書館本そのものに該当するという福田秀一氏の指摘に賛意を表されている。そして、本書が、宗綱・基綱書写本からの転写本である可能性が高いとしておられる。

本書が現存最古の写本で、以下の伝本は全て本書を祖本とするものである。

2 宮内庁書陵部蔵本 国会図書館本の明治初期の影写本。末尾に「昭和卅八年初夏国会図書館本を以て再校」との朱書きがある。

3 京都大学国史研究室本 国会図書館本の忠実な臨写本。下巻裏表紙の見返しに「明治四十四年十月帝国図書館蔵本ヲ謄写ス」という識語がある。

4 東京大学史料編纂所本 国会図書館本の忠実な影写本。五三丁目に「右竹むき可記 帝国図書館蔵本明治四十三年二月影写」という識語がある。

5 神宮文庫本 本書は、『古事類苑』資料用として転写したものを神宮文庫が引き継いだもの。「日野一流系図」が付いている。本文の後に「右竹むき可記式冊 以帝国図書館本明治四十三年二月影写了」とある。4を転写したか。

(2) 作者

作者については、先の和田氏が指摘された日野資名女の日野名子であることに疑問はない。その根拠として、

和田氏は、「諸家系圖纂に収めたる日野一流系圖に、典侍名子、權大納言公宗室、竹向[・]是也、右大臣實俊母、新千載作者也、竹向[・]日記記者也」とあることから、本記の作者は資名の女名子であると断定された上、なお、元弘元年一〇月劍璽渡御の記事、同二年三月光厳天皇の即位式に作者が褰帳の役をした記事などと「花園天皇宸記、頼定卿記等」の記事が一致することもその証左として挙げておられる^(註6)。いま、『花園天皇宸記』『頼定卿記』の該当する個所と本記の該当個所とを左に挙げる^(註7)。

○元弘元年一〇月

『竹むきが記』 内侍二人勾當、兵衛、我身受け取り聞ゆ。十月十日比にて侍しにや。

『花園天皇宸記』 一〇月六日の条 (十月別記)

内侍二人「勾當・少將、上髪如例、」於御帳間左右請取之、典侍「資子、」取之置夜御殿、

○同二年三月二二日

『竹むきが記』 同月廿二日、御即位行はる。褰帳つとむべきによりて、前の日より油小路の里に出でぬ。

(中略) 休幕に打板をまうけて車を寄す。(中略) 行幸なりて事はじまれば、女皇と同じく左右に参上りて進み立つ。得選、先に進みて、左右の御帳の帷を褰げ奉る。(中略) 四月廿八日、改元の定にて、正慶元年と改まる。女叙位侍しに、上階の事ありしかば、(以下略)

『花園天皇宸記』 四月一日の条

今夕女叙位、執筆中宮大夫^(三條實忠)、從三位藤原禊子「關白^(藤原冬教)室」・藤原名子「褰帳、資名卿女、御

乳母也、」從五位上坂上幸子、「執翳、」從五位下資子王「褰帳、故資清卿^{（主乙）}女、」（以下略）

『賴定卿記』 三月二二日の条

褰帳作正廳東西登廊北面休幕／左女王 伯業清王女／右「中納言典侍」 按察資名女／西廊東妻一間為典侍休幕／東廊西妻二間為女王休幕（以下略）

「」内は、原割注、（ ）、（ ）行間細字書き入れ注記、以下同じ

これら史料の検討により、『竹むきが記』は、日野資名女名子によって記されたものと判断することができる。

この対応で従来問題にされてきたのは、『尊卑分脉』には資名の女子として「從三典侍名子 大納言^{（主乙）}公宗卿室 実俊公母 竹向^{（注8）}」とされているのに、『花園天皇宸記』元弘元年一〇月六日の条に、「資子」とな

っている点である。この点について、早く和田氏は、「名子も資子も、共に父資名の偏諱なれど、前後同じからざるはいかなる故にか、蓋し始は資子と稱したりしが、元弘二年光嚴天皇御即位の時、竹向と同じく、褰帳を奉仕せし故神祇伯資清王の女も資子にて、同名なれば、改名せしめられしものと見えたり^{（注9）}」と述べられた。

ほぼこの説が容認されていたが、伊藤敬氏は、「我身受け取り聞こゆ」と『花園天皇宸記』の記述がきれいに対応しないこと、『竹むきが記』の用例から名子が自分を現任の典侍であるように表現していないとみえることなどから、「名子が正式の典侍でなく乳母だったとすると世話役として内侍と典侍資子との間をとりもったと解することも可能である。（中略）宸記の典侍資子と名子は別人であろう」とされた^{（注10）}。これに対し、岩佐美代子氏は、典侍に関する記述については、「結局いずれも作者が現任の典侍である事を肯定こそすれ、否定する材

料にはなるまいと思われる」^(注 11)とされ、「資子」と「名子」と実名が違っている点についても、当時の女性の実名の記録の在り方の蓋然性が極めて曖昧であることを検証された結果、「『資子』と『名子』の食い違いも改名とか別人とか考えるより、こうした記録類にありがちの偏諱の取違えと考えてよく、実名以外の記載内容から判断して同一人として差支えない」とされた。資清卿女は皇孫とはいえ翌月の叙位では「從五位下」となったのであり、「從三位」となった名子との身分差は大きいので、その為だけに名子の方が改名させられたとも考えにくい。岩佐氏の御指摘のとおり、取違えによる花園天皇の誤記の可能性が大きいのではないかと考える。

作者、日野資名女名子の生年については確認できる史料がない。先の玉井氏は、夫西園寺公宗とほぼ同年としておられるが、これとても確証があるわけではない。典侍・乳母として宮仕えの経験があること、西園寺公宗の室となったこと、一子実俊があることなどが、本記および『尊卑分脉』他の史料から判明するのみである。没年は、延文三年（一二三八）二月二三日であることが、次の史料からわかる^(注 12)。

○『公卿補任』 延文三年 權大納言正二位 西園寺 同實俊「二十四」大歌所別當。二月廿三日喪母。三月卅日復任。七月十一日除服出仕宣下。

○『愚管記』 延文三年二月二十八日の条

西園寺大納言母儀 實名大納言入道息女 去廿三日他界 云々

(3) 成立

本記の記事は、日付が明らかなものによる限り、元徳元年（一二三二）一二月に始まり、貞和五年（一二三四）

七月に終わっている。上下巻の間に正慶二年（一三三三）六月半ばから建武四年（一三三七）一二月まで約四年半の空白がある。それでは、本記はいつ成立したのだろうか、このことについて諸説をまとめておく。

前項のごとく作者の没年が延文三年であるので、本記の成立は、それを下ることはない。成立について、先の和田氏は、本記の最終記事が貞和五年であること、本記中に北山殿の成就心院の不断念仏について「安貞二年十一月に始置かれけるより、今貞和五に至るまで、一時も退転あることなし」という記述があることから、貞和五年に著したものとされた。現在もほぼこの線に従い、貞和五年が上限と考えられている。構成論、中巻の存否の問題等とともに様々な可能性が提示されているので、それを次に挙げる。

まず、諸家の所説でも、記憶あるいは手控えを基にして後年回想して記されたものという点については、一致している。本記中の記事の日付が日次に厳格でないこと、回想しての叙述が見えることなどからである。一例を挙げれば、元弘元年（一一三三）後醍醐天皇が笠置の落城で六波羅に入った記事には「その程の事は書きもとめず」と記し、続いての剣璽渡御については、「十月十日比にて侍しにや」と記すことなどである。また、貞和五年時点で一気に書き上げられたのかという点についても、そうではなく、上巻、下巻は別々の成立であると考え、ることも一致している。約二〇年に亘る記事の掲載期間は、一気に書き上げるには長すぎることに、上巻の最終の叙述が「跋」とも読みとれるような表現をとっていることなどが、その判断理由である。その部分を左に引用する。

二三日ありて車などあれば、立ち返山路にも、いかになり行く身ぞと、万に浮きたる心地して思ひ乱るべし。

いといみじう聞き所なきいたづらの問はず語りは、なを残り侍べきにやとぞ。

とすれば、成立の問題は、上下巻別々に検討されなければならないことになるが、上巻が一旦先に成立したという考えが一般的である^(注 13)。提示されている説をまとめてみると、次のようになる。

福田秀一氏^(注 14) 上巻の上限を夫公宗の斬罪（建武二年八月）後とし、下限を下巻の冒頭建武四年暮以

前とする。下巻を二分し、先の「今貞和五に至るまで」の記事の直後までが、一旦貞和五年に成立し、

「康永三年に改まりぬ」以下末尾までが、数年後の書き継ぎとする。ただし、それは、実俊が権大納言になった文和二年（一一三三）よりは前のこととする。

松本寧至氏^(注 15) 上巻の成立年次を建武三年の中頃から四年一二月までの一年半ぐらいの範囲とする。

下巻については、右の福田氏の説を支持。

渡辺静子氏^(注 16) 上巻の成立時期については言及しないが、下巻執筆との間には年数の懸隔があるとする。

下巻を二分し、前半は康永元年八月頃から同二年あたりで一旦擱筆され、下巻の後半は貞和五年において書かれたとする。

水川喜夫氏^(注 17) 上巻は建武四年二月以降建武五年初め頃までに整序記録されたとする。下巻は、最終

記事の無量光院の花見（貞和五年春）の直後に加除整書されて完結したとする。

前田美稲子氏^(注 18) 上巻を、前後に二分し、前半は元弘三年六月（作者と公宗との愛の成立）から建武

二年六月二二日（公宗の捕縛）の間に記述され、後半はそれから幾年か後に書かれたものとする。下巻

の成立時期については、和田氏の貞和五年説を支持する。

中巻の存否とからむ問題でもあるが、おそらく手控えの類を基に回想して記したものであることは間違いないであろう。また、『竹むきが記』という作品の執筆は公宗の斬罪を契機としたものと考えておくのが、今のところ妥当ではないかと考えている（後述、第三章第二節）。したがって、作品全体の成立時期について確実にいえることは、貞和五年から延文三年までの間ということになる。そのうち、福田氏の指摘されるように文和二年より以前である可能性が高いことだけはいえるであろう。

第二節 『竹むきが記』研究の問題点

『竹むきが記』研究の歴史は、まだ日が浅い。先の和田氏が史料として紹介されて以後注目されることはなく、昭和三七年に玉井氏が日記文学の系譜につらなるものとして本記を位置付けられて^{〔註19〕}、ようやく研究対象として取り上げられるようになったのである。それから現在までの研究史を辿ってみると、おおよそ次のような問題が提起されてきたとまとめることができる。

- 1 題名 『竹むきが記』か『竹むきの記』か。これは、実質的に孤本である国立国会図書館本の題箋の字体の読みの問題（「可」か「乃」か）であり、現在は、標記の読みが一般的となっている。なお、「竹向」という呼称についても諸家の考察がある。

2 伝本 前節で紹介した。

3 作者 これも前節で日野資名女名子であると紹介したが、彼女の血縁関係（年齢、生母、兄弟姉妹との関係等）、閱歴（出仕先等）については種々の推定がなされているが、なお解明されていない点が多い。

4 成立 同前。

5 本文校訂 伝本が実質的に孤本であり、しかもこの本は江戸時代中期以降の写しと推定されている。原本の成立から約三五〇年も経ってからのものであることから、本文に全面的な信頼がおけない。したがって、誤写の認定と原本の想定が重要な作業となってくる。これも確定された本文はない。

6 本文の読解 人物の比定・用語の意味・文脈の把握等、解明されなければならない点が多い。

7 作品論 ここでは整理のため別項目として挙げたが、これらは互いに密接に関連している。

① 中断期間の意味（中巻の存否の問題も含む）

② 執筆動機

③ 構想・主題

④ 記録性 日記としての在り方

⑤ 文学性（自照性の問題も含む）

⑥ 語彙・敬語表現など国語学的アプローチ 国語学の立場から作者の意識を探る。

8 作品の周辺研究 作品理解のためにどうしても欠かせない中世における宮廷社会の生活文化の実態の究明

もなされなければならないが、やはり不明な点が多い。例えば、「乳母」や「乳父」の実態とその意識もほとんど把握されてはいない。

昭和六〇年に岩佐氏は、次のように本記の研究の課題を述べておられる（註 20）。

本文の丹念な読解、登場人物の慎重な比定、作者の女房経歴・婚姻形態・家門意識等への時代背景をふまえた深い理解は、本記のみならず女流日記文学研究一般に必須の前提である。『とはずがたり』研究においてはこうした土台作りにまず多くの努力が注がれた。これに対し、本記は主題・表現ともに一見記録的、単調で読解にさほどの困難はないように見え、土台作りについても既得の中古中世文学の常識で間に合うかのようになされて、やや安易に論が進んでしまった感がある。

また、中世日記文学の研究全体についても、次のように提言しておられる。

現在常識となっている中古文学読解上の諸知識は、作品のみから得られたのではなく、数百年来の先人の周辺諸事実を含めた研究成果のたまものである。中世日記研究においてはそうした蓄積はほとんどなく、中古文学の常識の安易な導入がむしろその蓄積の努力を怠らせている。中古とはことなる中世宮廷の社会相・生活文化・言語・思想について、我々はまだほとんど何も知らない。この事を三思し、本文の正しい読解と周辺の諸知識の充実から再出発することが、研究の本道であり捷徑であろう。更に従来これもやや常識的に安易に、時としては善玉と悪玉のふるい分けのように用いられて来た、自照性と記録性、私的世界と公的世界、虚構と事実といった語の意味内容についても、あらためて見直しを行う必要があるのではなからうか。

この時点から、約一〇年が経過した現在も状況にさして大きな変化はない。このことは、とりもなおさず中世日記文学、ことに本記研究における困難を示していることになる。本記の場合、伝本が実質的に孤本であること、関係史料が少ないこと、記載期間に中断があることなどが、その原因として考えられる。岩佐氏御指摘のとおり諸先学の研究成果をみても、どうしても推測に頼らざるを得ない部分があり、その困難さは実感されるところである。本研究では、こういった基礎的作業も念頭におきつつ論を進めてゆきたいと考えている。

さて、これらの諸問題のうち、ここで取り上げようとするものは、主に「7 作品論」として包括されるものである。『竹むぎが記』は、早くには「良妻賢母」の記ととらえられた。下って、強い「家」の意識に支えられて、一子の教育に心を砕き家門の再興を果たそうと執心した母の記とされ、そこに中世という時代の特質をとらえる見解も出されたりした。表現に相違はあれ、家門の再興に賭ける母の日記ととらえる立場にかわりはないだろう。また、近年では、西園寺家の名誉の記録であったのだという観点でとらえられることもある。確かに『竹むぎが記』に記される作者の一生は、そのように集約できるものであったのだろう。作者がその為に生きたことを否定できはしない。しかし、それは作者の実人生なのであって、彼女が筆をとったのは、その人生の記録のためだけののだろうか。それとも、西園寺家の記録のためだけののだろうか。それだけのために書いたとはどうしても考えられない。何のために書いたのかではなく、本当は自分の何を書き残そうとして筆を取ったのかを、探ることを本研究の主眼目としたい。そして、作者が、その書くという行為によって、結果として到り得た境地とはいかなるものであったのかをも併せて考えてみたい。そのために、先に挙げた前提となる基礎的視点を大切

()
にしながら、本記の記事の取捨選択の意識や表現の底流にある真情を読みとっていくという作業を通じて探ってゆきたいと考える。

第一章 『竹むきが記』の環境

第一節 時代的背景

『竹むきが記』について論じる前に、その環境について概要をおさえておきたい。『竹むきが記』の記事は、元徳元年（一三二九）から貞和五年（一三四九）にわたるものである（内、正慶二年六月から建武四年一月まで中断）。この約二〇年は、日記の記載期間としては短いものであるかもしれないが、五〇余年も続いた南北朝の内乱のちょうど勃発期にあたり、大きく時代が動いていった時期でもある。その時代のうねりを背景として、作者の悲劇も起こったと考えられる。本節では、鎌倉幕府の滅亡から南北朝の内乱に至る時代の動きと収束までを概観し、併せて思想的な背景も追っておきたい。

一 政治情勢

この項は、主として『岩波講座 日本歴史』^{（注21）}に拠って、政治的動向をまとめてみたい。

正中元年（一三二四）九月、後醍醐天皇を中心とする討幕計画が六波羅の知るところとなり、主謀者と目された日野資朝・俊基は捕らえられた。『史料綜覧』^{（注22）} 正中元年九月一九日の条に、次のようにある。

是ヨリ先、北條氏ノ追討ヲ圖リ給フ、六波羅之ヲ聞キ、是日、兵ヲ遣シテ、土岐頼兼、多治見國長等ヲ京都ニ殺シ、藤原資朝、同俊基ヲ執フ、

資朝は、作者の叔父、俊基も日野の係累である（注 13）。これが、いわゆる「正中の変」である。北條政權が必ずしも強固でないとの情況把握によるもので、公家側の初めての公然とした反幕の態度表明であった。その後も後醍醐天皇は、討幕の機を窺い、今度は寺院勢力を頼んだが、これも吉田定房の密告から幕府に漏れた。後醍醐天皇は笠置から逃げのびる途中捕らえられ、元弘二年（一三三二）三月七日、隠岐へ配流となった。この「元弘の乱」を契機として、大規模な内乱となってゆく。

この後、元弘三年閏二月、後醍醐天皇は、隠岐を脱出、五月七日、足利尊氏が六波羅を陥れ、ついに同月二日、新田義貞の軍が鎌倉を攻略する。

義貞ノ軍、極樂寺口ヲ破リ、鎌倉ニ入ル、諸口隨ヒテ潰ユ、尋デ、高時以下、悉ク自盡シ、北條氏亡ブ、將軍守邦親王出家アラセラル、

『史料綜覧』には、このようにある。これをもって、鎌倉幕府は滅亡した。

後醍醐天皇は、この年六月帰京して新政を開始した。天皇は、復古的王土王臣思想に裏付けられた親政政權の確立を目指し、かなり強引な諸政策をとったが、現実的には公武両勢力の調整に悩まされることになった。すでに天皇が目指すような律令制への復帰は不可能な情勢となっていた。

建武二年（一三三五）六月、作者の夫である西園寺公宗の持明院統擁立・建武政府転覆の陰謀が発覚、公宗等は処罰されたが、七月には、北條時行、諏訪頼重らが信濃に挙兵し、鎌倉を占拠する（中先代の乱）。この事件を口実に足利尊氏は、征夷大將軍の地位を要求し、勅許を得ないまま東下、乱を鎮定し、一一月には新田義貞を

討つと称して、同月一九日、建武政権に対し叛旗を翻した。ここに南北朝の内乱が始まる。

この後、後醍醐天皇が吉野に逃れる建武三年一二月までの間に、尊氏は、東国・畿内・西国の大半の武士を傘下に編入し、楠正成・名和長年・千種忠頭等を倒し、義貞を越前に駆逐している。また、建武式目の制定から始め、幕府機構の設立をほぼ完了している。建武二年六月には光厳上皇、豊仁親王を奉じて入京、八月に豊仁親王践祚、翌年一二月には光明天皇（豊仁）を即位させている。当初から足利方の優勢は決定的であった。

このような情勢の中、延元三年（一三三八）五月に北畠顕家が和泉堺浦で、同じく閏七月に新田義貞が越前で戦死し、翌暦応二年（一三三九）八月、後醍醐天皇が吉野で讓位、病死するにおよび、南朝方の衰運は甚だしくなった。一方、南朝攻撃を一段落させた幕府方では足利直義と高師直の対立が表面化し、両勢力の対立も激しくなってくる。そして、貞和五年八月、師直は楠正行の追討に成功した勢いで直義の引退を要求する。師直の要求を好機とみた尊氏は、直義を引退させた。直義は、一旦圧力に屈して出家したが、翌観応元年（一三五〇）一〇月、河内に逃れ、師直追討の兵を挙げる。観応の擾乱の勃発である。以後、擾乱は全国的な規模に拡大してゆくが、直義党の優勢となり、観応二年二月、尊氏は直義の幕政指導への復帰を認めて和睦せざるを得なくなった。その後、高師直・師泰兄弟が上杉能憲に殺され、この擾乱は一応の解決を見た。しかし、再び尊氏と直義の対立が表面化し、このたびは逆に劣勢に陥った直義が尊氏に降ったが、結局尊氏によって毒殺される。

この観応の擾乱がもたらしたものは、内乱の激化と南朝の延命であった。この乱の性格が、単なる足利氏の内訌ではなかったからである。永原慶二氏は「概して後進的な地域に基盤をおく足利一門の守護クラスの勢力と、

畿内・近国を中心とする、より急進的な小領主・悪党的な勢力との、幕政の方向をめぐる対立・抗争を本質とし、これに諸將の勢力争いが絡まったものというべきだろう」としておられる^(註24)。この結果、武士階級の存立の基盤そのものが変質してゆき、幕府は、国人と呼ばれる地方武士層への対策も、禁圧から戦力としての利用へと方針転換していった。それは、抗争の種を抱え込むことにもなり、明徳三年（一三九二）一〇月の南北朝の和談成立まで、土岐頼康と仁木義長との対立や義満時代の管領細川頼之と土岐頼康との対立（「康暦の政変」）など、いく度かの抗争を経験している。しかし、この間にも義満は將軍権力の強化を謀っており、政変とともに義満は自ら幕府の主導権を掌握して將軍專制体制を確立してゆく。

まさに「南北朝内乱を通じて展開した国人層自立・守護権力強化・所領一円化などの一連の領主制発展の成果は、かくして室町將軍家による專制支配の確立へと収斂した」^(註25)のであった。半世紀以上にわたる内乱を経て、足利義満によって室町幕府は確立されたといえる。

また、一連の右の政情をみると、公家方の動向がほとんど大勢に影響を及ぼせなくなっていることがわかる。南朝の延命は、武家方の事情により利用されたための副次的なものに過ぎない。もはや、時代の趨勢は、公家方から武家方へと移ってしまったのである。南北朝の内乱は、明徳三年閏一〇月、後龜山天皇が吉野から出京し、大覚寺に入り南朝が消滅する形で終息した。一応、北朝の勝利という形を取っている。しかし、それはすでに、現実的な権力の移行とは何ら関係のない形式的な仕上げでしかあり得なかったのである。後醍醐天皇の目指した権力の集中は、皮肉にも武家方によって達成されたのであり、もはや公家方に政治権力を取り戻すことは不可能

になったのである。この点を、ここでは押さえておきたい。

二 思想、主として宗教

この時代は、端的に、政治の混乱と社会の動揺としてとらえられるであろう。それは、時代の思想や文化に影響を与え、混沌とした様相をもたらしたといえる。『竹むきが記』について考察する際に、見のがしてならないものが、宗教である。本項では、『竹むきが記』を取り巻く思想状況についてみておきたい。

『岩波講座日本歴史6』^(註26)所収の「内乱期の文化」で大隅和雄氏は、まず鎌倉時代末期の状況について、次の三点にまとめておられる。

1. 天台教学の変質 始覚思想に対する本覚思想の優位の確立から教理体系の研究よりも実践を重んずる観心主義の傾向を強くする^(註27)。それは、天台教学の停滞と墮落以外のなにものでもない。
2. 新仏教の変化と一般宗教の密教化 民衆に基礎を求めた新仏教は、教えを拡大していく中で、民衆の次元での呪術的な信仰との融合を謀らなければならなくなった。加持祈禱と現世利益を求める民衆に対応するために、現世の効験のための行法が発展していた密教が取り入れられることになった。また、貴族の間でも密教は、興隆をみせた。
3. モンゴル来襲による民族意識の芽生え 日本民族にとって初めてといえる外敵の来襲は、極めて素朴な形の広い民族意識を呼び起こした。

この様な状況を前提にして、内乱期の思想は、「中核のないところで新しい思想的な権威を模索すること、また

民衆的な次元で日本的な宗教をきざくこと、そのような問題を民族的なものをひろく汲みあげて行なうことを課題として背負っていたと考えられる。／そして、その上で動乱の時代に対応して、政治的な権威をいかにして正当づけ、古い文化の価値観をいかに変革するかという問題を背負っていたのである」とされている。思想面でも価値観の変動が求められていたことであろう。次には、そのような課題を諸思想がどのように解決しようとし、どのような様相を呈するようになったかを概観しておく。

南都仏教では、全体的に真言密教化がみられるようになるが、天台宗の教学では、經典の理論的文獻的註釈（釈家と呼ばれる文獻主義）を蔑視する口伝天台（口伝法門とも）が成立した。これは、独創的な主観によって断定的解釈を下し、しかもそれを口伝として唯一人の弟子に口決伝授するというものである。しかし、その内容は、「顕密の思想が乱雑に交錯し、禅の偈頌法語の類を濫造して先徳に仮託し、まさしくあらゆる思想の混在」^{（注 28）}するものであった。一方、実践面では円密一致という思想的基盤にたち密教の修法を重視する台密の体系化がなされた。この教相にも、大日經・金剛頂經と法華經との一致説、毘盧遮那如来と釈迦如来の一体説^{（注 29）}などの融合思想がみられる。円密一致からして融合的な発想にかかるものと考えられる。

真言宗では、この時代には、さまざまな教学の興隆があり、密教の教学的集大成がなされたといえるが、現実問題としては、依然として帰依されていたのは現世利益を求め除災招福を願う加持祈禱の法驗であった。

天台と真言の両宗は、すでに前代から「神仏習合思想を触媒として、その新しい教義を摩擦を起こさずに地方の民衆社会に植えつけることができたのである。やがて両宗がさらに本格的な民衆布教にのり出すとともに、よ

り一步を進めた習合理論、すなわち神仏同体説や本地垂迹説が形成される」(註30)という方法を採用してきた経緯がある。ここにも融合的な発想の基盤があったといえよう。

『竹むきが記』の背景として特に重要なものが、浄土教と臨済禅であろう。天台宗では、前代から浄土教も取り入れ、法華三昧と並んで常行三昧が行法とされていた。貞観七年(八六五)には、比叡山で不断念仏も開始されている。平安時代の天台宗の浄土教は貴族社会を背景として展開され、次第に『観無量寿経』に基づく観想が中心となっていた。そして、寛和元年(九八五)、源信が『往生要集』を著し、日常の行法としての念仏を説いた。『往生要集』で源信は、口に念仏を唱え、心に相好を観じながら、実相に観入することをめざしており、日常の念仏に中心をおき、実践的な信仰面を強調した。源信が『往生要集』を著して以降、観想と口称の念仏が貴族から庶民に至るまで階層の上下を問わず広まっていた。

このような浄土教の広がり背景として、鎌倉期に法然・親鸞の専修念仏が成ったといえる。法然は、「貧窮困乏・愚鈍下智・少聞少見・破戒無戒などの社会の多数を占めるものを救済することが仏の本願であることを強調した。その点にかれの宗教の画期的意義がある。法然は称名のみを本願に相応する正定業しょうじょうごうすなわち仏によって選定された行とし、持戒・観想を含めて称名以外の行は助業・雑行としてその宗教的意義を第二次的なものとした。(中略)これらの助業・雑行を実践しうるものが富貴・高才・聡明・有徳に恵まれた少数のものに限られていること、社会のほとんど全部を占めている庶民は、このような作善功德とは本来無縁の存在であり、かれらがそれらを行なうことによって仏の救済にあずかることは不可能であることに気づいたからである。法然のこの

自覚は、それ以前の仏教が、鎮護国家の使命のみを強調して支配階級の利益擁護に墮し、宗教の本来の機能を見失っていたのに対して覚醒を求めたものである。その点でかれの自覚は画期的」^(註 31)であった。そのためもあり、建永二年（一二〇七）二月には、専修念仏禁止が発令される。法然の思想を深化させた親鸞も同様に弾圧を受けている。

しかし、これらの新仏教も布教のためには、民衆の信仰を集めてきた神祇信仰、薬師、地藏、観音等諸仏菩薩の信仰を取り入れてゆかなければならず、時代が下り談義本などでの布教では、本地垂迹思想の論理によって、弥陀（本地）―諸仏菩薩（分身本地）―諸神（垂迹）という大系をたてて弥陀一仏信仰を勧めようとしている。これらは親鸞の説いた一向専修念仏の精神とは遙かに隔たったものと言わざるを得ない。このように内乱期に至って、浄土教においても新たな胎動がみられたが、作者の周辺、貴族社会においては、平安貴族における「僧との交わりによる後世の幸福を棄てることはな」く、「一方では祈禱による現当二世の安穩を願」っていた^(註 32)という状況に概ね近いものであったと思われる。

では、臨済禅においてはどのような状況であつたろうか。日本には奈良時代にすでに禅の思想が入ってきたが、正確に理解されることもなくこの時代に至っていた。鎌倉時代に入り、宋朝禅が受容され初めて臨済禅が伝来したといえる。栄西は戒律重視の思想で興禅を意図した。栄西の没後およそ五〇年を経た鎌倉時代の後半期から室町時代の終わり頃までの二〇〇年間は、臨済禅の隆盛時代だった。ちょうど『竹むきが記』の作者もこの時期に禅への傾斜を深めている。

臨濟禪を大きく二流に分けることが出来る。一つは、応燈関の門流で、自己の究明にひたすら努力した純粹禪といえ、この門流の宗峰妙超には花園上皇・後醍醐天皇も帰依している。もう一つは、夢窓疎石の五山派である。こちらは、幕府に近づき、幕府の保護政策によって勢力を拡大した。五山派では、夢窓自身が密教出身者であり、また彼の師の高峰ももと天台の人であったことなどから、顕密諸宗との融合兼修が行われ妥協的融合的色彩が濃かったといえる（註33）。ここにも諸宗融合の風がうかがわれる。

この他、旧仏教系でみられる信仰には、釈迦信仰（明恵他）、弥勒信仰（解脱上人貞慶他）、文殊信仰（真言律宗の中核をなす）、弥陀信仰（高野山明遍僧都他）、観音信仰、地藏信仰などがある。中でも、観音信仰は、古くから行われていたが、「観世音菩薩の利益を説く經典は、（中略）別行して観音經の名で呼ばれるが、その美しい文章とそこに語られているあらたかな現世利益とによって早くから盛んに信仰された。観世音菩薩の名は法華經のほかにも多くの經典にあらわれるが、中でも浄土家の無量寿經では、阿弥陀仏の滅後に観世音菩薩と大勢至菩薩の成道を説き、大日經による密教では胎藏界蓮華部の主尊とするため、観音信仰はより広い地盤をもっていた」（註34）こと、『竹むきが記』中にも記述のあるごとくである（後述、第四章第一節）。

宗教的な権威を築くためには、基盤となる民衆の信仰を取り入れて超越的な神との統合をはかることが必要とされた。それは、旧仏教でも、また鎌倉新仏教でも同様である。浄土真宗でさえも、一部では本地垂迹説に則り、神々を阿弥陀如来へ帰入させる教えを展開するようにすること先述のごとくである。旧仏教でも真言密教系の両部神道では大日如来に、天台系の山王一実神道では釈迦の垂迹である日吉山王神にすべてを帰入するようになる。

また、これとは逆に、神祇の側から仏教理論を取り入れようとする神道論も現れる。伊勢神宮の祀官であった度会氏による神道説である。特に度会家行は、密教的な思想を基盤としながら、儒教や陰陽道を援用して、仏教に對抗しようとした。彼は、己の心を清浄にすることによって超越的な万有の根元を自得すること、神秘主義的な体験によって超越者と合一することを説いたのである^(注35)。このように内乱期の思想は、統合によって新しい教権を模索し、新たな宗教の確立を目指したが、それは混沌とした融合状況を作り出すのみで、ついに中世的な教権を生み出すまでには至らなかったといえよう。

また、一面では分裂抗争を続ける内乱の時代を反映して、政治権力の正当化の必要性と結びつくようになる。先述した伊勢神道が北畠親房の南朝の正当性を主張するために援用されたのが、その好例である。親房は超越的な神の存在を説く伊勢神道の思想から、天皇の権威を正当化することを考えた。そのために三種の神器を、政治の原理だけにとどまらず、神器の徳を天照大神に帰入させて、神器自体に神性を付与させた。それによって、その授受による天皇の正統を正当化しようとしたのである。

元来日本仏教は、古代仏教から平安仏教まで、王法仏法相依の鎮護国家仏教であった。内乱期にはどうであったかという点、鎌倉新仏教のうち浄土教においては、鎮護国家の志向は認められないが、旧仏教では依然として、仏教と王権とは結びついていたと考えられる。王法が大覚寺統、持明院統の両統に分裂すると仏法もまた分裂を余儀なくされる。石田善人氏は、「大覚寺統の仏教を特色づけるものは密教と禅であるといっている」とされ、持明院統では、後深草・伏見・後伏見の戒師を歴代の天台座主が勤めているとされている^(注36)。

内乱期は、王朝の文化を基礎として組み立てられていた価値体系を破壊していった。その中で、末法思想と現世拒否的傾向も後退してゆく。「新仏教が発点とした末法思想は、広汎な民衆と接触するなかで、内面化された罪障意識は俗化し、現世を宥和し現実を肯定する思想に変わる」（大隅氏前出書）のである。来世と現世の対立緊張は、このようにして内乱期に消えてゆき、現世を肯定する現実的な思想が成長してゆくことになるのである。

内乱期の思想・宗教について、『竹むきが記』の背景として考えられる点について仏教史家の所説を参考にしながら概観してきたが、この時代の特質として、大まかに二つのものが把握できるのではないかと考える。一つは、前代からの神仏習合の発想が依然として存在していたこと、いま一つはその発想を基盤として新たな教権の確立のため宗派間の統合がはかられたが、結局無秩序な混融の状態を生みだしたことである。思想・宗教における混沌とした融合状態は、時代の趨勢そのものであったと、ひとまずとらえられるのではないだろうか。

以上のように、鎌倉幕府の滅亡から南北朝の内乱期にかけて、政治においても思想においても価値体系の変動が求められたのである。そのような時代の趨勢が、『竹むきが記』の背景としてとらえられなければならない。このような状況の中で、作者はどういう思想を志向し、形成していったのだろうか。後に詳しく検討したい。

第二節 作者の周辺

前節では、『竹むぎが記』と作者を取りまく政治的状況並びに思想的状況の二点から時代背景をみたが、本節では、作者名子の周辺に絞ってその環境をみておきたい。当然、それは作者の生家日野家と婚家西園寺家とについての確認作業となるであろう。

まず、日野家についておさえておきたい。はじめに、『国史大辭典』の「日野家」の項（川田貞夫氏執筆）を引用する。

藤原北家冬嗣の兄、参議真夏を祖とする堂上公家。真夏の孫家宗の時に山城国宇治郡日野（京都市伏見区）の地に法界寺を創建し、家宗五世の孫資業が法界寺薬師堂を建立し、それより日野を家名とした。公家としての家格は名家で、代々、儒道および歌道をもって朝廷に仕え、始祖真夏以来、資宣までは権中納言を極官としたが、俊光より以降は権大納言に昇り、ことに重光・重政・内光は贈左大臣、勝光は左大臣、資愛は准大臣に列せられた。また室町時代には時光の女業子が將軍足利義満の室になってより、九代義尚まで日野家の子女が將軍の室となったため勢力を張った。しかし、重光の子義資は將軍足利義教の不興を買って殺害され、一時、日野家は衰えたが、その孫勝光の妹富子が足利義政の室となったため復興した。（中略）日野家は代々和歌で聞こえ、『後拾遺和歌集』の資業以下、重光まで歴代勅撰集歌人を輩出し、江戸時代の資枝も歌人として知られている。日記も、古くは資実の『都玉記』、資宣の『仁部記』などがあるが、江戸時代の歴代の日記は比較的よく残存しており、『資勝卿記』『資茂卿記』『輝光卿記』『日野資愛公武御用日記』などは貴重である。

ここでは、日野家の家格が名家であること、代々学問をもって仕えていたこと、歌人を輩出していること、また歴代の日記が残されていること、作者の祖父俊光から極官が権大納言にあがったことなどを確認しておきたい。作者が、『竹むきが記』という日記を書いた背景にこの生家の雰囲気が大きく影響していたことが充分考えられる。

「名家」とは、弁官・藏人を経て大納言に至る家柄のことで、代々故実を伝承し、才識をもって名を得ている家という意味合いであろう。『倭訓栞』には「名家」について、「公家にいふハ左右の辨官藏人を經歷して次第に昇進の家々也 名ハ功の意 有職才名をもて登庸あるをもて呼り」(註 37)としている。また、『伏見天皇宸記』正応五年(一二九二)二月五日条には「凡日野勸修寺平家等之輩、依勞效立身起家」(註 38)とあることから、この時期すでに日野流および勸修寺流藤原氏と高棟流平氏が弁官・藏人から出身する家柄を形成していたことがわかる。これらの諸流は「藤原氏、就中藤原北家の独占的繁栄は必然的に同氏諸流の分立を促す要因となったのである。(中略)平安末期までには閑院流・日野流・四条流等の藤氏諸流が、或は故実作法の伝承を中心として、或は曩祖建立の寺院を中心に、それぞれ一門・一流を形成して行った」(註 39)という歴史的変遷を辿ってきたものであった。一方、この三流(日野・勸修寺・平)諸家は、平安時代中期以来、摂関家に仕えて家政を差配し、さらに院政時代以降は院近臣として院中の庶務を掌理した権臣を輩出しつつ(註 40)、この時代に至っているのである。このことから、おおよその日野家の家風というものが推量できる。『竹むきが記』中で作者が有職故実にこだわを見せるのも、職掌であるばかりではなく、育った家の環境の影響も考えられる。

作者の祖父俊光、父資名については、『増鏡』第十六「久米のさら山」に、つぎのように評されている^(註41)。
さても日野の大納言俊光といひしは、文保の比、はじめて大納言になりしを、いみじきことに時の人いひ騒ぐめりしに、その子、このごろ、院の執權にて資名と云。又大納言になりぬ。めでたく度をさへ重ねぬる、
いといみじかめり。

極官が、中納言から大納言へ上昇したことへの世評である。これも、俊光・資名と持明院統へ忠勤を励んだ成果であろう。俊光は、『尊卑分脉』によると、「嘉暦元三為勅使下向関東、同年五廿一於彼堺薨」^(六十七) 法名澄寂」^(註42)とある。『花園天皇宸記』の前年(正中二年)六月卅日の条に^(註43)、

此曉前大納言^(日野)俊光卿下向関東、資名卿扈從云々、立坊事、綸旨・院宣相對事等被仰遣也、今度勅使事、
諸人議不一決、予心中案決、縱雖被遣不可有巨難、仍不及諫爭也、

とあることから、この関東下向もそのような用向きであったことが推量できよう。

資名も、父俊光と同様持明院統に仕え、量仁の立坊のために働いていた。『太平記』巻第九の「主上・々皇為三宮」被^レ囚給事付資名卿出家事」の章段に「日野大納言資名卿ハ、殊更當今奉公ノ寵臣也シカバ」^(註44)とあり、光厳天皇の寵任を受けていた。それは、『花園天皇宸記』元亨元年(一二三二)四月廿五日の条に「俊光卿所養宮參^(後伏見上皇々子)明後日可入梨本宮室之故也」とあり、同廿七日の条に「今日若宮」上皇第一皇子、前大納言俊光養君」入承鎮親王室」とあることからわかるように、資名の父俊光が光厳天皇の乳父であったことにもよるのではないかと考えられる。俊光は、この他、後伏見天皇・花園天皇の乳父でもあった。『公衡公記』所載の

「即位大嘗會等記」(後伏見天皇は、『本朝皇胤紹運録』によると永仁六年一〇月一三日即位)^(注45)に、「但着御々装束之間、攝政・春宮權大夫^(洞院實泰)・藤中納言候御前、又御高御座之後、実泰・俊光等卿候其近邊每事口入云々、後聞、法皇^(後深草上皇)仰^(云脱乙)於俊光卿者御乳父也」、「此外藤中納言^(日野俊光)「御乳父、」」とある。また、同じく『公衡公記』所載の「花園天皇御即位記」(花園天皇は、『本朝皇胤紹運録』によると延慶元年一月一六日即位)に、「着御々装束之間、攝政・公顯卿・爲兼卿「衣冠、下絰、」」・^(日野)俊光卿「同、以上三人御乳父也、」候之」とある。

資名は、元弘三年(一一三三)三月一二日、赤松則村が京都に入り六波羅の兵と戦うというので、光厳天皇・後伏見・花園兩上皇が六波羅の北方に難を避け行幸した折、同行している。次に、『統史愚抄』^(注46)の記事を挙げる。

十二日乙巳。則村入道「圓心。赤松。」逐六波羅敗軍襲入于京師。西剋。主上。院。新院御同車。但鳳輦垂帷。在御車前。擬行幸躰。迂幸六波羅館。「北方。越後守仲時館也。」公卿日野大納言。「資名。」同中納言「資^明卿。」二人。堀川大納言「具親。」已下上達部三四人自路次參會。及殿上人武士等供奉。
(以下略)

とりあえず随行したのは資名と資明の二人であったということは、いかに資名が光厳天皇や兩上皇の側近く仕えていたかということを証するといえよう。同じ年の五月七日、尊氏等の軍勢が京に攻め入り、北条仲時、時益等が光厳天皇、後伏見・花園兩上皇を守護し東国を目指して脱出した時も供奉している。同じく『統史愚抄』の該

当個所を引用してみる。

七日己亥。今曉。前左少將忠顯。及前治部大輔高氏等率諸國軍勢數千騎。焚八幡。山崎。宇治。〔或有勢田。除之。〕竹田。深草等人家。攻入京師。六波羅勢數剋防戰見敗。子刻。〔或作丑。〕主上。院。新院。東宮等出御六波羅。被廻車駕于東國。公卿日野大納言。〔資名。〕坊城中納言。〔俊實。〕日野中納言。〔資卿。〕〔中略〕供奉。六波羅武士越後守仲時。左近將監時益已下奉守護之。内侍所爲女官沙汰。被奉遷西園寺大納言〔公宗。〕北山第。大納言〔公宗。〕不從東國行幸。歸第云。

(以下略)

九日辛丑。今曉。出御觀音寺。車駕至番場。〔中略〕越後守仲時已下數士死之。日野大納言。〔資名。〕坊城中納言。〔俊實。〕冷泉前中納言〔頼定。〕等於此驛落飢。

近江の番場において五辻宮に攻められ、仲時は自害し資名等は出家したとある。『太平記』卷九に詳しい。『尊卑分脉』においても、そのことは確認できる。資名に「元弘三五十於江州馬場出家法名常寂理寂 依天下事也」と注記する。同じく『尊卑分脉』によると建武五年五月に薨じている。資名の死については、『竹むきが記』中にも触れられている。

また、洞院公賢の日記『園太暦』(注47)が、貞和二年(一一三六)二月三日の条、光厳院の皇子弥仁親王(後光厳天皇)の著袴の記事に、

三日(二宮御著袴事)或晴或陰、傳聞、今日上皇第二宮御著袴云々、於新御所有此事、左宰相中將陪膳云々、

芝禪尼「故資名卿後室、」養君也、

としており、同じく観応三年（文和元・一三五二）八月一七日、後光厳院踐祚の記事中にも、

十七日、丁巳、天陰、雨脚滂沱、（中略）踐祚儀「御元服渡御、」事 後光厳院也、「于時十五歳踐祚」

（中略）大王「年來故資名大納言入道養君、入道薨去後、後室禪尼奉養育、可有御入室妙法院門跡之由治定、而如此聖運至、凡慮難覃事也、御年十五歳、新院（後光厳）御同胞也、未及立親王、」（後略）

としていることから、父俊光と同様に資名がいかに持明院統で重用されていたかがわかる。また、『竹むぎが記』の作者は、後光厳天皇の乳父子ということになる。

他に日野家の係累には、先に触れたように後醍醐天皇（つまり大覚寺統）の許に仕えていた資朝（資名の兄弟）、俊基らがいる。『花園天皇宸記』元亨二年一月六日の条には、俊光が資朝を義絶した記事がある。

此日有仰、前大納言（日野）俊光卿事、以室家（藤原平子也）三品仰之也、是（日野）資朝義絶間事也、委曲不可記盡、父

子之間事、強雖不可及口入、又爭可見放乎、其上聊有參差事、又有子細之間所仰含也、

花園天皇は、口出しすべきでないとしながら、含みのある表現をしている。資朝が謀叛の発覚により捕らえられたのが正中二年（一三二五）であるから、この義絶もおそらくその辺りの資朝の後醍醐天皇寄りの動向も一因ではないかと推測される。

作者の兄弟のうち、氏光は、『尊卑分脉』によると「中先代隠謀之時依公宗卿命書院宣 仍元弘三八二被誅了」とあり、持明院統に仕えていたことがわかる。また、同じ俊光の息、資名の兄弟資明も、資名と同様持明院統に

仕えている。同じ係累でありながら両統に別れて仕えるというのも、日野家のような家の宿命であるといえよう。本記の作者は、その叙述から父資名、叔父資明等と同様に持明院統の天皇に典侍として仕えていたことがわかる。そのためもあり、作者名子は、持明院統の主要な公達、西園寺公宗と出逢い結ばれることになる。次に、西園寺家の政治的な立場について見ておきたい。

まず『国史大辭典』の「西園寺家」の項（今江広道氏執筆）をみておく。

藤原氏北家閑院流の公実の男道季（一〇九〇—一一二八）を始祖とする堂上家。家格は清華。家業は琵琶。江戸時代の家禄五百九十七石余。鎌倉時代初期に通季の曾孫公経が出て、大いに家名を揚げた。公経は将軍源頼朝と姻戚関係（頼朝の同母妹が一条能保に嫁して生んだ全子を妻とする）にあったことから幕府に心を寄せ、関東申次となって公武間の周旋にあたった。承久の乱のときに幕府に通じたことはよく知られている。乱後、幕府が後堀河天皇を擁立したのも公経の進言によると思われる。京都北山に北山第と西園寺を造営し、西園寺殿と呼ばれ、これが家名の起りとなった。また後嵯峨天皇に孫女婚子（大宮院）を入内・立后させて皇室の外戚となる基礎を築いた。子孫も関東申次の継承とともに、持明院・大覚寺兩皇統にそれぞれ女子を入れて外戚となり、摂関家をしのぐ勢威を誇った。しかし鎌倉幕府が滅亡し建武新政が始まると西園寺家の権威は失墜した。若い公宗は頼勢挽回のため北条氏の遺臣と謀反を企てたが、弟公重の密告により発覚、誅殺され、家は公重が継いだ。やがて公重が南朝に候したため、公宗の遺子実俊が継いだ。昔日の権勢はなくなった。（以下略）

西園寺家は清華で、日野家に比して高い家格の家であったこと、関東申次という要職にあり、そのことによって権勢を誇っていたこと、しかし鎌倉幕府の滅亡によりその権威が失墜し、挽回はならなかったこと等をおさえおくべきであろう。

「関東申次」は、「朝幕間の政治上の連絡を任とするが、就中幕府より朝廷方（時の治天の君）への奏言を申次ぐことに重点が置かれていたのは、その名称の示すとおり」^{（注48）}であり、院宣や幕府からの文書などの伝達はずべてこの申次が行ったのである。寛元四年（一二四六）一〇月、失脚した九条道家に代わって西園寺実氏（公経息）が関東申次になって以後は、西園寺氏が、代々その任を継ぐことになった。朝幕間の窓口を一つにしておくことは、混乱を防ぐ意味で政治上必須の措置ではあったのであろうが、重要な朝政は幕府の同意を得て行われたため、「関東申次は宮廷政界に於て卓越した地位を占めるに至った」^{（注49）}ので、その職を独占した西園寺氏の勢力はその後さらに大きくなっていったという経緯がある^{（注50）}。

公宗の謀反については、後に詳しく検討するのでここでは触れない。しかし、右のような職にあることで勢力を保ってきた西園寺家としては、その復権を目指そうとするに際して、いままでの強い結びつきからして鎌倉幕府の遺臣と通じることは充分考えられることであろう。そしてその動きが、反後醍醐、反大覚寺統となることも自明であったはずである。一旦失った権勢を取り戻そうとしての公宗の動きが、『太平記』卷十三や残されている史料の描くとおりの謀反であったのかどうか、確認する手だてはない。しかし、鎌倉幕府を滅亡させて政権を取り戻し、勇躍、己の理想とする新政を始めた後醍醐天皇が、その膝下に不安定な要素を抱え込んでいたことを

()
象徴する事件でもあった。また、この一件は、大きく動いていく時代のうねりに翻弄された一つの家の悲劇ともいえよう。前節で見たように、多くの犠牲を強いたにもかかわらず、西園寺家のみでなく公家の手、天皇の手に政治の実権を取り戻すことは、もはや不可能な情勢となりつつあったのである。南北朝の内乱の勃発期にちょうど生き合わせた作者は、その日記『竹むぎが記』に、どのような世界を描きだすのであろうか。次章から具体的に追ってみたい。

第二章 『竹むきが記』の基本的性格

第一節 作品の構成

『竹むきが記』は、文学史的には平安時代以降の女流日記文学の掉尾を飾る作品とされている。そもそも「女流日記文学」とはどのようなものが、その範疇として考えられているのだろうか。

日記文学の発生は、『土佐日記』をもって嚆矢とする。紀貫之は、女性に仮託することで、公人としての立場を離れ、一人の人間としての本音をいささか記し得た、つまり虚構による自己表現を試みたという点で評価されている。『土佐日記』に遅れること四〇余年にして『蜻蛉日記』が成った。時の権勢家藤原兼家の妻となった道綱母が、その内面的な苦悩を赤裸々に綴ったものである。彼女は、夫兼家と自分との関係、距離において心の隔離をひたすら嘆いている。彼女は、日記を書くという行為によって、己の人生を再体験し、乗り越えようとした。それは、書くことによる自己確認の営為であったということができよう。『蜻蛉日記』は、『土佐日記』より遙かに深く人間の生を描いている。「蜻蛉日記が日記文学の独自な性格を典型的な形で作り出した最初の作品であったことはいうまでもない。その独特な文学的達成において、事実を貫く真実の表現をより内面化し、土左日記の自己表現をさらに高度に変質しえた文学史的意義は、きわめて重要である。たしかに蜻蛉日記は土左日記の正當な後継者ではない。しかし正当以上の後継者である」^(註51)と文学史には位置づけられる。この作品が、「女

「流日記文学」の始祖ということになる。これを継承する形で、以後の女流日記文学は多様に展開する。それらを成立の順に列記すると、次のようになる。

『和泉式部日記』―『紫式部日記』―『更級日記』―『讃岐典侍日記』―『建春門院中納言日記』―『建礼門院右京大夫集』―『弁内侍日記』―『うたたね』―『十六夜日記』―『中務内侍日記』―『とはずがたり』―『竹むぎが記』

これらの中には、物語という別名を持つ『和泉式部日記』や家集として分類されることもある『建礼門院右京大夫集』なども含んでいる。それは、多様性の証左でもある。秋山虔氏は、「日記文学の形成」と題する一文で日記文学の本質を次のように締めくくっておられる（註52）。

日記文学を一つの文学ジャンルとしてとらえるとき、そこにはおのずからいくつかの特質が数えあげられるであろう。またそれぞれの作品を見ても、素材としての実人生経験は、作者によってさまざまであるから、したがって日記の性格もさまざまなものとなる。（中略）諸作品のそれぞれが、いかに特異であり個性的であるか、実感されるところである。にもかかわらず、これらを日記文学として一括的にとらえるのは、一に日記が単なる記録ではなく、作者がかげがえなきわが生のあかしを、そこにつむぎだす持続的な行為の場であるということである。それを不用意に自己告白録であるとか、またいわゆる私小説とか説明することでは当を失する。実人生経験に抛りつつも、その実人生の経験からの要請として、そこに自己自身を転移して生きる営為であるということが出来る。

概括的にとらえれば、氏の所説のとおりであろう。これをもう少し細かい存立要件としてとらえなおしてみると、まず第一に、「日記文学は、他者に語ることによって、他者への共感を求めて語ることであり、そこには自身の過去を語りかけることを媒介として回想する表現方法」^(註53)をとることが挙げられる。回想の記であること、多少の差はあれ対読者意識のあることである。このことから、記事が必ずしも日次ではなく、その選択が作者の意識、執筆意図に応じてなされるということもおこる。そこから、作者の主題意識を探ってゆくことも可能となるのである。

いま一つは、女流日記文学の特質といえる、作者にとっての書くことの意味であろう。かつては、自照文学とも呼ばれたように、女流日記文学の作者達は、日記を書くことにより自らの人生を再体験し、それによって自らの心の深淵を覗き込んで、自分の人生の意義をとらえ直していった。それがとりもなおさず彼女たちの生きる意味となっていたと考えられる。書かれていった体験的事実は、ことばに紡がれることによって、新たな意味をもち始める。そのような行為を、「生きる営為」といわれたのであろう。抽象的な表現ではあるが、その具体的な意味は、それぞれの作品、それぞれの作者によって種々の様相を呈するであろうことは、容易に推測できる。なお、表現形式としては、漢文体から解放され比較的自由に感情を込められる仮名による表記も挙げられる。仮名の使用がなければ、これだけ多くの女流の日記文学は生まれ得なかったであろう。

史的展開として、中古のものに較べて、中世のそれは、「作品に映し出される内面はやや奥行きに乏しく、(中略)全体としての存在感はやや淡い」^(註54)とされ、「中世の女流日記文学は、中古の女流日記文学のさま

さまざまな側面を継承しながら、質を次第に変えていく。その最も大きな変化の一つは、これまで述べてきたような、自己を作品の中に創出するといった意味が薄れ、むしろ与えられた自己の生き方を、あるいは深刻に、あるいは軽妙に、感受する姿を色濃くしている」^(註55)とされることが多いが、中世という混沌と激動の時代を背景としていることも考慮されなければならない。女房が、あるいは貴人の妻が、一対一の個の世界に没入し、その内面世界にのみ入り込めていた時代は、すでに終焉を迎えていたのである。

源流としての女房日記^(註56)の存在は常に意識されなければならないであろう。中世女流日記文学においては特にそうである。『竹むきが記』においても、日記文学以前の「女房日記」としての性格が濃いことを指摘できる。それにもかかわらず、本記は、単なる「女房日記」を越えた、いま確認したところの「日記文学」であり得る要件を備えていると考える。以下では、その点を視野に含めて考察してゆきたい。

『竹むきが記』として現存するのは、先述の如く、上巻は元徳元年（一三二九）一月から正慶二年（一三三三）六月頃まで、下巻は建武四年（一三三七）から貞和五年（一三四九）初夏あたりまでである。上下巻の間に約四年半の断絶がある。この中断の間に何が起こったのか、また、なぜ日記が途切れているのかについて考えなければならぬ。しかし、このことについて考察する前に、この日記の基本的性格について考えておきたい。

その点を明らかにするために、この日記の構成について確認する作業を行うことにした。まず、記述内容から上巻を七八段、下巻を一〇一段に分かつ。それぞれの記事内容と日付の明示されているものは、その年月日、また内容が公事にかかわるものか、私的なものかについての別、他の史料でも確認できるものについてはその史料

Ⅱ『竹むきが記』構成表Ⅱ

略記号は、次の通りとする。

月日 *…必ずしもその日とは限らない場合（他の史料から日付の確認できないもの）

公私 ☆…公事そのもの △…事件への言及 ○…私事

史料 宸…花園天皇宸記 史…史料綜覧 愚…統史愚抄 剣…剣璽渡御記 即…光厳院御即位記

【】内 作者の役目

なお、本文は「新古典文学大系」による。

段落	年号	西暦	月日	記 事	公私	史料	心 情 表 現	備 考
上1	元徳元年	1329	一二／二八	春宮元服 内裏行幸 指図の縮写 仙洞にて御遊（伝聞）	☆	宸・史		
2					☆○			改元329
3					☆	史		史料により日にちに違い
4	元弘元年	1331	八／二四	後醍醐、内裏脱出	△			
5			二五	後伏見・花園・春宮、同車にて六条殿へ	☆			26日より後か
6			* 二六	六波羅の北に御幸 後醍醐笠置落ちの次第聞こえる	△ ☆	史 27日		
7			九／二〇	春宮、六波羅より土御門殿へ	☆			
8			* 〃／二二	踐祚（皇の御座の御剣で代用）	☆	史・愚20日		
9			〃／二九	笠置落ち、先帝六波羅へ	△	史・愚二月3日	その程の事は書きもとめず	
10			一〇／一〇 比	剣璽返還【典侍】	☆○	宸・愚・剣 10月6日	めでたしとも言へばおろかなる事にぞ侍し 十月十日比にて侍しにや	
11			〃／二三	内裏行幸・剣璽安置	☆○	宸	手になる、契さへぞおろかならぬ心地し侍し	装束 和歌①
12				神璽の筥包みかえ（苦勞する様子）	☆○			
13				典侍・内侍当番で剣璽の伽をする	☆○		故竹林院入道左の大臣、沙汰し置かれ給御調度どもなれば、まことになをざりなるべきにもあらず…好ましげに美しかりき	西園寺家への特別な思い入れが陰にあり
14				玄上の扱い、調度類など	☆			
15			一一／朔	日蝕・降雪	○	史（日蝕）	例の埋もれにたる身の癖（作者の引っ込み思案な性癖）	公宗初登場
16				月のくまなき夜、藏人町へ出御	○		声さへをかし…摺らる、沓の音までも雲井に冴ゆる心地して、をかしくのみぞ聞きなされし	視覚・聴覚による臨場感あふれる描写
17			一一／	賀茂臨時祭 行事の次第の記述（女官としての緊張感） 行事の後の様子	☆		庭火のかげもしめりはてぬ…しほれはてて見ゆ…いとゞしくぞ見えさせ給…いとゞしほれはててぞ見え侍し	抒情性 和歌②
18			一二／下の午の日	御髪上の典侍として参内の途次の思い	☆○		いと深くなりにかば、所からも分きて色そふ心地するに、一人見るは甲斐なくぞ侍し	誰と見たかったのか 和歌③
19			〃／二八	内侍所の御神楽に行幸【典侍】 行事の次第	☆○	宸 17日	雲井に澄みゆく心地して聞えしかば、何となく思ひつゞけし	詳細な描写 装束など 和歌④
20	元弘二年	1332	正月 三が日	四方拝以下正月の行事の次第 御膳を朝餉にて差し上げる	☆	宸・史		
21			〃／二	春の節、御方達の行幸・御幸、北山殿へ	☆	宸・史		調度類の詳細な描写
22				正月の間の女房の動き・装束など	○		樋洗ども装束き…練り続くもおかしう見ゆ	表面的感想 有職故実的

段落	年号	西暦	月日	記 事	公私	史料	心 情 表 現	備 考
23	正慶元年	1333	*三／一三	八幡臨時祭・試案？	☆	宸・史二日 (試案)	所／＼より参れる花、御溝水に流さる夜に入まで流るゝさまも面白かりき	
24			／一六	由の奉幣にて神祇官に行幸 一連の動作の詳細な描写	☆	史・即		
25			／一二	光厳院御即位【襄帳】前日より里に退出し、この日参内	☆○	宸・史・即		里の様子・休幕のしつらい 装束・調度等
26				儀式を前にした作者の動き	☆○	同右		和歌⑤⑥
27				即位の儀 (一連の次第／＼公卿拜／＼禄)	☆○	同右	唐めける御装ひには、いとゞしく世に知らぬ御光加はりてぞ見えさせ給し：唐めきたる装ひども、我世の事とも見えず、いと珍し	
28			四／二八	改元 *女叙位で上階(従三位へ)	☆○	宸・史・愚 二日		種々の禄について詳記
29			祭の頃	参内	○			自分の装束 簡略な記事
30			祭の日	賀茂祭の当日	☆○	宸・史二日	祭の日は警固の姿どもをかしう見ゆ	
31			七／	常磐井殿に初めて行幸	☆		よろづおろかならぬさまにぞ聞えし	作者伺候の折
32			八／	常の御所にて稚児の舞(幸若)御覧	☆○		あひしらはせ給しをかしかりき	衣裳の擬った 様を描写
33			九／	長講堂供花【陪膳にたゞ一人候】	☆○		迷ふ雲もなく空澄みつゝ池の面もことさらに曇なく見えて、いと面白く侍し	抒情的 和歌⑦
34				供花の後の夜の情趣ある様	☆○		いとゞしき御光、言はん方なく見えさせ給：さま／＼に美し：類あらじといみじう見えさせ給	
35			神無月	御禊の行幸、前日、内侍習礼を御覧 一連の行事の進行、列席の人々の様子など	☆	宸・史		
36			一一／四	院の拍子合 所作人・曲目	☆	宸		
37			／七	新院の拍子合 同右	☆	宸・史		
38			一一／一一	官司に行幸 五節の舞姫の衣裳	☆	史		
39			丑の日	帳台の出御(試案御覧)	☆	史		丑の日二日 公宗を注視
40			寅の日	殿上の淵酔	☆	宸・史		和歌⑧
41			卯の日	標の山を引く・御前の試・殿上の淵酔	☆	宸・史	風吹さえて、袖に玉ちる霰の気色などいと面白くぞ侍し	身近な人の様
42			辰の日	廻立殿の行幸(御湯の事あり)			三位殿、忍びて侘び給もをかしかりき	
43			／一五	節会	☆	宸	彼方此方と通ひ参りつゝ、身も苦しきまでぞ覚え侍し	作者の立場
44				清暑堂御神楽・御遊 所作人・曲目	☆	宸		
45				五節所御覧などその折の奉りもの	☆○			
46			午の日	いつの夜にかの思い出	○			
47			二月初	豊明節会	☆	史		和歌⑨
48			ある日	公宗との思い出	○		いと艶なりしも、心なき身にはさしも思ひわかれざりしさへ、思ひ出らるゝ端にありける	突然の語り出し 臚化表現
49	正慶二年	1333	春立つ日	公宗より求婚の歌を送られ、返歌する	○		只今の心地して、いとあはれにぞ思ひ出られける	和歌⑩⑪

段落	年号	西暦	月日	記 事	公私	史料	心 情 表 現	備 考
50			正月／一二	春の節、方違で別殿へ里から参内 陪膳に候う	☆○		とかくむつかしき事ありてすべり出でぬ	
52				行事の後、御前で 暁に退出 (最後の参内の思い出)	○		置物：いひ知らず美しかりき	
53					○		明はなる、横雲の空、いとをかし… それを限りの百敷なりけるも、いとあはれにぞ侍ける	
54			／一二	女院の御方御入内	☆			日付重複
55				白馬の節会 (伺候の女官について)	△?	史		
56			／一六	(女踏歌節会)	△?	史		
57			／二〇	出仕の予定であったが延期、世の中 騒然とする	△○		まして人知れぬ通ひは道絶えぬべうな ん	△○を直結させた書き方
58			数日後	世情平靜化、しかし公宗とは会えず 和歌を贈られる	○			和歌⑫⑬
59			少し世も心のどかになりぬる比	公宗に言わず里から参内しており、 公宗と会えなかった折の歌の贈答	○			和歌⑭⑮
60			その春	子の日の松の行事の折、公宗との事 を院に押揃された思い出	○		顔の置き所なきとかや、いとわびしう 思ひ居たるに：折しもいとわびしく 筆取るべうも覚えざりしかば、とかく 紛らはしつゝすべり出侍し、心の鬼も をかしと思ひ出でらる	
61			後二月初め	体調悪く里へ退出	○			
62			／二〇余	体調戻り、常磐井殿へ参内 妊娠か と花園院にからかわれた懐かしい思 い出	○		猶とらせ給て、療治すべきやうなどと かくの給はせしも、いとをかしうぞ侍 し：占を問ひ聞へなどせしもをかし かりき	
63			*三／一六	六波羅へ行幸 その騒然とした様 【無理をして参内】	△○	史・愚二日	我も人もたゞあきれまよふほかの事な かりしかば、僻事もあらむとて、書き もとめず：夷姿どもいと近く見えし も、あらぬ世とのみぞ覚えし	責任感の強い 作者の姿
64			その夜	赤松勢が攻め寄せるとのこと、女 房も脱出 その緊迫した様子を詳述	△○		いと本意なかりき：いかになるべき 世にかと、各かきくれつ、	
65			翌日	公宗、六波羅より文を寄せる	○		身の程にはあらず由ありてぞ見え侍し	使者の装いに さえ好意を抱 く心理
66			*	公宗の配慮で宿を移る	○			
67			卯月二〇余	公宗、事の序といって来訪	○		秋の空めきたる暁の眺めは、さらでも あはれなるべきを、これや限りとなべ て世を思ひ乱れたる折からのあはれに、 まして行くもとまるもいと心細し：… わづかに残りつる月影も見えずなりぬ れば、何となく思ひ続けられしものをか し	抒情的に描く 和歌⑯
68				政情の混迷振りに対する感想	△○		あさましともいみじとも言はん方なし	
69			五／五	公宗より歌が送られてくるので贈答	○			辞世のような 詠みぶり 和歌⑰⑱
70			五／七	高氏、六波羅攻撃	△○		差し当りてはあきれ惑はる：夢現と も思ひ分れず：玉しぬも身にそはず 思ひ明したるに：かきくれつ、思ひ 惑ふ	

段落	年号	西暦	月日	記 事	公私	史料	心 情 表 現	備 考
71			／九	転居 この宿↓御堂 里↓安居院の寺へ	○		御行方知らぬ御事どものみいと悲し ：動くべき心地もせぬを、人々もす すむれば心弱くぞ立ち出ぬる…いと 浮きたる心地して明かし暮す	
72			／一〇	公宗方の女房作者の所在を尋ねあて 作者、気の進まぬまま北山へ移る 公宗、天皇の御供を全う出来ず	○△		御所／＼とめ奉らせ給由聞えしかば、 いみじともさらに言はん方なし	和歌②
74			*	氏光、流れ矢に当たり負傷。この事 について公宗より見舞いとそれへの 返歌	△○		さらに驚かるゝ世になん有ける	
75			／二七	三院、都に還御。父資名、兄弟房光 出家	△○	史・愚8日	心より外なる身をさへぞ思ひ乱れける 程なき身をさへあつかはるゝもいとは かなし	
76				里帰りも文通も許されず思い悩む 気弱な公宗に困惑する作者、が周囲 の説得に出家？を思い留まる公宗	○		皆あらぬ世の心地しつゝ、さらに悲し ：いかになり行く身ぞと、万に浮き たる心地して思ひ乱るべし	
77				公宗の正室となるか？都の有様に心 を痛める。行く先の不安。	○			
78			六月半ば	実俊、真魚始の儀式	○			公卿補任 建武四・一〇 八従五位下
下1	建武四年	1337		実俊、右大臣殿へ。序でに五十日百 日なども執行	○			女房日記的筆 致
2			一二／二二	右の儀式に当たったの感慨	○		既に絶えさせ給へる御流れ、改められ ぬる、いとめでたき御事になん…並 ぶ方なういみじ	まずこの思い を表明してお きたかったの か
3	建武五年	1338	三／一九	夜中、資名邸出火	△○		夢を見たる心地しつゝぞあきれあへり	
4				早急な再建。四月、宮も入られる	☆○			
5			／二〇頃	北小路の念仏へ二位殿と同道	○			
6				父の不調を聞く	○		うちつけに苦／＼しうをあれば、いと あさまし	
7			五／二	危篤の使者が迎えに来る 未の刻、資名没	○	史	ともかくも言の葉もなし 空しう見なしぬる心の中ども、言はん 方ぞなき…憂世の理もさらにぞ驚か れける	
8				中陰の程の出来事（勤行・雄、しか らぬ事・宮の御方、侍従の君の居場 所）	○		一筋に悲しあはれのみにもあらず、 追善の営、なを次なるにやと、いと悲 しうぞ侍	日野家の家督 の事か？
9	暦応二年	1339	正月	前右大臣殿、没	△	史・愚16日	いとあへなくあはれになん	
10			一二／二八	実俊、深鍛の儀式のため、北山へ 永福門院が実俊の利発さを喜ばれた 話を伝え聞く	○			我が子を誉め られた事に対 し感想を述べ ない
11	暦応三か		如月中旬	天王寺詣 道行き	○		まだ知らぬ旅の空、いと珍し	文学的記述 和歌②④
12				住吉詣	○		来し方に帰る身ならましかばと、思ひ 続ける事多かるは、神の御心もいとほ づかしうなん	自省の言葉
13	暦応三年	1340	五月頃	新女院、出家	△	史29日・愚	いとあさましき御事にぞ侍ける	

段落	年号	西暦	月日	記事	公私	史料	心情表現	備考
14			六／一九	東北院の僧正、没	△	史	あはれにいみじとも、言へばさらなり さま／＼にのたまへるも御理なれば、 心弱く思ひ立たれぬ 何処もありしに変わねば、面影浮ぶ事 多し：・実にかゝらぬ世なりせばと、 あはれに見ゆ	北山入りを躊躇する心理
15				実俊・名子母子、女院の意向で北山殿に移居 北山に戻っての感慨	○			
16				北山での生活、女院の実俊愛育ぶり	○			特に感想を述べない 和歌②⑤②⑧
17			暮	北山第へ御方違の行幸、実俊の名誉	☆			行事の次第等
18	暦応四年	1341	四／	萩原殿内親王、持明院殿へ入内	☆			晴れがましい記事
19			八／	徽安門院御幸始（北山第の永福門院の御方へ）、実俊の名誉	☆○			
20			九／	長講堂にあった神木、帰座 供奉の人々、見物の人々など	☆	史・愚 8月19日	すべて由ゝしなども言はんかたなくぞ 見えさせ給ふ：・いとめでたくなん	
21			一〇／	院の御方の姫宮、永福門院のもとへ入らる（実俊への降嫁を前提としたもの）	△○			
22			一二／七	実俊、元服 行事の詳細な描写	○			記録的筆致
23			／八	別当と和歌の贈答	○		昨夜の儀よろづいと由ゝしう、昔に恥ぢざる由など	和歌②⑨③⑩
24				將軍より馬・太刀を贈られる	○		先例にも叶へれば、更にめでたくぞ侍った吉事	有職故実に叶った吉事
25				春の除目で中将に、実俊八才	☆○	公暦応四		
26	暦応五年	1342		北山へ御幸始、実俊の名誉 作者も積極的に補佐（宝蔵から花立て一対を捜し出し献上）	☆○	史 1月28日 愚 1/28某所	「：猶異なりける御家の名残にこそ」 など、世人も申侍とかや：・久しく絶えぬる御幸にて：・いとめでたかりき：「かばかりめでたき勅書なれば」とて給はり置き侍ぬる	西園寺家の名誉に積極的に参加する作者当主の母としての自信
27			如月／中の十日余り	忍びて石山詣 道行（逢坂の関↓関寺↓石山）	○		明日知らぬ世はこれや限りと、あはれならずしもなし	
28				石山寺の縁起				興味を持ったのか詳記
29			次の日	桜谷詣	○		すべてをどろ／＼しき	
30				下向、日吉を目指す（志賀の浦↓唐崎）景色など			おかしければ、過ぐる名残も慕はるゝ道にぞ侍ける	
31			弥生の比	若宮詣の途中、長講堂を再訪	○		思ひ出づる昔語りもせまほしきを、花物言はぬ憤ひさへぞ恨めしかりける	迷る思い
32	何時の年か			御八講の比の思い出	○		取り集め思ひ続けるに、涙さへこぼれぬ	回想頻り 和歌③④
33				御影堂での思い出	○		供花の座を見るに、袖を連ねし面影浮びつゝ、いとなつかし	
34				御堂にて、昔御鐵法の頃の院の思い出	○		その世の御面影も更にぞ浮び侍ける	作者一人で御供
35	暦応の頃			鎌倉の二品（尊氏）との交流 例の家門の沙汰につけて、卯月永福門院から歌	○			和歌③②
36			その頃	按察の二位殿から、公宗がある人の	○		恨み給事もあるにやと思ひ合する事も	この記事を入

段落	年号	西暦	月日	記 事	公私	史料	心 情 表 現	備 考
37			春の末	永福門院の病、いよいよ重くなる	△○		あるに、更に悲しう思ひ続けらる	れた意味は？ 和歌③
38			五／七	永福門院、崩御	△○	史・愚	いとゞあはれに悲しうなん 一方ならぬ御名残も言はんかたなし	同道した公重 への感情 対立は衆知だ ったか
39			／八	遺言どおり石蔵へお移しする	△○		「いまはの御際にしも、御本意ならぬ 御事ならんかし」と、人／＼も皆あき れたる様どもなり	口惜しさ溢れ る書き方
40				盛大な儀式もない事も逆縁のせいか と思えば悲しい	○		：いと無念なる御事にぞ、世人も申侍 ける。故法皇の御方おはしまさましか ばと、前後のさかひも今更に恨めしう なん	
41				女房たちも散々になつてしまうこと への感慨	○		更に又かきくれ侍ける	
42			七／二五	中将（実俊）拝賀 供奉の人々、進 行の次第、贈り物など詳記	☆○		いみじう晴れ／＼しきさま也：猶靡 るまじき家の名にても、いと頼もしく 思し召さるゝさま、くる／＼うけ給る もめでたくぞ侍ける	
43			八／二一	菊亭大納言、没	△	史	あはれに悲しうなん	
44				念仏への帰依と不審	○		いさ、か不審なる事侍ける	仏道修行への 傾倒
45				霊鷲寺の長老へ疑念を問う	○		生死の根を切らん事はこの修行なるべ きにこそと思ひ知らるゝ	臨濟禪
46				日々修行を志すも悟りは遠い	○		覚むる現はいつならんと悲し	和歌③
47				仏道修行への姿勢 内には仏道、外 には家門安全と二股をかけて忙しく 興遊もままならない	○		内には道行を励み、外には家門安全を 念ずれば、内外ひまなくして、花を玩 び月を愛づる情も知らず	修行に徹しき れない自分を どう考えてい るのか
48				北山第の風情を讚美	○		事にふれつゝ、憂世を忘るゝつまにぞ侍 べき	興遊の連想か らか？
49				北山第の諸堂、不断勤行のことなど 讚美	○		心も澄みて聞ゆ	
50	康永三年	1344	三／	叙位 拝賀、直衣始	☆	史・愚 5日		公卿補任 「従三位」 和歌③⑤③
51			五／一比	藤の花につけて、和歌の贈答	○		徒歩の御幸なれば、中／＼いと珍し	
52	康永四年	1345		新御所へ御幸、実俊供奉して御剣の 役	☆○			
53			弥生	広義門院、逆修のため五種の行、修 行 盛大な有様	☆	史 3/16c		
54				度々の要請に作者も聴聞に参る。光 厳院との再会と賜物	○		例の乱り心地によるづもわかれば： わびしけれども退くべき方なきに：： わびしながら候ふに：：置所なきまで にぞ覚え侍	決して積極的 でない作者の 態度の理由は ？
55			如月	賀茂社詣 思い出に浸る 参道にて ・棚尾社にて・片岡社にて	○		なつかしうさへ覚ゆ：：面影浮びつゝ、 あはれにぞ思ひ出でられ侍ける	
56				帰路、光衡の知り合いの庵にて心の どかに日を送る	○		急ぎも帰らず、心のどかにぞ日をくら し侍	
57			神無月の比	八幡宮詣、雨がひどい	○		ことさら風をさまり波静かなる眺めの 末、いとおかし。心あらん人に見せま	ここは、一般 的な言い方か
58			翌日	舟にて帰京 鳥羽に着く	○			

段落	年号	西暦	月日	記 事	公私	史料	心 情 表 現	備 考
59			正月中旬	日野中納言に同道して春日詣 道行・宮廻の様子	○		ほしく、あかぬ心地するに	和歌③⑨④⑩
60			帰路、宇治にて	帰路、伏見にて、面影浮かぶ	○		霞みこめたるなど、おかしう見ゆ	和歌④⑪
61							御面影浮ぶ事ども多し：光を交はし て見えしなど思ひ出づるに、荒れ果て ぬるもいとあはれになん：いたく暮 れぬるにも見捨てがたき眺めの末にぞ 侍ける	
62	貞和元年		一二／一五	霊鷲寺の談義聴聞に降雪を厭わず出 かける。例の老人同道	○		ことさらに心ざす事しありて：この 道を分けける心ざしは浅からざらんか しなど見渡さる	和歌④②④③
63				途中、女院の御方より見舞を賜った ので、帰宅してから和歌の贈答	○			
64	貞和二年	1346	五／二五	大宮入道右大臣、没 以前猶子の話 のあったことを思う	△	史・愚	今更ならぬ世の慣ひも、差し当りてあ へなくあはれになん：何となく更に あはれになん	
65				故女院・菊亭大納言・大宮入道の死 に改めて無常を観ずる	○		留まらぬ世の慣ひ、更にぞ驚かれ侍け る	
66				修行の覚悟の程を述べる	○		いかにして堅固の道心を勧め侍べきや いと慌し	聴聞した法話 の表現か？
67			神無月の比	女院・一品宮、突然の御幸	☆○			女主人として の落ち着き
68	貞和三年	1347	睦月／二八	正月夢想があり、かねて信仰してい た初瀬詣を思い立つ 奈良にて	○		なべて神仏をも恨めしく思ひし世に、 捨て果て聞えしかど、さてもあらず、 ：昔をかけて思ひ続ける事あるにも、 さすが捨て果てさせ給まじきにやと、 頼みをぞかけ聞えける：随喜の思ひ も深く、立ち憂き御名残なれど：	公宗斬首の頃 の思い 和歌④④
69				三輪山にて	○		眺めの末のいと見所ありておかし：・ 檜原に響く入達も、あはれ深くぞ聞き なされける	家門の事、代 々の流れの安 全の事などを 祈願して
70				初瀬の様子 三十三体供養	○			
71				観音の利生の頼もしい事（現世のみ ならず出離解脱の方便としても）	○			
72				通夜の様子、雨の様子	○		檜原を払ふ峰の嵐、いとすこし聞ゆ	
73			翌日	与喜の御社へ詣でる	○		初瀬川、げにいとおどろ／＼しく：・ 春秋の色、己が山／＼に分きける心も 珍し	
74			如月／朔日	帰路、奈良泊	○			
75			／ 二	帰京の途次、氏光と同行した折の思 い出	○			
76				宇治で騒動のため「しゅせん僧正」 の坊に泊	○			
77			秋	公宗十三回忌 法水院にて五種の行	○		憂世に耐えたるつれなさも、さらに驚 かれた：・	これ以上の感 慨を記さない
78			九／二五	霊鷲寺にて陸座 金泥の金剛経を供 養、法水院にて結願、仏経供養 二位殿はじめ方々からの供養 故竹林院入道大臣、三十三年	☆○	史・愚 24		記録的筆致

段落	年号	西暦	月日	記 事	公私	史料	心 情 表 現	備 考
79			翌日	院の御方御同車にて御幸 伺候の人々、実俊の動き	○ ☆	日御幸、25 日法事		
80			晦日	鎌倉の右兵衛督の御前と紅葉の贈答	○			和歌④⑤④
81			同じ頃	大納言資朝（資明の誤）との贈答	○			和歌④⑦④⑧
82			雪の朝	雉を志葉へ奉る、大納言より歌	○			和歌④⑨
83			一二／一八	十一面観音、供養	○		宿願侍て…いさゝか心の中に祈念の 旨侍し	宿願とは何か
84	貞和四年	1348	弥生／暮	実俊、梅尾詣（若宮同道）↓高尾へ 女房達は平岡にある寺へ	☆○			
85			四／	後伏見院十三年、承った品の他に寿 量品を供養の品として奉る	☆○	史・愚 6 日		記録的
86				解説の序の供養、参上せず、人から 聞く			思ひも立たれず	なぜ遠慮する のか
87			七／八	霊鷲寺の長老、入滅	△○		既に法滅の期にやと心細くなん	
88				帰依の人々の悲しむ様	△		恨千万といへど、さらにかひなし	常套的表現
89				作者の感慨	○			
90			九／	持明院に行幸、実俊供奉して剣璽の 大役をこなす	☆○	史・愚二日	御所／＼より、御感ともなのめなら ねば、いとめでたき事にぞありける	母として誇ら し気な姿
91			神無月	御国譲、二条殿にて御譲位の儀 同日、春宮立	△	史・愚27日		
92			一／	花園法皇、崩御	△	史・愚二日		特に感想を述 べない
93	貞和五年	1349		霊鷲寺の有様	△		まことに鷲の峰には思ひあらはれつゝ、 あはれにぞ侍ける	
94			如月	神明寺へ別行を志し参る	○		心ざしの至らざる事を身づから辱かし む	自分の姿勢へ の反省
95				暁、北の庵での感慨	○		いと心細く見ゆ…いと物はかなきさま まも、憂世の隔てにやと見なさるゝに あはれに目とまる心地して…	和歌⑤⑦
96				雪のため足止めされているところに 長老の訪れ	○			
97			七／二三	日野の塔頭に詣でる	○			和歌⑥②
98			睦月	院・新院、御幸始で北山へ 装束・行事の次第	☆○	史・愚29日		記録的
99				両院と対面	○			
100			春	除目、実俊中納言に直任	☆○	公		名誉の記録
101			同じ春	都にて療治中、鷹司の老人と語り、 北山まで同道して花見 その老人と和歌の贈答	○			和歌⑤③⑤⑦

名、記事に対する心情・感想を記してある場合は、その表現などの点を一覧表にしてみたものが、ここに掲げる構成表である。

ここで、構成についての気づきをまとめておきたい。その際、一覧表の段落分けを、上1、上2のように略記する。

まず上巻は、大きく二部に分けることができる。前半（上1～36）は、元徳元年一二月から正慶元年一月までの約三年間の記事である。しかし、元徳元年から一氣に元弘元年八月まで記事がとんでいる（上4）ので、実質は二年間の記録ということになる。この期間は、公私の別でいえば公的記事が続き、その中に公事における私的立場が入り込んだり、作者の感想が添えられたりするという構造を持つ。後半（上37～88）は、元弘二年（一三三二）二月頃かと思われる公宗との逢瀬から突然語り出され、以降は作者の周辺での出来事が中心となり私色合いが濃くなってくる。上巻は北山第に正室として入ることになった事を記した上、「いかになり行く身ぞと、方に浮きたる心地して思ひ乱るべし。いといみじう聞き所なきいたづらの問はず語りは、なを残り侍べきにやとぞ」との跋文で閉じられる。

それに対して下巻は、明確に区分するのが難しい（註57）。上下巻とも基本的に日次の体裁を遵守しているが、下巻では記事の内容を並べてみると雑然とした感じを受ける。それだけ上巻が記事の取捨を明確に行っているということかもしれない。その基準は、公宗との関わりである。下巻では、上巻にはなかった宗教への傾斜という

新しい要素が入るので、なおさら複雑な構成となるのである。

日次に準じた配列の例外をいえば、上巻では47段の公宗との逢瀬を語り出す箇所、下巻では康永四年(53・55・59)の記事に錯簡が多い。また康永二年の記事が全くない。下巻最終部の貞和五年では一旦七月まで記事を進めておきながら、98段で再び睦月に戻している。ここは、日記を攷筆するに際して総括する意味で記事を選択した為であろうと考えられる。

第二節 記録的態度―「女房日記」としての視点―

前節の作業から分かることは、その記録的態度である。特に、上巻はその傾向が強い。このことについて、本文に則して確認しておきたい。

上1から3では、元徳元年二月二十八日の春宮(後伏見院皇子、量仁親王)の元服に関わる公事を記す。その際、「内裏の儀、指図にて御日記に継がるべき」であったが、その図が大きすぎたので、縮写を命じられ、首尾よくなしとげ「いみじう御感あ」ったと誇らしげに記している。これも女房としての作者の職掌なのであろうか。それにしても、これに続けて「御日記に継がれしかば、今に留まるらんかし」とわざわざ書き加えている点、作者が非常に強く日記(記録)を意識していることの証である。

上3では、元服に関連した記事を終えるにあたり、「聞きおよびし片端なり。定めて僻事もあらんとつゝまし」

と、記録としての不確実や不足を断っている。ここには他見を前提とした作者の意識をうかがうことができる。また、上33では「六波羅へ行幸御幸侍しは、我も人もたゞあきれまよふほかの事なかりしかば、僻事もあらむとて、書きもとめず」と言っている。ここからも「僻事」つまり不正確を怖れる姿勢と、備忘録のようなものを書いていていた（この日記をさすとも考えられるが）ことが推測される。加えて、上22では、御方違の行幸・御幸の折の北山第のしつらいを描写するところに「小公卿座のそばは新院の御方なり。御衣架、奥にありて、見も覚えず。御服ども、経康掛けけるとぞ聞えし」とある。ここは、その場に居合わせた者の言い方であると同時に記録をより完全なものにしようとする姿勢がうかがわれるところである。

上6は、この記にしては珍しく後醍醐天皇の動静に言及している箇所だが、仄聞したものか日付も明確にはしていない。聞いた時点ですでにそのような不正確な形でしかなかったのか、作者の記憶あるいは「手控え」などが十分でなかったのであろうか。このあたりのことは、他の史料でも日付に混乱が見られる。例えば、本記では二五日としている後伏見・花園・春宮の六条殿への移御（上5）は、『史料綜覧』では二七日、『續史愚抄』では二六日のこととしている。それぞれの依拠した史料に違いがあるということで、突然の後醍醐天皇の挙動後の世情の混乱ぶりがうかがわれる。それゆえ作者の耳にも正確なところは伝わり難かったのではないだろうか。

上9は、先帝（後醍醐）が六波羅入りしたことを伝えるが、ここには「その程の事は書きもとめず」としている。事実上の六波羅入りは、『史料綜覧』、『續史愚抄』などから一〇月三日であったことがわかる。確かにこのあたりの事は、書き留めていなかったということであろうが、逆にわざわざそのように断り書きをするところ

からは、作者の備忘録的な「手控え」の存在が浮かび上がってくる。実際この時期のきちんとした記録はもたなかったらしく、続いての剣璽返還の折、典侍として「我身受け取り」したにもかかわらず「十月十日比にて侍しにや」と、きわめて自信のない書き方をしている（史実は一〇月六日）。

その他、調度類や装束の詳細な記録、これはやはり女房としての視点であろうか（上14・19・21・25・下99など）、また行事進行の様子などを丁寧に追いかけている記述（上17・35、下22・78など）など、名子の記録しうとする姿勢は、随所に顕れている。一例として、元弘二年三月一六日（上24）の「由の奉幣にて神祇官に行幸」の折の記事を、同日の『光厳院御即位記』の記述と比較して挙げてみる（注58）。

・『竹むきが記』

同十六日、由の奉幣にて神祇官に行幸なる。御即位に出づべき人々、障りども申つゝ、供奉人さらになし。公卿には大炊御門大納言・右兵衛督などなり。神祇官の北門より御輿を入奉りて、いはに筵を敷きて昇き据へ聞ゆ。内侍一人先に参る。門の前より下りて、筵道をとりにて上に昇る。髪上げて妻戸の内に候ふ。その妻戸に御輿を寄せ奉る。殿、御供に参り給。さて大床子に御座。剣璽、御左の方に内侍置く。

藏寮の御唐櫃にて、帛の御袍を渡しまうけらる。平敷の御座にて召さる。無文の御冠を奉る。御装束には大納言冬隆卿、範賢と参る。御唐櫛笥など渡る。その後大床子に御座。薄き生絹の衣にて御冠の巾子を大納言結び参らす。黒塗の御半挿・盥、頭中将持ちて参る。御楊枝・御手拭、同じく柳筥にて高坏に据ゆ。御盥に貫簀あり。御手水の後、大床子より東に御半帖をよそへるにむかはせ給て舍人を召さる。神祇官の物ども

御幣を取りて出づるに、その振舞どもあり。

『光嚴院御即位記』

* 新字体で表記する

三月十六日。即位由奉幣行幸也。出御。其儀如恒。関司鈴奏警蹕等無之。入御郁芳門并神祇官北門。「神祇官献大麻。」寄御輿於北舍北面西戸。「地上敷席。」公卿列立東幃門。「北上西面。」内侍二人候妻戸内。左右公卿次将「忠懃朝臣。」取御劍授内侍。先授東内侍。但任常儀可為西之由。有其沙汰之間。内侍立替。次下御。「余候御裾。」無警蹕。御輿退。着御大床子。「南面。劍璽置左端。」入御之後閉北門。公卿着門内東腋座。此間職事「定親。国俊。」運置御調度御装束。「帛御装束。御冠篋。唐匣。泔器子^{（等）}也。」御装束了又着大床子。次供御手水。陪膳「実繼朝臣。」取打敷参進。敷大床子南端。役送「定親。国俊。」持参御手水洗椽一。「二可有也。」御手巾。楊枝。「盛柳筥。置土高坏。」次令洗御手。次第撒之。次余召奉行職事。問事具否。次主上着御拝座。「異向。以後着給於大床子下。召御草鞋。」次藏人頭献御笏。次御拝。兩段再拝。次召舍人。「二音。」大舍人四人称唯。少納言参跪版南。勅曰。中臣忌部召。称唯退。次中臣忌部。卜部「号後取。」入自東南幃門。列版位下。「北面西上。」各立定。勅曰。忌部参来。忌部称唯参上。取外宮幣。授後取之後列。忌部更帰取内宮幣後列。次勅曰。中臣参来。中臣参上。勅曰。能申奉。称唯退下。次三人退出。次返納御笏。次召御草鞋。移敷於平敷御座。令脱帛御装束給。此間御幣了還御如初。於本宮猶無警蹕。関司鈴奏名謁等。

本文の傍線を施した箇所が、ほぼ同じ事柄を記しているところである。『即位記』は、正式な記録と見てよいで

あろう。その記録と比較してみても、かなり正確に記録していることがわかる。光厳院の即位には、作者は、名誉ある褰帳の典侍として大役を命ぜられており、特に印象深い行事であったことは容易に想像できる。

この記事に引き続く即位式の次第は、上巻25〜27まで、褰帳を勤める作者の動きを中心に記録されている。傍観者ではあり得ない以上、それは自然なことで式の次第を漏らさず記録することはこの場合作者には不可能なことであった。ここでも装束に関しては、かなり熱心に書き記している。一例として、上巻26の装束を記している箇所を引用しておく。

しばしありて、昇るべき由、御使あれば、装束を改む。皆紅の衣、数六、同じ単、打衣、袴 萌葱の表着、赤色の唐衣、地摺裳。得選、礼服を持ちて来る。大袖・裳なり。もとの裳・唐衣を撤して礼服を着る。衣の脇をはころばして、裳にて腰を強く結ふべし。得選、蔽髪を参らす。(中略) 先づ童二人様左火取、右箇。紅梅の汗衫、紫の三袍、白単、雲を付く。紅の打衣、袴、萌葱の表の袴、文、窠に霞、上刺、紫の匂、物忌、紅の薄様、扇をさす。(中略) 次に下使二人柳の三衣、紅梅の単、打衣、袴、葡萄染の唐衣、海賦の裳、物忌、扇、童に同じ、次に裾被き六人 生絹の袴、稜をはさむ、薄衣、織物、絵縫物などなり。(以下略)

典侍としての職掌からも自然に注意が向くのであろう。『後宮職員令』には、典侍の職掌について「典侍四人。掌同_二尚侍_一。唯不_レ得_二奏請宣傳_一。若无_二尚侍_一者。得_二奏請宣傳_一とあり、「尚侍」については「尚侍二人。掌_下供_二奉常侍_一。奏請。宣傳。檢_二校女孺_一。兼_二知内外命婦朝参_一。及禁内禮式之事_上」とある(注57)。これによっても、儀式の次第への作者の関心が強いことがわかる。有職故実の前例としても格好の材料であったのである。こ

の他にも、例えば、上8には、「踐祚廿二日也。女房は四十人なるを、とりあへらるゝに従ひて、卅人ばかりとぞ聞えし」、上26には、「未申の方に床子はあるべしと聞きしかど、得選がはからひにや、西の正方にありしは、いづれか本なるべきにか」といった具合に、常の儀と異なる点について言及している。これらからも、そういう意識を持って事に臨んでいたことがわかる。

以上のように見てくると、作者名子は、女官として出仕していた役目上も、また後に触れるが、その責任感の強さからも、相当意識的に公的記録に近いものとして自分の日記を位置づけていたのではないであろうか。それは、三角洋一氏も指摘されるように（注60）、

上1 元徳元年十二月廿八日、春宮御元服侍き。・・・

上4 元弘のはじめの年、八月廿四日の夜、内裏見えさせ給はぬよし、・・・

上8 踐祚廿二日也。・・・

上二 同じ十三日、内裏に行幸なり。・・・

上二 十一月朔日、日蝕なり。・・・

上二 十一月、賀茂の臨時の祭、清涼殿にて行はる。・・・

といったような、日付の後に、その日の記事を記入するという形を取っていることにも、明らかにあらわれている。

『竹むきが記』は、かなり明確に記録することを意識して書かれていると考えられる。少なくとも、名子が備

忘録としての「手控え」を付けていた時点では、その傾向が強かったと考えてもよいのではないだろうか。

では、下巻に至って公事の記録が減少して、作者の内面のことや道行きのことなど私的な記事が増えてくることはどのように考えればよいのか、という問題が起ってくる。大きな理由としては、彼女が西園寺公宗の妻となり、女房生活を終えてしまったことが考えられる。当然、公事への参加の機会は激減する。役目上、有職故実精通する必要もなくなってしまふ。もちろん行事の次第の記録も彼女にとっては無意味な物へと変質していったはずである。それでも、実俊の元服に際してや彼の供奉に関連して接することのあった公事について、やはり記録的な筆致で書いてしまうのは、女房として、典侍として天皇や上皇の側近く仕えていた者の性というものであろうか（下22・78・85・98など）。

ともかくも『竹むきが記』上下巻を通してみれば、その記事内容が、私的なものに偏ってくることは、誰しも確認できることである。それが名子の執筆の動機にも深く関わっていることであると考えているのだが、それはこの節では触れ得ない。今は、下巻の記事は、変容していつているが、作者の公的記録に携わった者としての態度、作者の本質はそのまま持ち越されていることを確認しておきたい。『竹むきが記』の基本的性格として、少なくとも当初は「公的記録に近い女房日記であった」ことを指摘することができるのである。

第三節 心情の記録

(1)

『竹むぎが記』の基本的性格として、もう一つの側面を確認しておきたい。それは、記録的態度で書かれたとはいっても、記事の中に、それと解る形ではないにしても作者の心情が描き込まれていることである。本記の構成を、上巻は二部、下巻は混然として分け難いと考えるが、大方の傾向として、上巻前半部は、公的行事の記録、後半部は公宗との交情と結婚までの経緯の記録、下巻は、西園寺家当主としての実俊の成長の記録と作者の身辺雑記、および宗教への傾斜の記録としてとらえられるのではないかと考える。このうち最も自身の内面を描いているのは、下巻の信仰について述べているところであろう。また、最も抒情的なのは、公宗との交情を描いているところであろう。それでは、公的行事の記録の記事の中に、作者の感情は全く描かれていないのであろうか。まずその点について検討してみたい。

例えば、上二から三は、表面的には「十一月、賀茂の臨時の祭」、「内侍所の御神楽」から新年にかけての行事の羅列と見える。しかし、詳しく検討してみると、記録だけではない要素が見えてくるのである。「二段の前半は、行事の次第を記録しているが、それに引き続き次のように記す。

事果てて神垣に引連れし程、庭火のかげもしめりはてぬ。峰の横雲しらみゆく空に、返立の山藍の袖ども、しほれはてて見ゆ。御引直衣・御物具、御椅子におはします御さま、明けゆく光にいとゞしくぞ見えさせ給。雪時／＼うち散りて、立ち舞ふ袖いとゞしほれはててぞ見え侍し。

雪や猶かさねて寒き朝ばらけ返す雲井の山藍の袖

前半が女房として行事に参加した緊張がうかがわれるのに対して、ここには行事が終了して解放された気分が漂う。叙事と叙景とが描かれながらも抒情性の濃い叙述となっている。「庭火のかげもしめりはてぬ」「しほれはてて見ゆ」「いとゞしほれはててぞ見え侍し」の繰り返しに作者の気分が込められているようにみえる。

次には、18段から20段までを抄出する。

18 年も暮れぬるに、下の午の日、御髪上の典侍にて官の庁にむかふ。風吹あれてすさまじき夜のさまなれば、道すがら衣の中に顔ひき入てゆくに、「この雪は。いとゞ埋もれなん」といふ声に驚きて見れば、少し積りにけりと見る程もなく、いと深くなりしかば、所からも分きて色そふ心地するに、一人見るは甲斐なくぞ侍し。

ふりにける代々をかかねて大内や幾重つもれるみゆきなるらん

19 廿八日、内侍所の御神楽にて行幸ならせ給し、典侍に参る。(中略) 荒薦敷きたるさまも、いと神々し。庭火いと掲焉なるに、人長のさまもをかしう見ゆ。明方近き空の気配なるに、物の音もいとゞしく雲井に澄みゆく心地して聞えしかば、何となく思ひつゞけし、

いとゞ猶雲井の星の聲ぞ澄む天の岩戸の明くる光に

20 年かへりつゝ、珍しき玉の台に光をそへたる春の色なれば、おの／＼思ことなくぞ見交すべき。ほのぼのとするに四方拝あり。(以下略)

このあたりは、行事の記録の後、作者がその感慨を述べ、最後に和歌を詠じて次の記事に移るという構成が続く。

その和歌の詠いぶりはどれも、公人としての立場でのもので、個人的な心理分析を許さないようなところがある。しかし、特に二段の和歌の前の「所からも分きて色そふ心地するに、一人見るは甲斐なくぞ侍し」という箇所は、同行の同輩がいたらしい状況を考え合わせると、作者が念頭にある特定の人を思い描いている表現となっているのである。ここには、瞬く間に降り積もってゆく雪の有様に心動かされる情趣的な作者の姿がある。同様に二段も「明方近き空の気配なるに、物の音もいとゞしく雲井に澄みゆく心地して聞えしかば、何となく思ひつゞけ」た心中は、直後の「いとゞ猶雲井の星の聲ぞ澄む天の岩戸の明くる光に」という御世を言祝ぐ詠歌内容にもかかわらず、個人的なものであったと思わせる叙述である。これらの段は、二段の気分を引きずったまま書かれている。なお言えば、二段の叙情性も二段の公宗初登場の場面の作者の心情をそのまま持ち越しているとも考えられるのである（これについては後述）。公的記録の合間に、公人の立場を離れた作者の心情が描かれていることを知るのである。

このように表面的には無味乾燥な行事の記録、公的日記のように見えながらも、その底流には作者の抒情が流れているという二重構造を取っているのである。それは決して、それと明確にわかる形で姿を現さない。したがって、上巻では作者はひたすら記録することに腐心しているように見える。実際、前節で確認したように作者の記録者としての本質は、下巻に至っても変質するものではない。しかし、それでもこの『竹むぎが記』が単なる「女房日記」を越えるものであり得るのは、記録と同時に作者の内面も描いているからである。

上47の公宗との思い出を唐突に語り始める段も、抒情性が濃い。

思ひかけず旅寝の床に夜を明かす事なん侍し比、二月の初め、例の宿りに立ちとまれるに、鳥の声、鐘の音、しきりに驚かしつゝ、車引出たる暁の空霞み渡りて、峰の横雲ほのかに白みゆく程なり。吹すさむ風につけて、其処とも知らぬ梅が香の匂ひたるなど、いと艶なりしも、心なき身にはさしも思ひわかれざりしさへ、思ひ出らるゝ端にありける。

また、世情が騒然とする中で、公宗との束の間の逢瀬を記したところ（上67）も叙情的筆致である。

事の序をなん求められたるとて、まだ宵の程に立ち寄り給へる、程なく鳥の声、鐘の音、此方彼方に聞ゆ。「そら音にこそは」などおぼめき給さまなるに、明けなばいと便悪しかるべきをと度／＼おとなへば、妻戸押し開けられたるに、有明の月いとさやかにて、軒近き萩の葉も、なべて此頃の程にもあらず高やかなるに、ひまなく置き渡して下葉もかくれなき露の光など、秋の空めきたる暁の眺めは、さらでもあはれるべきを、これや限りとなべて世を思ひ乱れたる折からのあはれに、まして行くもとまるもいと心細し。／＼明けはなる気色なれば、鬢櫛など召して立出給。端もさながらにて打臥しつゝ、猶ながめ出でたるに、俄に空さへかき曇りて、わづかに残りつる月影も見えずなりぬれば、何となく思ひ続けられしをかし。

いかゞせむ面影したふ有明の月さへ曇るきぬ／＼の空

叙事と叙景と感覚的表現でその時の思いを描写している。このあたりなどは、明らかに「女房日記」ではあり得ない表現となっており、それを脱し得ているところといえよう。

また、下巻になって、身近な人々（特に永福門院の崩御は作者に深刻な打撃を与えたことが本文からわかる）

の死に会い信仰へ傾いてゆくと、作者は己の心の中を凝視するようになる。その事を端的に顕しているのが、下
二であらう。

内には道行を励み、外には家門安全を念ずれば、内外ひまなくして、花を遊び月を愛づる情も知らず。さす
が世に経る慣ひにて、さがたき友に誘はるゝといへど、心にとまらざれば興遊にもあらず。憂世の色は自
ら捨て果つる心地すれど、なを晴れがたき心の闇は、澄まさんとする山水もかつ濁るらんかし。

また、下巻の末尾近くに自分の姿勢への反省を「事にふれつゝ、心をすゝむる便りあり。かゝれども居所を改め
たるのみなれば、心ざしの至らざる事を身づから辱かしむ。且はいよく心をすゝましむるほかの他事なし」
(下94)と述べるのも、自己の信仰を振り返り、その至らなさを見つめてのことであらう。

(2)

右のごとく散文の場合に作者の心情がどういふ風に描かれているかをみたが、つぎには、本記の随所にちりば
められている和歌の場合はどうなのかをみてみなければなるまい。和歌によって作者の心情の流れを追っていけ
るだろうか。それについて、名子にとっての和歌はどのような位置を占めていたのかという問題とともに考えて
おきたい。日記中の和歌は一覧にしてこの項の後に掲げておく。

上巻と下巻との和歌には、その世界に違いがみられると考えるので、上巻下巻それぞれにみてゆくことにした
い。なお、数字は、和歌の通し番号である。

「上巻の和歌」

1～9は、儀式に即した公的詠みぶりである。特に、3の和歌は先に触れたように、地の文の抒情性とは対応せず、「下の午の日、御髪上の典侍にて官の庁にむかふ」折、雪が降ったという事柄に対応したものである。行事のそれぞれの記事に自分の感慨を添え、それを詠み込んだ和歌を配して、その記述を締めくくるという方法をとっているようである。1から9、いずれも、地の部分に和歌と対応する文を見つけ出すことができる。逆にいえば、手控えられていた和歌から地の文が復元されていたとも考えられる。しかしながら、これらの中にも作者の感情を読みとることが可能なものもある。

1 手になるゝ契さへこそかしこけれ神代古りぬる君が守りは

「いと辛き業にぞ侍し」であった神璽の笥の裏みかえを無事終えての詠である（上二）。「手になるゝ契さへぞおろかならぬ心地し侍し」という地の文に対応する上の句である。「契さへこそ」に、役目上とはいえ神璽に直接触れることができた我が身の上の喜びと感動とを込めている。それは、持明院統に関わる自分というもののへの強烈な意識ともいえる。

6 君が代の千世のはじめと高御座雲の帳をかゝげつるかな

即位式で褰帳の典侍を勤めた折の詠で、大役をこなした晴れがましい、誇らしい気持ちで即位式の感動と共に詠われている。

7 秋深き露の台に影もりてはつかに澄める軒合の月

供花の後、夜が更けてから月を御覧になるのに供をしての詠（上34）

8 唐玉の挿頭と見えて乙女子が立ち舞ふ袖に降る霰かな

御前の試の舞姫を見物しての詠（上41）

二首とも、地の文に「いと面白く侍し」とあり、その折の情緒的気分をうたったものである。これらは叙景歌というべきもので、作者のその場の感興に主眼があり、心情の表白といったものではない。

10～22 公宗の求婚の歌以降、上巻の終わりまで二人の間で交わされた歌が続く（10・11については後述、第三章第三節）。10～15は、二人が逢瀬も思うに任せなかった状況にあったことを示しているであろうが、二人がどの程度世情の不安に危惧を抱きつつ逢瀬を重ねていたかは、この詠みぶりからはうかがい知ることができない。二人を包む慌ただしい雰囲気が伝わるだけで、それほど強い不安は感じられない。これに続く6段では、公宗との関係を周囲の人々から揶揄された思い出を綴っている、その文脈から推して、これらの贈答歌は、恋のやりとりといった程度にとらえておいてもよいかと考えられる。

16 いかゞせむ面影したふ有明の月さへ曇るきぬ／＼の空

先述した後朝の公宗の去った後の感情を、叙景をからませながら叙述する抒情性の濃い記事中の詠である（上67）。それだけに、この歌にも色濃く名子のやるせない公宗への思いが揺曳している。この歌に、その直前の緊迫した世情は反映されない。公宗との束の間の逢瀬を描くこの段では、あえて二人だけの世界を歌い上げたかったものかとも考えられる。

これに続く段では、再び「東国の夷ども近づく」といよいよ騒然とする様を述べる。そして、17から21までの公宗の形見とも受け取れる五月五日の贈答歌群が続く。

17 沼水に生ふる菖蒲の長き根も君が契りのためしにぞ引く
公宗

18 掛けなれし袖のうきねは変らねど何のあやめも分かぬ今日かな
公宗

19 忘れずは形見とも見よあはれこの今日しも残す水茎のあと
公宗

20 浅き江に引くや菖蒲のうきねをも長きためしと我や掛くべき
名子

21 残し置く形見ときけば見るからに音のみなかるゝ水茎のあと
名子

詠歌内容から、20が、公宗の17・18の歌に応じたもので、21が19に応じたものとわかる。贈答歌としては、はなはだしくバランスを欠く返歌であるが、公宗からの薄様に、まず17・18の和歌が書かれ、それとは別に（「また奥に」）、まさに「形見とも見よ」という遺言歌の19が添えられていたらしいので、作者の意識として、前二首と後の一首はそれぞれ一つずつの固まりとして捉えられたものかもしれない。それだけ19の和歌が作者にとって真剣に受け取られたということかとも考えられる。

この歌群は、ただ羅列するだけともいえる書き方で、地の文からは、一切の感情を切り捨てている。先の抒情性とは異質なものをすら感じさせる。しかし、これらの公宗の遺言とも思われる和歌の贈答をすべて捨て去り、忘れ去ることなど、作者には到底できないことではなかったろうか。せめて自分と公宗との関係（愛情）の証として書き残さずにはいらなかったのではなからうか。文脈は、そのまま騒然とした世情の記録へと移っていく

ことから、二人の未来を予見させる。ここには夫を失った悲しみを表面に出さず、深刻に打撃を受けたことについて寡黙になる作者の姿勢、性向がうかがわれる。それだけに、何も書かれない行間には、作者の悲しみが込められていると解してもよいのではないだろうか。

〔下巻の和歌〕

下巻になるとその構成要素が複雑になることを反映して、和歌も様々な様相を呈してくる。道行きの感慨を詠じたものもあれば、実俊の無邪気な歌もあり、永福門院の詠もあり、挨拶歌もあるといった具合にである。試みに、次のような分類を考えてみた。仮に和歌数の多いものから並べ、名子の詠んだ和歌の番号を太字で表示する。なお、数字間の―は、贈答の関係にあることを示す。

- 一、贈答歌・挨拶歌 29—30 32 35・36—37・38 45—46 47—48 49 53・54・55—56・57
- 二、家門の繁栄、実俊関係を詠うもの 25・26—28・42・43
- 三、道行にて詠うもの 23・24・41・50・51
- 四、現世利益的信仰を詠うもの 39・40・44
- 五、自身の道心を詠うもの 34・52
- 六、その他（感傷的独詠 31・夢の中の公宗の詠 33・総括歌 58・59）

圧倒的に儀礼的な贈答歌が多く、名子以外の詠者が多くなってくるのも、下巻の特色といえよう。

また、下巻では多くの人の死に触れながら、それに関わる詠歌が一首もない。やはり自分の感情を込めるのが

不得手だったのか、そのような気持ちになれなかったのか。悲しみの歌、いわゆる挽歌は記さない。このような時に、和歌は名子の念頭にないようである。

それにしても、二の「家門の繁栄を詠うもの」の中に名子の歌がないことはいったい何を意味するものだろうか。一の「贈答歌」の中でもただ一箇所、

29 栄ふべき行末（ゆくすゑ）かけて白雪（しらゆき）のふりぬる家にあとぞ重なる（かさな）

別当（資明）

30 白雪（しらゆき）のふりぬるあとも又更（また）に花と見ゆべき末も頼もし（たの）

名子

という実俊の元服の儀式の翌朝早く、早速資明から西園寺家の再興を祝う和歌が届けられ、それに対する返歌でそのことに触れるにすぎない。ここには素直な喜びが表現されている。いったいに名子は家門の再興を願っているながら、こと実俊に関しては、率直な、ごく普通の母親としての愛情表現をしない。実俊について感想を記している箇所を挙げてみる。「めでたくぞ侍る」（元服―下24）、「いとめでたかりき」（御幸始で光厳院に誉められたことに対し―下26）、「いみじう晴れ／＼しきさま也」「めでたくぞ侍ける」（中将拝賀―下28）、「いとめでたき事にぞありける」（持明院行幸にて剣璽役をつとめて―下30）。このようにおよそ母親が我が子の名譽について誇らしく書き付けたという表現ではない。むしろこの言い方は、女房が記録を付ける時のものに近い。我が子から一步下がったところで観察している冷静な作者の眼を見出すことができる。作者の本質である記録者の態度を物語るものであろう。母としての誇らしい気持ちは充分ありながら、その母としての気持ちに溺れ込まずに冷静に抑え込んで書いている。このように表だって我が子への愛情、家門への思いを明らかにしない態度を

保っている作者には、そのことを題材とした詠歌は考えられなかったものであろうか。

この中で作者の自然観照の態度を最もよく表しているのが、三の「道行にて詠うもの」であろう。それだけにすべて作者の独詠である。

23 宿^{やど}とひて誰^{たれ}又^{また}今^{こゝろ}宵草^{よぐさ}枕^{まくら}仮寝^{かりね}の夢^むを結^{むす}びかさねん

24 夜の程^{ほど}も泊^{とま}りは同^{おな}じ旅寝^{たびね}とて四^{よも}方に別^{わか}る、沖^{おき}の釣^{つり}舟

二首とも、暦応二年如月、天王寺詣の折に詠まれたものである（下二）。初めての物詣での記事である。舟での旅程にひどく感興をそられたようで、「まだ知らぬ旅の空、いと珍し」、「繫がぬ舟の浮きたる例もげにあはれに見ゆ」、「書き置きしもいとをかし」「何処をさしてとあはれに見ゆ」と重ねて、その物珍しさを綴っている。このあたりは、物詣でといっても物見遊山的な気持が強く出ており、解放的気分浸っているのがよくかがわれる和歌である。そのためか地の文でも、熱心に自然描写をしている。

二 柴舟^{わたい}の渡^{わた}りも見^みえず霞^{かすみ}こめて河音^{かおと}しづむ宇治^{うぢ}の山^{やま}もと

康永四年、日野中納言（資明）が春日詣をするというので同行した帰路、宇治でのものである（下60）。ここでも、宇治川の情景を「舟にてさし渡り、川風吹き冴えていとすさまじ。さすが時知る色とや、霞みこめたるなど、おかしう見ゆ」と触覚と視覚で叙述した上、和歌では視覚と聴覚とを使い叙景している。「河音しづむ」に川を渡る際の臨場感があふれている。作者は、藤原氏の氏神である春日神社に詣で「和光同塵の垂跡、平等方便の利益には、我しも空しからめやと頼もし。八相成道の終、涅槃妙法真大乘般若の法楽は、随喜の笑を含みまし／＼

て、二世の願成就せしめ給とかや」との思いを懐いた帰路のこととて、ある種の安堵感とともに、舟上から霞を見やっていたのではないだろうか。

50 山陰や杉の庵いはりの明方あけがたに心こほそくも出づる月影かげ

51 あはれなり柴しばの庵の柴かきの垣へだうき世中よのなかの隔へだてと思へば

この二首は、貞和五年京の西の神明寺に別行を志し参った折に詠んだものである（下94・95）。50の和歌の前には「暁、北の庵に立ち寄れる事侍に、其処となく霞みたるに、軒端の梅の匂のみ、隠れぬ物とや、うち薫れるなど、いと艶なる暁の空なり。雲間に残る有明もいと心細く見ゆ」とあり、51の前には、「庭の通ひとなれる柴垣の、いと物はかなきさまも、憂世の隔てにやと見なさるゝに、あはれに目とまる心地して」とある。ここでも、地の文の叙景に添う形で和歌を詠んでいるが、この部分に漂っている情趣は、この直前の「心ざしの至らざる事を身づから辱かしむ。且はいよ／＼心をすゝましむるほかの他事なし」という自分の信仰の至らなさを自省していることを見るとき、ただの自然観照ではなく、自然を見つめると同時にそれを見ている自己の姿を観照していることを知るのである。そうした点を見るとき、この二首は、道行の先での自然観照の詠であると同時に自身の道心への心構えを詠っているものともいえる。

52 宿やどもそれ花はなも見し世よの木きの下もとになれし春のみなどかとまらぬ

この歌も、「弥生の比、若宮に詣で」た途次、長講堂を再訪しての感慨を詠ったもの（下96）であるので、三「道行にて詠うもの」に入れてもよいものである。しかし、作者にしては珍しく感傷的に思い出に浸っている所

なので、特別に「感傷的独詠」とした。

昔供花の折など、心に浮ぶ事多し。花の下に立ち寄れるに、変らぬにも、見し世の春にめぐり逢ひぬる心地して、思ひ出づる昔語りもせまほしきを、花物言はぬ憤ひさへぞ恨めしかりける。(中略)さらでも己がさま／＼に、よしあしにつけつゝ、身を変へぬるなど、取り集め思ひ続けるに、涙さへこぼれぬ。

敢えて恨みも悲しみも表に出すまいとしてきた名子であったが、懐かしい公宗や後伏見院の面影を浮かべ、見上げた花に思わず語りかけた衝動にかられた様が情緒的に語られる。花としか共感できない、我が心の内を分け合えるのは、物言わぬ花しかないという苦しい胸の内が思わず迸りでている。そして、「あの春」はもう二度と戻ってこないという悲しい現実を一人かみしめながら、この和歌を詠ったものであろう。

以上、本記中の和歌について、作者の詠歌態度をみてみた。その中に作者の心情を読みとることの可能な和歌も多いが、和歌を独立させて、その流れから作者の心理の流れを辿るという点については、難しいと言わざるを得ない。渡辺静子氏は、名子の和歌について次のように総評しておられる(注61)。

当代宮廷女流歌人は勅撰集、私撰集、定数和歌等の中から適宜に拾っても直ちに十指に余る。これらの人々の歌に較べ、必ずしも名子の歌が遜色あるとはいえない。ただ日記から歌を分離してみると、独立性に欠け、迫力が稀薄であることを認めざるを得ない。歌に限られた場以外に発展性をもたなかったところに弱味があるといえようか。

日記を離れてもその和歌が人を感動させる魅力を持っていれば、それはそれで素晴らしいことである。そこに名

子の力量不足を指摘することもできるのかもしれない。しかし、本記はもとより歌集ではない。その場合、歌集に採られた和歌と同じ尺度で歌そのものの質を比較するわけにはゆかないのではないかと考える。日記の中に書きとめられた和歌は、本来的には地の文との融合においてはじめてその意味を持つという性質を有するものだからである。したがって、本記では、日記に叙述されている事柄・状況と詠まれた和歌とを重ね合わせてみていくことで、その時の作者の真情を読みとっていくという立場をとるのが肝要であると考ええる。

和歌に、その感興や心を凝縮して表出することをしない作者であったことはたしかである。それは、非常に自己抑制的な詠歌態度ともいえる。感情の生な表出歌がごく少ないことも、その詠歌態度によるものであろう。作者にとって和歌は、全身全霊を傾けるものではなかったのである。このことは作者の性向を知るための手がかりともなる。自分の感情に溺れがちな性格ではなかったので、すぐれた感受性を持っていながら、それを和歌に込めて詠えなかったのであろう。もちろん挽歌も時に応じて詠んでいたかもしれない。しかし、それがない、少なくとも作者にとって記録し、とどめるに価値を認めがたいものであったことは、作者の、感情よりも理知がちな性向を物語っているのではないだろうか。

『竹むぎが記』和歌一覧

— …… 同時期の詠

— …… 贈答歌

1 上_二 手になる、契さへこそかしけれ神代_ふ古りぬる君_{まほ}が守りは

名子

- 2 上二 雪（なほ）や猶（なほ）かさねて寒さむき朝あさぼらけ返す雲井の山あひ藍の袖
名子
- 3 18 ふりにける代々をかさねて大内や幾重いくへつもれるみゆきなるらん
名子
- 4 19 いとゞ猶（なほ）雲井の星ほしの聲ぞ澄すむ天あまの岩戸の明くる光に
名子
- 5 27 今日けふやさは唐から国人も君が代を天あまつ空ゆく雲に知るらん
名子
- 君が代の千世のはじめと高御座雲の帳とばりをかゝげつるかな
名子
- 7 34 秋深ふかき露の台うたなに影かげもりてはつかに澄すめる軒合のきあひの月
名子
- 8 41 唐玉からの挿頭かざしと見えて乙女子おとめが立ち舞ふ袖に降ふる霰あられかな
名子
- 9 47 更くる夜の雲の通かよひ路霜ぢ冴えて乙女おとめの袖にこはる月影かげ
名子

10 上49 新玉の年待ち得てもいつしかと君にぞ契る行く末の春

公宗 求婚の歌

11 行く末の契もしらぬながめには改まるらん春も知られず

名子 返し

12 58 いかにせむ偽ならぬいつはりを猶いつはりと思ひなされば

公宗

13 偽の誰がならはしぞ独寝はさしも夜な／＼されじと思ふに

公宗

14 59 さても猶契し末のかはらずは明日の夕や頼みなるべき

公宗

15 定めなき昨日の暮のならひには明日の契もいかゞ頼まん

名子

16 67 いかゞせむ面影したふ有明の月さへ曇るきぬ／＼の空

名子 後朝の感情を叙

17 69 沼水に生ふる菖蒲の長き根も君が契りのためしにぞ引く

公宗

景とまぜて詠う

- 18 上69 掛けなれし袖のうきねは変らねど何のあやめも分かぬ今日かな 公宗
-
- 19 忘れずは形見とも見よあはれこの今日しも残す水茎のあと 公宗
- =
- 20 浅き江に引くや菖蒲のうきねをも長きためしと我や掛くべき 名子
-
- 21 残し置く形見ときけば見るからに音のみなかるゝ水茎のあと 名子
- 22 74 かくてだに捨てぬならひの身の憂さは思ひしよりもあられけるかな 名子
↓公宗に
- 23 下11 宿とひて誰又今宵草枕仮寝の夢を結びかさねん 名子
- 24 夜の程も泊りは同じ旅寝とて四方に別るゝ沖の釣舟 名子
- 25 16 雪降りて寒き朝に文読めと責めらるゝこそ悲しうはあれ 実俊

26 下16 踏み初むる和歌のこしぢの鳥の跡になをも絶えせぬ末ぞ見えける

永福門院

27 栄ふべき宿の主の幾年か絶えぬ御幸のあとを見るべき

永福門院

—

28 消ぬが上に降り積む雪の情にも宿の主を待つと知らずや

永福門院

29 23 栄ふべき行末かけて白雪のふりぬる家にあとぞ重なる

別当(資明)

=

30 白雪のふりぬるあとも又更に花と見ゆべき末も頼もし

名子

31 32 宿もそれ花も見し世の木の下になれし春のみなどかとまらぬ

名子

32 35 鳥の子を十づゝ十の数よりも思ふ思ひはまさりこそせめ

永福門院↓將軍(儀礼歌)

33 36 思ひ置くそれをば置きてことの葉の露の情などなかるらん

公宗(ある人の夢で)

34 下46 あはれこの眠らぬ床に見る夢を覚ます現の暁もがな 名子 修行について

35 51 頼めてもとはれぬ花の春暮れてたれ松山とかゝる藤波 名子

— 挨拶歌程度

36 とへや君山時 鳥をとづれて小田の早苗も取りそむる比 名子

==

37 頼め来し花の盛りは過ぎぬれど今も心にかゝる藤波 花の盛りを頼めつゝ訪はずなりぬる人

—

38 時鳥さこそ五月の己が比鳴くや山路を思ひやりつゝ 同右

39 59 世を照らす同じ八千世も三笠山おなじ光と月ぞさやけき 名子

40 頼みつゝ畏れみ仰ぐ我方になびかざらめや神の木綿四手 名子

41 60 柴舟の渡りも見えず霞こめて河音しづむ宇治の山もと 名子 叙景

42 下63 待見^{(まち)み}ばやふりにし世々に立^{かへ}歸^{むかし}り昔のあとも絶^たえぬみゆきを

老人

43 吳竹^{くれ}の世々にふりにし宿^{やど}なれば待^まつやみゆきのあとも絶^{たえ}せじ

光厳院

44 68 神や知^しる引^ひく注連^{しめな}縄^{なは}の打^{うち}延^はへて一筋^{すぢ}にのみたのむ心^{こころ}を

名子

45 80 御幸^{ぎよ}そふ宿^{やど}の紅葉^{もみぢ}の八千入^{はっせんい}に君ぞ幾代^{いくど}の色をかさねん

名子 ← 儀礼歌

46 幾代^{いくど}見^みん君が心^{こころ}の色^{いろ}そへてみゆきふりぬる宿^{やど}の紅葉^{もみぢ}を

鎌倉右兵衛督の室

47 81 一入^{しほ}の色や染^そむると見るほどに時雨^{しぐれ}と連れて降^ふる紅葉^{もみぢ}かな

資朝(資明の誤)

48 一入^{ひとしほ}を惜^おしむにあらじ紅葉^{もみぢ}をさそひて見^みする時雨^{へなり}成^{なり}けん

名子

49 82 鷺^{わし}の山深^{ふか}く入^いりぬと聞^ききしかど鷹^{たか}の鳥^{とり}とて見るもめづらし

大納言(資明)

50 下95 山陰や杉の庵の明方に心ぼそくも出づる月影

名子 叙景に近い、地の文そのままの詠

51 あはれなり柴の庵の柴の垣うき世中の隔てと思へば

名子

52 97 迷ふらん闇路を照せ法の水結ぶはちすの露の光に

名子 日野の塔頭・道心

53 下101 慕ひ見し山路の花の木のもとにとめし心の程は知らずや

鷹司の老人

54 馴れしよりかゝる別れのあらんとは思ひながらも猶ぞおどろく

同右

55 名残思ふ涙の雨のかきくれて花もしほれし帰るさぞ憂き

同右

56 思ひやれ雨も涙もかきくれて名残しほれし花の木本

名子

57 いとせめてあかぬ名残の悲しさに馴れしさへ憂き恨みとぞなる

名子

58 ト101 藻塩草かきて集むるいたづらに憂世を渡るあまのすさみに

名子

59 なき跡にうき名やとめんかき捨つる浦の藻屑の散り残りなば

名子

(3)

いま『竹むきが記』の全体像を見るために、散文と韻文とに分ち、それぞれから作者が己れ的心情をどのように描き、記しとどめようとしているのかを探ってみた。その結果、本記には、明らかに個人的な感情を描いている箇所があり、加えて公的行事の記録の中にも作者の心情が入り込んでいることを確認できた。作者にとって、記録的態度と己の内面を描くことは決して矛盾してはいないのである。そういう意味では、その表現方法が直截的でないとしても、名子の心の軌跡の記録ともとらえることが可能である。このような側面があることは、記録的態度を本質としながら、これが「女房日記」ではなく、紛れもなく女房の手になる「日記文学」であることを示唆していると考えられよう。本記から、作者の人となりがある程度探ってゆけるのも、名子が己の姿を多少なりとも描いているからである。その前提として本質的に記録的態度を保っているとしても、本記を総体として見るとき、そこに作者の自照性が認められると判断したいと考える所以である。

第三章 『竹むきが記』作者の実人生と日記との隔離

第一節 関係する史実の確認

本節では、『竹むきが記』の時代、つまり作者名子が生きていた時代に一体何が起こっていたのか、その具体相を、本記以外の史料からまとめておきたい。

『大日本史料』・『史料綜覧』・『公卿補任』等から、作者に身近なものと、重要と思われる事柄とを項目にしてまとめてみたのが次の表である。項目の下にへゝに入れて、本記に記載のある場合の段落を示した。なお、通覧は、作者がほぼ十代半ばと考えられる正中元年（元亨四・一三二四）から、その没年、延文三年（一三五八）までの範囲で行った。また、「賀茂祭」・「叙位」・「内侍所御神楽」・「節会」など、恒例の行事は、一部を除いてこれを省略した。

正中元年 一三二四 一月 三日 北山第（右大将実衡）へ方違の行幸

二〇日 永福門院・広義門院、北山第へ御幸

二月二日 北山第において舞楽御覧、翌日百首和歌など、二四日還御

六月二十五日 後宇多法皇、崩御

一一月一九日 東寺末寺六條坊門不動堂焼亡。後伏見・花園兩上皇中園第に御幸の上、火災御覽

一二月 九日 正中と改元

正中二年 一三二五 一月 三日 幕府、政所焼失

二二日 後伏見・花園兩上皇、量仁親王立坊を幕府に勅す

五月 八日 日野中納言資朝、佐渡に配流（『続史愚抄』による、『史料綜覧』には、八月とあり、『尊卑分脉』には、「元亨四十二依天下事配佐渡国」とある）

六月 二六日 京都、大雷雨洪水

一〇月 二二日 京都、連日大地震

二三日 衣笠殿焼失

二四日 量仁親王の元服、衣笠殿の火災により延引

嘉暦元年 一三二六 三月 二〇日 春宮邦良親王、薨ず

四月 二六日 嘉暦と改元

七月 二四日 量仁親王、皇太子となる

一一月 一八日 前内大臣西園寺実衡、薨ず

嘉暦二年 一三二七 一月一九日 関白太政大臣藤原冬平、薨ず

三月 一日 広義門院平癒のため、後伏見上皇、願文を日吉社に奉る

三日 同じく水無瀬御影堂に願文を奉り、広義門院平癒を祈る

一二日 興福寺堂宇を焼失（『統史愚抄』では一六日とする）

五月 二三日 正三位公宗を従二位に叙す

嘉暦三年 一三二八 二月一五日 後伏見上皇、前右大臣兼季に琵琶の秘曲を受ける

是 歳 法勝寺焼亡

元徳元年 一三二九 八月二九日 元徳と改元

九月 三日 伏見院十三回忌を修す

一二月 八日 春宮量仁、元服の日時定まる

二八日 春宮、紫宸殿において御元服の儀 へ上―1―3へ

元徳二年 一三三〇 一月 九日 北山第に方違の行幸

元弘元年 一三三一 三月 三日 中宮禧子、北山第に行啓

四日 北山第に行幸

七月 一三日 北山第に行幸

八月 二四日 *後醍醐天皇、神器を奉じ、俄に奈良に行幸 へ上―4へ

二七日*笠置山に行幸 〈上―6〉

後伏見、花園両上皇および春宮、六波羅北方に移御 〈上―5・6〉

九月一九日 後伏見・花園両上皇、土御門殿に御幸、春宮、常磐井殿に行啓

〈上―7〉

二〇日 皇太子量仁、踐祚（光厳） 〈上―8〉

二八日*笠置山落城

二九日*後醍醐天皇を平等院に奉ず

一〇月 三日*後醍醐天皇、平等院より六波羅南方に移御 〈上―9〉

六日 劍璽、光厳天皇に渡御 〈上―10〉「十月十日比にて侍しにや」とする

一三日 光厳天皇、土御門殿より富小路皇居に移御 〈上―11〉

十一月 一日 日食 〈上―15〉

十二月二七日 内侍所御神楽 〈上―19〉「廿八日」とする

元弘二年 一三三二 一月 一日 光厳天皇、四方拝、節会、小朝拝を行う 〈上―20〉

二日 光厳天皇、花園上皇と北山第に方違の行幸 〈上―21〉

二〇日 後伏見、花園両上皇、北山第に行幸

二月一六日 光厳天皇、後伏見、花園両上皇、北山第に方違の行幸

三月 七日*幕府、後醍醐天皇を隠岐に遷す

一日 石清水臨時祭試楽 〈上―23〉

一六日 光厳天皇、神祇官に行幸、即位奉幣使を發遣 〈上―24〉

二二日 光厳天皇、太政官廳において即位の儀 〈上―27〉

四月 一日 女叙位 〈上―28〉

二二日 賀茂祭 〈上―30〉

二八日 正慶と改元 〈上―28〉

六月 二日 幕府、日野資朝を佐渡の配所にて殺す

三日 幕府、藤原俊基を葛原岡にて殺す

九月 二日 権中納言公重を従二位に叙す

一〇月 二八日 大嘗祭御禊 〈上―35〉

十一月 二日 光厳天皇、常磐井殿（後伏見院・花園院御所）に行幸、大嘗会神饌の

習礼、清暑堂神楽拍子合、淵醉の習礼あり

三日 習礼

四日 後伏見院御所において清暑堂御神楽拍子合あり 〈上―36〉

七日 大嘗会三社奉幣使を發遣。夜、花園院御所において清暑堂神楽拍子合

あり へ上—37へ

一日 五節帳台試あり へ上—39へ

二日 大嘗会叙位、広義門院御所にて淵酔 へ上—40へ

三日 大嘗会、廻立殿の行幸、標山を曳く へ上—41へ

四日 節会 へ上—42へ

五日 清暑堂御神楽 へ上—43へ

六日 豊明節会（『宸記』では「踏哥節会」） へ上—46へ

元弘三年 一三三三 一月 七日 白馬節会 へ上—55へ

（正慶二年） 一六日 踏歌節会 へ上—56へ

閏二月二四日*先帝（後醍醐）隠岐脱出

三月二日 赤松則村、入京、光厳天皇、後伏見、花園兩上皇、六波羅北方へ行幸

へ上—63へ

五月 七日 高氏、入京し六波羅を攻む。光厳天皇、後伏見、花園兩上皇東国を目

指し脱出

九日 一行、近江番場にて守良親王（五辻宮）により阻まる。資名、出家

二八日 後伏見、花園兩上皇、廃主と近江より京に還御 へ上—75へ

六月二日 公宗、権大納言罷免

七月二日 後醍醐天皇中宮禧子（西園寺実兼女）西園寺氏を皇太后宮と為す

八月二日 公宗、権大納言に還任

一〇月二日 後京極院禧子、崩御

十二月 七日 公宗、中宮大夫

建武元年 一三三四

五月 九日 北山第に方違の行幸

一〇月一四日 北山第に行幸

建武二年 一三三五

六月二日 公宗、資名、氏光等謀反により捕縛さる

二六日 公重、家督相続決定 明日、流人宣下

八月 二日 公宗、氏光、三善文衡誅せらる

十一月二日 花園上皇、落飾

建武三年 一三三六

一月一〇日*後醍醐天皇、神器を奉じて東坂本に幸す

二月二五日 広義門院、落飾

（延元元年）

二九日 延元と改元

四月 六日 後伏見法皇、崩御

五月二七日*後醍醐天皇神器を奉じて東坂本へ、光厳上皇不子と称して同行せず

六月二四日 尊氏、光厳上皇、豊仁親王を奉じて入京

八月一五日 豊仁親王、踐祚（光明）

十一月二日＊神器授受の儀あり、後醍醐天皇に太上天皇の号を上る

一四日 成良親王、皇太子となる

十二月二日＊後醍醐天皇神器を奉じて吉野に潜幸

建武四年 一三三七

一月二六日 鷹司冬教、薨ず

九月二日 光明天皇、一條室町第より土御門東洞院殿に移御

十二月二八日 光明天皇、即位

暦応元年 一三三八

五月二日 資名、薨ず <下ー7>

八月二三日 北朝、益仁親王（崇光）を皇太子と為す

二八日 暦応と改元

十一月一九日 北朝、大嘗会

暦応二年 一三三九

一月一六日 今出川兼季、薨ず <下ー9>

八月一五日＊後醍醐天皇、讓位

一六日＊先帝（後醍醐）吉野にて崩御

歴応三年 一三四〇

四月二八日 南朝、興国と改元

五月二十九日 宣政門院、落飾 〈下―13〉
 六月十九日 興福寺東北院前大僧正覺円、寂す 〈下―14〉
 一月二十八日 光厳上皇、御幸始で北山第へ幸す
 八月二十九日 春日神木帰座 〈下―20〉
 曆応四年 一三四一

一月 七日 実俊の元服、拝賀
 二月 七日 実俊、左中将

曆応五年 一三四二
 一月 五日 実俊、従四位上

(康永元年)
 二月 二十八日 光厳上皇、北山第に幸す 〈下―26〉
 三月 三〇日 広義門院、御惱平癒

四月 二七日 北朝、康永と改元
 五月 七日 永福門院、崩御

〈下―38〉

八月 二日 今出川実尹、薨す 〈下―43〉
 一月 五日 実俊、正四位下

康永二年 一三四三
 一月 五日 北朝、叙位 〈下―50〉
 康永三年 一三四四
 二月 一〇日 西園寺宝蔵焼亡

康永四年 一三四五
 二月 八日 広義門院、土御門内裏・持明院殿に行啓

(貞和元年)

三月一六日 光厳上皇、褻御幸始で広義門院御所に幸す

是月 広義門院御逆修として五種行法を行う 〈上—53〉

一〇月二一日 北朝、貞和と改元

貞和二年 一三四六

二月三日 光厳上皇第二皇子弥仁親王著袴

五月二五日 大宮季衡、薨す 〈下—64〉

一二月五日 北朝、京官除目

貞和三年 一三四七

三月二九日 北朝、県召除目

五月二九日 光明天皇、方違で六条殿へ

九月二四日 西園寺公衡三十三回忌の仏事、光厳上皇、広義門院と北山第に幸す

〈下—78〉

貞和四年 一三四八

二月九日 光厳上皇、褻御幸始で広義門院の新殿に幸す

四月六日 北朝、後伏見天皇十三回忌仏事 〈下—85〉

二八日 北朝、臨時除目、公重右近衛大将に

九月一九日 光明天皇、方違で持明院殿へ幸す

明日広義門院の新殿へ幸す 〈下—90〉

一〇月一三日 北朝、直仁親王（光厳院皇子）、加冠

二二日 北朝、任大臣節会

二七日 光明天皇讓位、崇光天皇踐祚 <下—91>

一一月二一日 花園法皇、萩原殿にて崩御 <下—92>

二〇日 北朝、花園天皇遺詔奏

貞和五年 一三四九 一月二九日 光嚴、光明兩上皇、褻御幸始で北山第に幸す <下—98>

二月二七日 清水寺火災

三月二五日 北朝、県召除目、実俊、権中納言

<下—100 月日の確定できる日記の最終記事>

九月一三日 北朝、任大臣節会、公重、内大臣

一二月二六日 崇光天皇、即位

観応元年 一三五〇 二月二七日 北朝、観応と改元

四月二九日 北朝、大嘗会国郡卜定、権大納言四條隆蔭、権中納言西園寺実俊、参議
今出川公冬を大嘗会検校に補す

六月二八日 北朝前内大臣大炊御門冬信、薨ず

九月六日 長講堂供花、光嚴上皇御幸、広義門院も密儀を以て行啓

九月一八日 光嚴上皇、竹林院に御幸、尋で長講堂に御幸

十一月 八日 北朝内大臣左近衛大将竹林院公重、左近衛大将を辞す

九日 光厳上皇、花山院兼信に、若狹名田荘内下村の事につき、西園寺実俊の書状を下して、答陳せしむ

観応二年 一三五二 一月 一日 北朝、兵革により小朝拝、拝礼を停め、節会を省略

五日 北朝、兵革により叙位を停む

一日 北朝、兵革により、県召除目を停む

三月 一日 幕府、疎石をして、光厳上皇に謁し、両朝講和の事を奏す

一日 光厳、光明両上皇、持明院殿より今出川公直の菊亭に移御

二九日 直義、院御所菊亭に参り、大事を奏す

三〇日 崇光天皇、持明院殿より土御門殿に還幸、光厳、光明両上皇、菊亭より持明院殿に還御

四月 一〇日 北朝内大臣竹林院公重罷む

八月 一六日 後醍醐天皇一三回忌、北朝、天竜寺疎石に勅し、仏事を修す

九月 三〇日 前天竜寺住持疎石、寂す

十一月 七日 北朝の天皇及び皇太弟直仁親王を廃す

(正平六年) 十二月 二三日 北朝の神器を収む

二八日 光明、崇光両院に太上天皇の尊号を上る

光明上皇、御落飾

正平七年 一三五二 二月一六日 実俊、芝禅尼第に移住

是より先、竹林院公重に西園寺の家門を安堵せしむ、是日、公重、実俊より受ける

二六日 直義、鎌倉に死す

三月三日 光厳、光明、崇光三上皇、直仁親王及び尊胤法親王、河内東條に遷御

五月一日 義詮、竹林院公重をして竹林院第に帰住せしむ

六月二日 光厳、光明、崇光三上皇、及び直仁親王、賀名生に遷御

一九日 是より先、義詮、光厳上皇第三皇子を立て、政を聴くことを広義門院に請う、是日女院、皇子の踐祚を聴く

二七日 義詮、正平の制を停め、観応を旧に復すことを広義門院に請う

八月八日 光厳上皇、賀名生に於いて御落飾

一七日 北朝、弥仁王（後光厳）、土御門東洞院殿において踐祚

九月二七日 北朝、文和と改元

一一月二七日 北朝、西園寺実俊に伊予国衛領を安堵す

文和二年 一三五三 六月十三日 義詮、後光厳天皇を奉じて坂本より東走し、結局小島を行宮となす

二二日 南朝、洞院公賢を太政大臣に任ず、公賢をして久我長道、竹林院公重と議して、京都の事を沙汰せしむ

七月二二日 南朝、今出川公直の菊亭を収公して、同公冬に賜う、是日、広義門院、

菊亭より萩原殿に遷御

二六日 北朝、西園寺実俊に山城鳥羽殿領を安堵せしむ

二七日 北朝前権大納言正二位柳原資明、薨ず

八月 六日 北朝、左衛門督堀河具孝を罷め、西園寺実俊を替補す

二五日 後光厳天皇、小島行宮より垂井に遷御、在京の公卿を召す

九月二二日 後光厳天皇、京都に還幸、土御門殿に入御

二三日 北朝前内大臣竹林院公重、竹林院第を売り、京都を去る

一〇月一九日 北朝、西園寺実俊をして武家のことを執奏せしむ

十一月三〇日 北朝、西園寺実俊をして、竹林院公重の所領を領せしむ

十二月二七日 後光厳天皇、太政官庁で即位

二九日 北朝、追難除目、実俊、権大納言

文和三年 一三五四 六月 一日 西園寺実俊をして拝師莊の押妨を幕府に尋究せしむ

二月二日 花園天皇七回忌

一六日 北朝、大嘗会

一八日 北朝、清暑堂御神樂（比巴 実俊）

二月二四日 尊氏、後光厳天皇を奉じて、近江武佐寺に奔る

文和四年 一三五五 一月二日 後光厳天皇、近江成就寺に遷幸

二月 七日 後光厳天皇、東坂本の禰宜成国の第に移御

二八日 南朝中納言西園寺実長（公重男）、河内天野に薨ず

三月 二八日 後光厳天皇、土御門殿に還幸

八月 八日 光明法皇、天野より伏見殿に還御

九日 洞院公賢、出家

延文元年 一三五六 三月二八日 北朝、延文と改元

延文二年 一三五七 二月一八日 光厳法皇、崇光上皇及び直仁親王、河内金剛寺より京都に還御、法皇は

深草金剛寿院に、上皇は伏見殿に移御

四月 二九日 後光厳天皇、御琵琶始

閏七月 二二日 広義門院、崩ず

延文三年 一三五八 二月 二三日 名子、没

この表の項目は先述の基準に従って選んだが、その判断に、なお恣意的な面が残っているかもしれないことを断っておく。

この期間の史実について確認しておいたのは、記事の取捨選択に作者の意識を探ることができるかもしれないからである。『竹むきが記』の場合、記事内容から推測して、書かれていてもよいはずなのに書かれていないものについて、なぜ作者が書かなかったのかを考察することは、書かれてある記事について考察することと同様に重要な作業であると考えられる。その内容については、本章第三節で具体的に触れるが、本節では、史実の確認作業を行っての気づきを挙げておきたい。

上下巻通じて、後醍醐天皇の動向に関する記事（表に＊印をつけてあるもの）がほとんどないことが挙げられる。わずかに上巻の始めの頃に不安定な世情の一つの表れとして触れているにすぎない。吉野での後醍醐天皇の崩御（暦応二年八月一六日）は、下巻の執筆期間中であるにもかかわらず一切触れていない。

また、同様に、佐渡に流され当地で斬罪に処せられた日野資朝についても触れない。資朝は、資名の兄弟であるから、名子にとっては叔父にあたる。処刑された不名誉を畏れてか、事件そのものを憚ってかして回避したものと考えられるが、やはり後醍醐天皇との関係で書かなかった可能性がある。

日野家の関係でいえば、資朝と同様の立場の資明は本記下巻（八）に登場するが、和歌の贈答の相手としてであって、決して政治的立場で登場しない。名子の兄弟氏光の負傷にしても、その緊迫した状況に触れはするが、それは結局、公宗の見舞いの和歌の詞書的な説明である。名子の父資名にしても、「五節沙汰人々、花山・西園

寺殿・日野大納言^{實名}・權中納言^{假名}、五人なり」(上38)のように、記録上の必要で書かれることはあるが、その言動が具体的に描かれることはない。わずかに上44で、「制を固くせられて、櫛沙汰もなかりしを、無念なると、忍びて置かせ侍し也」とあるのみで、後は、出家についても同様で(上45)、「親同胞も苔の衣に立ち返ぬと聞く」といった程度であり、生身の人間、つまり作者の父親としての姿が見えてこない。そういう点では、記録的筆致であるともいえる。

他方、時代を描こうとすれば避けて通れないことを、避けていること前述のとおりである。それらが、作者にとって最も深刻な体験と密接に結びついている事柄であるからには、これらは、日記を中断してしまった感覚に通じ合うものといえるのかもしれないが、これについては別に考察したい。

さて、次には最も大きな特徴である中断期間について、具体的に何があったのか、何が書けなかったのかについて考えてみたい。さらに、それが作者にとってどのような意味を持っていたのかについても考える。

第二節 空白の意味―作者にとって―

『竹むぎが記』の上下巻の間にある中断は、元弘三年六月半ばから建武四年一二月までの約四年半にあたる。前節で見たように、この期間に、公宗・資名・氏光等が謀叛で捕らえられ、公宗は斬罪に処せられた。また、後伏見法皇の崩御、鷹司冬教の死去、光明天皇(北朝二代)の即位などがあった。一方後醍醐天皇は、一度は政權

を掌握したかに見えたが、「綸旨万能をふりかざした天皇による現実無視の諸政策の強行は政権内部にさまざま
な歪を生みだし、内部矛盾を拡大させた」（『国史大辭典』第二卷「南北朝の内乱」の項、佐藤和彦氏執筆）こ
とで、吉野への退去を余儀なくされた。鎌倉幕府の滅亡から南朝・北朝という二つの朝廷・政権が同時に存在す
るという異常事態に至る激動期のちょうど境目にあたる時期といえよう。このうち名子の人生にとって重大な体
験であったのは、夫公宗に関わる一連の事件であることは明白である。我が身の日記に書かれるべきであつたは
ずのこの事件は一体どのようなものであつたのか。まず、このことに絞って、現存する史料から、判明する範囲
で実相を明らかにしておきたい。史料別に関係分の本文を挙げる。

『公卿補任』建武二年条

西園寺同公宗^{二十六} 中宮大夫。四月七日兵部卿。六月廿二日勘勅被召捕之。同廿六日勘罪名。八月二日
所誅也。

『建武二年六月記』（『匡遠記』）〔『続々群書類従』所収〕

廿二日壬申、晴、参^{類考}史^{類考}□所了、今日西園寺大納言^{公宗、卿}日野中納言入道^{資名卿}父子三人被^二召置^一云々、各武
士發向云々、心外事上、又於^二建仁寺前^一召^二捕隱謀輩^一了、正成師直發向云々、於^二所々^一猶爲^二召捕^一云々、
廿六日丙子、（中略）

建武二、三^年六月廿六日 宣旨

權大納言藤原朝臣公宗、左近衛權中將藤原朝臣俊季、左衛門佐藤原朝臣氏光、文衡法師、散位中原朝臣清景等奉_レ太上天皇旨、謀_レ危_二國家_一、宜仰_二明法博士等_一、令_レ勘_二申所當罪名_一、

藏人右小辨藤原範國_奉

建武二年六月廿六日 宣旨

濱名法師乍_レ知_二子息氏光陰謀_一、與同意不_レ告_二官司_一、宜仰_二明法博士等_一、令_レ勘_二申所當罪名_一、

藏人右小辨藤原範國_奉

廿七日丁丑、晴、流人宣下也、（以下略）

『尊卑分脈』

（藤原北家、師輔男公季流）公宗 正二位兵部卿中宮大夫春宮大夫權大納言 母為世卿女〔昭訓門院春

日局〕 建武二八二被誅依天下事也

（藤原北家、真楯子内麿孫）氏光 左衛門權佐（イ春宮_ト大進号裏松）中先代隱謀之時依公宗卿命書院
宣仍元弘三八二被誅了

『師守記』第二十三卷 貞和三年四月廿四日條（『史料纂集』所收）

廿四日、丙申、…御返事云、西園寺故大納言〔公宗卿〕配流[#]解官事無所見候、但建武二年六月廿二日蒙勅勘被召捕、〔于時權大納言、中宮大夫、兵部卿、〕八□□被薨由、被注置候^{云々}、

『園太曆』延文四年一二月二日條 三條実継書狀〔『史料纂集』所収〕

西園寺故大納言^{〔公宗〕} 建武二年六月廿二日被召捕、同廿六日被勘罪名候、八月二日所誅候云々、若誅戮以前被解官候哉、謀反罪名治定候者、可致除名候、へ傍書 尤可然候、其比物 無沙汰歟、沙汰之趣、公卿補任注落候歟と覺候、へ本官全候事よてと存候、然而所見不詳候、若被知食候哉、風雅集二八、只權大納言と候やらん、へ傍書 只此儀、何事候哉とこそ覺候へ、へ彼時分、中宮大夫・兵部卿等を兼候、當職候者、宮司號を可載歟と相存候、此事申出候間、黃門^{〔爲明〕} も令不審候き、餘々取亂候、能々治定候者、可申旨詔置候、仍申入候也、（以下略） へへ内傍書は、公賢のものと思われる

『神皇正統記』下 後醍醐天皇の條 〔『日本古典文学大系』87〕

建武乙亥ノ秋ノ比、滅ニシ高時ガ餘類謀反ヲオコシテ鎌倉ニイリヌ。直義ハ成良ノ親王ヲヒキツレ奉テ參河國マデノガレニキ。兵部卿護良親王コトアリテ鎌倉ニオハシマシケルヲバ、ツレ申ニヲヨバズウシナヒ申テケリ。ミダレノ中ナレド、宿意ヲハタスニヤアリケン。都ニモ、カネテ陰謀ノキコエアリテ嫌疑セラレケル中ニ權大納言公宗卿召ヲカレシモ、コノマギレニ誅セラル。承久ヨリ關東ノ方人ニテ七代

ニナリヌルニヤ。高時モ七代ニテ滅ヌレバ、運ノシカラシムルコトトハオボユレド、弘仁ニ死罪ヲトメラレテ後、信頼ガ時ニコソメヅラカナルコトニ申ハベリケレ。戚里ノヨセモ久シクナリ大納言以上ニイタリヌルニ、オナジ死罪ナリトモアラハナラヌ法令モアルニ、ウケ給オコナフ輩ノアヤマリナリトゾキコエシ。

『統史愚抄』建武二年六月 〔『新訂増補 国史大系』第十三卷〕

○廿二日壬申。中宮大夫^{公宗}。謀反發覺。〔與^ニ故相摸守入道高時餘黨^ニ通^レ志。有^下欲^レ傾^ニ朝家^ニ之企^上云。〕

因遣^ニ武士于北山第^ニ收^ニ執^一之。亦依^レ爲^ニ同志^一。同執^ニ左中將季經朝臣^一。〔橋本前宰相^{實俊}男。或作^ニ俊季^一。

謬。于^レ時無^ニ俊季者^一。〕右衛門佐氏光。〔入道大納言^{實名}二男。依^ニ中宮大夫^{公宗}。誂^ニ僞^ニ書院宣^ニ故云。〕

入道三善文衡等。〔○公卿補任、園太曆^{道（延文四十三）}、系圖^{二部}、神皇正統記、類本太平記^{或季經不補}、南方紀傳

^{作俊季、}諸家傳〕（中略） ○廿六日丙子。被^レ勅^ニ中宮大夫^{公宗}。及左中將季經朝臣已下罪名^一。此日。各

解官云。〔○公卿補任、或記、園太曆^{道（文和四、延文四十三）}、同〕（中略） ○二日辛亥。前中宮大夫。公宗。前

左中將季經朝臣。前右衛門佐氏光。入道三善文衡等伏^レ誅。〕（以下略）

これらの他に、この間の事情について詳記するのが、次に掲げる『太平記』卷十三の叙述である。少し長くなるが、北の方（名子）との別れの場面とその後の実俊養育に関する記述を中心にして引用する。

『太平記』卷十三「北山殿謀叛事」〔『日本古典文学大系』357〕

明日必配所へ赴キ給ベシト、治定有ケル其夜、中院ヨリ北ノ御方へ被_レ告申_二ケレバ、北ノ方忍タル體ニテ泣々彼コへ坐シタリ。暫ク警固ノ武士ヲノケサセテ、籠ノ傍リヲ見給ヘバ、一間ナル所ノ蜘蛛手密ク結タル中ニ身ヲ縮メテ、起伏モナク泣沈ミ給ケレバ、流ル、泪袖ニ餘リテ、身モ浮ク許ニ成ニケリ。大納言殿北ノ方ヲ一目見給テ、イトゞ泪ニ咽ビ、云出シ給ヘル言葉モナシ。北ノ方モ、「コハ如何ニ成ヌル御有様ゾヤ。」ト許涙ノ中ニ聞ヘテ、引カヅキ泣伏給フ。良暫有テ、大納言殿泪ヲ押ヘテ宣ケルハ、「我身カク引人モナキ捨小舟ノ如ク、深罪ニ沈ミヌルニ付テモ、タミナラヌ御事トヤラン承リシカバ、我故ノ物思ヒニ、如何ナル煩ハシキ御心地カアランズラント、ソレサヘ後ノ闇路ノ迷ト成ヌベウ覺テコソ候ヘ。若ソレ男子ニテモ候ハゞ、行末ノ事思捨給ハデ、哀ミノ懷ノ中ニ人トナシ給ベシ。我家ニ傳ル所ノ物ナレバ、見ザリシ親ノ忘形見トモナシ給ヘ。」トテ、上原・石上・流泉・啄木ノ秘曲ヲ被_レ書タル琵琶ノ譜ヲ一帖、膚ノ護ヨリ取出シ玉テ、北ノ方ニ手カラ被_レ渡ケルガ、側ナル硯ヲ引寄テ、上巻ノ紙ニ一首ノ歌ヲ書給フ。

哀ナリ日影待間ノ露ノ身ニ思ヲカル、石竹ノ花

硯ノ水ニ泪落テ、薄墨ノ文字サダカナラズ、見ル心地サへ消ヌベキニ、是ヲ今ハノ形見トモ、泪ト共ニ留玉ヘバ、北ノ御方ハイトゞ悲ミヲ被_レ副テ中々言葉モナケレバ、只顔ヲモ不_レ擡泣給フ。去程ニ追立ノ官人來テ、「今夜先伯耆守長年ガ方ヘ渡シ奉テ曉配所ヘ可_レ奉_レ下。」ト申ケレバ、頓テ物騒シク成テ、

北方モ傍ヘ立隠給ヌ。サテモ猶今ヨリ後ノ御有様如何ト心苦覺テ、透垣ノ中ニ立紛テ見玉ヘバ、大納言殿ヲ請取進ントテ、長年物具シタル者共二三百人召具シテ、庭上ニ並居タリ。餘リニ夜ノ深候ヌルト急ケレバ、大納言殿繩取ニ引ヘラレテ中門ヘ出玉フ。其有様ヲ見給ケル北ノ御方ノ心ノ中、譬ヘテ云ハン方モナシ。既ニ庭上ニ昇居タル輿ノ簾ヲ褰テ乗ラントシ給ケル時、定平朝臣長年ニ向テ、「早。」ト被ヒ云ケルヲ、「殺シ奉レ。」トノ詞ゾト心得テ、長年、大納言ニ走懸テ鬢髮ヲ搦デ覆ニ引伏セ、腰刀ヲ抜テ御頸ヲ搔落シケリ。下トシテ上ヲ犯ント企ル罰ノ程コソ恐シケレ。北ノ方ハ是ヲ見給テ、不レ覺アツトヲメイテ、透垣ノ中ニ倒レ伏給フ。此儘頓テ絶入給ヌト見ヘケレバ、女房達車ニ扶乗奉テ、泣々又北山殿ヘ歸シ入レ奉ル。サシモ堂上堂下雲ノ如ナリシ青侍官女、何地ヘカ落行ケン。人一人モ不レ見成テ、翠簾几帳皆被ニ引落ニタリ。常ノ御方ヲ見給ヘバ、月ノ夜・雪ノ朝、興ニ觸テ讀棄給ヘル短冊共ノ、此彼ニ散亂タルモ、今ハナキ人ノ忘形見ト成テ、ソビロニ泪ヲ被レ催給フ。又夜ノ御方ヲ見給ヘバ、舊キ衾ハ留テ、枕ナラベシ人ハナシ。其面影ハソレナガラ、語テ慰ム方モナシ。庭ニハ紅葉散敷テ、風ノ氣色モ冷キニ、古キ梢ノ梟聲、ケウトゲニ啼タル曉ノ物サビシサ、堪テハ如何ト住ハビ給ヘル處ニ、西園寺ノ一跡ヲバ、竹林院中納言公重卿賜ラセ給タリトテ、青侍共數タ來テ取賃ヘバ、是サヘ別ノ憂數ニ成テ、北ノ御方ハ仁和寺ナル傍ニ、幽ナル住所尋出シテ移玉フ。時シモコソアレ、故大納言殿ノ百箇日ニ當リケル日、御産事故無シテ、若君生レサセ玉ヘリ。アハレ其昔ナラバ、御祈ノ貴僧高僧歡喜ノ眉ヲ開キ、弄璋ノ御慶天下ニ聞ヘテ門前ノ車馬群ヲ可レ成ニ、桑ノ弓引人モナク、蓬ノ矢射ル所モナキアバ

ラ屋ニ、透間ノ風冷ジケレドモ、防ギシ陰モカレハテヌレバ、御乳母ナンド被_レ付マデモ不_レ叶、只母上自懷キソダテ給ヘバ、漸ク故大納言殿ニ似給ヘル御顔ツキヲ見玉フニモ、「形見コソ今ハアタナレ是ナクバ忘ル、時モアラマシ物ヲ。」ト古人ノ讀タリシモ、泪ノ故ト成ニケリ。悲歎ノ思習ニ滿テ、生産ノ筈未_レ乾、中院中將定平ノ許ヨリ、以_レ使、「御産ノ事ニ付テ、内裡ヨリ被_ニ尋仰_ニ事候。モシ若君ニテモ御渡候ハミ、御乳母ニ懷カセテ、是ヘ先入進ラレ候ヘ。」ト被_レ仰ケレバ、母上、「アナ心憂ヤ、故大納言ノ公達ヲバ、腹ノ中マデモ開テ可_レ被_ニ御覽_ニ聞ヘシカバ、若君出來サセ給ヌト漏聞ヘケルニコソ有ケレ。歎ノ中ニモ此子ヲソダテ、コソ、故大納言殿ノ忘形見トモ見、若人トナラバ僧ニモナシテ、無跡ヲモ問セント思ツルニ、未ダ嬪房モ離ヌミドリ子ヲ、武士ノ手ニ懸テ被_レ失ヌト聞テ、有シ別ノ今ノ歎ニ、消ハビン露ノ命ヲ何ニ懸テカ可_ニ堪忍_ニ。アルヲ限ノ命ダニ、心ニ叶フ者ナラデ、斯ル憂事ヲノミ見聞ク身コソ悲シケレ。」ト泣沈ミ給ケレバ、春日ノ局泣々内ヨリ御使ニ出合給テ、「故大納言殿ノ忘形見ノ出來サセ給テ候シガ、母上ノタミナラザリシ時節限ナキ物思ニ沈給フ故ニヤ、生レ落玉ヒシ後、無_ニ幾程_ニハカナク成給候。是モ咎有シ人ノ行エナレバ、如何ナル御沙汰ニカ逢候ハンズラント、上ノ御尤ヲ怖テ、隠シ侍ルニコソト被_ニ思召_ニ事モ候ヌベケレバ、僞ナラヌシルシノ一言ヲ、佛神ニ懸テ申入候ベシ。」トテ、泣々消息ヲ書給ヒ、其奥ニ、

僞ヲ糺ノ森ニ置露ノ消シニツケテ濡ル、袖哉

使此御文ヲ持テ歸リ參レバ、定平泪ヲ押ヘテ奏覽シ給フ。此一言ニ、君モ哀トヤ思召レケン、其後ハ御

尋モナカリケレバ、ウレシキ中ニ思ヒ有テ、燒野ノ雉ノ殘ル叢ヲ命ニテ、雛ヲ育ラム風情ニテ、泣聲ヲダニ人ニ聞セジト、口ヲ押ヘ乳ヲ含テ、同枕ノ忍ビネニ、泣明シ泣暮シテ、三年ヲ過シ給シ心ノ中コソ悲シケレ。其後建武ノ亂出來テ、天下將軍ノ代ト成シカバ、此人朝ニ仕ヘテ、西園寺ノ跡ヲ繼給シ、北山ノ右大將實俊卿是也。

これらの史料から判明することは、次の二点である。

- 一、西園寺公宗が謀叛の陰謀発覚で、建武二年六月二二日に捕縛され、二六日流人宣下、八月二日に誅された。
- 二、この時連座したのは、日野資名・氏光父子、俊季（季経とも）、文衡、清景などである。このうち、氏光は公宗とともに処刑されたらしいことが、『尊卑分脉』からわかる。

夫公宗とともに、父・兄弟までも連座したということは、名子に深刻な衝撃を与えたに違いない。

西園寺公宗が北条氏の復権を諂らなければならなかった理由を、『太平記』は「是モ承久ノ合戦ノ時、西園寺ノ太政大臣公經公、關東ヘ内通ノ旨有シニ依テ、義時其日ノ合戦ニ利ヲ得タリシ間、子孫七代迄、西園寺殿ヲ可ニ憑申ニト云置タリシカバ、今ニ至迄武家異レ他思ヲ成セリ。依レ之代々ノ立后モ、多ハ此家ヨリ出テ、國々ノ拝任モ半ハ其族ニアリ。然レバ官太政大臣ニ至リ、位一品ノ極位ヲ不レ極ト云事ナシ。偏ニ是關東最眞ノ厚恩也」（「北山殿謀叛事」）としている。西園寺氏は、關東申次という役目上鎌倉幕府と朝廷との間に立ち、公武の折衝の窓口として常に政権の中枢に位置し、そのことによって政治に深く関与してきた。しかし、鎌倉幕府の滅亡

によって、その重要な位置を失ったのである。公宗が西園寺家の政治的な復活を目指そうとすれば、幕府と親密な関係にある持明院統の皇統を主軸とする権力中枢への復帰を果たそうとするのは自明の志向であり、公家一統の政治を実現しようとする後醍醐天皇とは、利害が対立するのは当然のことである。その場合、公宗の動きは、大覚寺統から見れば「謀叛」と呼ばれるべきものであった。そのあたりの政情を『太平記』は語っているのである。『太平記』は、謀叛はあったことにして、後醍醐天皇暗殺の計略にまで話を進めている。

この計略は、「西ノ京ヨリ番匠數タ召寄テ、俄ニ溫殿ヲゾ被レ作ケル。其襄場二板ヲ一間蹈メバ落ル様ニ構ヘテ、其下二刀ノ簇ヲ被レ殖タリ。是ハ主上御遊ノ爲ニ臨幸成タランズル時、華清宮ノ溫泉ニ准ヘテ、浴室ノ宴ヲ勸メ申テ、君ヲ此下ヘ陥入奉ラン爲ノ企也」というものであるが、発想の参考にしたものとして、『日本書紀』・『古事記』などが考えられる。『日本書紀』卷第三「神日本磐余彦天皇 神武天皇」の項には「乃ち潜に其の兵を伏して、權に新宮を作りて、殿の内に機を施きて、饗らむと請すに因りて作難らむとす」とあり、また『古事記』中巻には「仕へ奉らむと欺陽りて、大殿を作り、其の殿の内に押機を作りて待ちし」とある（原文漢文、今は『日本古典文学大系』によって書き下し文を掲出する）。共に、罾を仕掛けて天皇を暗殺しようとする計略なのである。しかもこの話は、兄（『日本書紀』では「兄狛」、『古事記』では「兄宇迦斯」）の謀略を弟（同様に「弟狛」・「弟宇迦斯」）が天皇に密告するという構造となっているのである。

これらの点から、『太平記』の叙述には、虚構の可能性が指摘できるといえよう。とすれば、勅使の中院定平が興の出發を促して「早」といったのを、名和長年が、早く殺し奉れといわれたように誤解したという記述も、

虚構としてもおかしくない程、劇的で好都合な話の展開なのだが、一方、『神皇正統記』で北畠親房は、「コノマギレニ誅セラル。（中略）戚里ノヨセモ久シクナリ大納言以上ニイタリヌルニ、オナジ死罪ナリトモアラハナラヌ法令モアルニ、ウケ給オコナフ輩ノアヤマリナリトゾキコエシ」と記している。このことからして、公宗殺害の事情に関する記述に限っていえば、まんざら『太平記』作者の作り事ばかりとはいえず、事実としてもあり得たといえよう。『神皇正統記』は、本来死罪を免れるはずであったのに殺されてしまった事情を説明し、一旦配流が決定したにもかかわらず斬罪に処せられてしまった公宗の不運に同情的な筆致である。この事件は動き出した時代の生んだ悲劇といえるが、公宗が、本来は死罪を免れるべき立場にあったことはここで確認しておきたい。

『竹むぎが記』が、この期間についての記述を欠くことについて、従来さまざまな可能性が論じられてきた。次にはこの点について、なぜ中断しているのか、またそのことは、名子にとってどのような意味があったのかに焦点を合わせて考えてみたい。

初めて、本記を紹介された和田英松氏は、次のような見解を示された（注62）。

此書今傳はれるは二巻なれど、上巻は正慶二年にて終り、下巻は建武四年十二月に始まりたれば、上下の間三年ばかり脱せり、もとは三巻なりしが、いつの程にか、中巻は散逸せしものならん。（中略）若し中巻にして傳はりたらんには、著者の夫西園寺公宗の誅せられし顛末なども詳に、其真相も明かならんを、惜しむべき事なり。されど、上下巻の中にも、また貴重なる史料とすべきもの尠からざれば、今其一二を左に抄出

して参考に資せんとす。

中巻の存在を想定し、それが散逸したという考えであった。あくまでも「日記」という形の史料としてとらえるならば、連綿と書き継がれるべきところに中断があるということは不自然なことである。したがって、氏は、その他の史料の場合と同様に散逸したものと考えられたものであろう。

また、「今年、この君真魚の事あり。十二月廿一日に右大臣殿に渡り給」という下巻の唐突な書き出しによっても、その可能性は指摘されるように思える。しかし、この点については、逆に、中断の後、何の記事から書き始めるかを選択し決定した後の改まった気持ちの反映とも考えられる。だからこそ、作者にとって書き慣れた公的日記の形式に則った「日付↓記事」という書き方を採ったのではないだろうか。

現在では、大方は、あまりに凄惨で深刻な出来事なので作者には何年経っても書くことができなかったであろうという推測が支持されている（註 63）。

これに、別の面での意味付けを行ったのが、位藤邦生氏である（註 64）。

名子が日記の中で公宗の死を悼めば、当時の恨みを書かざるを得ない。だが、貞和五年の時点では、そのことはできなかったわけである。天皇、上皇、広義門院その他の人々、尊氏に対しても、公宗の思い出を記すことは憚られたのだ。更にもう一つの理由を考えるなら、かつて公宗の陰謀を密告した竹林院公重が、この時正二位内大臣として北朝に仕えており、この人物への配慮も考えられる。氏光の場合も、その死を悼むことができなかった理由は、公宗の場合と同様である。実俊のため、ただ一つに実俊のためであった。（中略）

断腸の思いがなかったわけではない。蓋し、それを公表することは許されなかったのである。

このように述べられた上で、「この考えに立てば、『竹むきが記』中巻は、書かれなかったと考えるのが適當である」、「或いはもし書かれたにしても、決して人の目に触れることなく、名子自身の手によって篋底深く秘されたか、焼き捨てられたことであろう」と結論しておられる。公宗をいわば見殺しにした人々すなわち崇光天皇、光厳・光明兩上皇、広義門院らは執筆時点で実俊の後援者であるから、その人々に対して憚って名子は正直に自分の恨み、悲しみを書けなかったという論旨である。そういった側面も確かにあったのかもしれないが、このことはむしろ、もっと作者の内面に根ざしている問題のように思えてならない。そのことについて、次に考えてみる。

『太平記』の描く如く作者の眼前で公宗が斬られたかどうか確認する手だてを持たないが、そうでないにしても、死罪になるはずのない夫が手違いから（あるいは暗黙に謀られたものか）殺されてしまい、妊娠中の作者が一人残されたという事実は確認できる（註 65）。また、公重の密告についても検証することができず、先の『日本書紀』などの記述から虚構の可能性も否定できないが、結果として公宗亡き後、西園寺家の家督を継いだことからして、そのような印象を当時の人々に与えたかもしれないことは想像できる。名子自身が公重に対して決してよい感情を持っていないことは、『竹むきが記』の文中からもうかがうことができる（註 66）。病気などでなく、人為的にもたらされた夫の死について、妻がどれ程悲しむか、そして、再び北朝の世となるまでの間、作者が嘗めたであろう辛酸がいかに厳しいものであったのかも、想像に難くない。公宗一人の愛情を頼りに家格の違いを

乗り越えて西園寺家に入った名子にしてみれば、公宗を失うことは、一切を失うことに等しかったはずである。しかも罪人として処刑されたとなれば、なおさら感情的にも、状況的にも苦しさは増したに違いない。夫の死に引き続いての出産であったのは確かであるから、そうなれば名子は自分が生きていくことに追われて、おそらく手控えも書けない状態だったのではないだろうか。

先に、『竹むきが記』上下巻において後醍醐天皇関係の記事をほとんど排除していること、日野家の縁者についてでもその政治的立場を明確にすることを避けていることなどを確認しておいた。それに加えて、公宗の死に関しての作者の態度について、本記の記事から確認しておきたい。それが、中巻の存否に関わる問題であると考えからである。

作者は、下巻において、父資名の死にあたっては、死の前の不調から書き記した上、「いとあさまし」、「ともかくも言の葉もなし」、「心の中ども、言はん方ぞなき」、「一筋に悲しあはれのみにもあらず」、「いと悲しうぞ侍」と言葉を連ねている(下6〜8)。また、永福門院の崩御の場合も、病状を書いた上に、「いとあはれに悲しうなん」、「一方ならぬ御名残も言はんかたなし」、「いと無念なる御事にぞ(中略)前後のさかひも今更に恨めしうなん」、「更に又かきくれ侍ける」と言い募っている(下37〜41)。多くの有縁の人の死を記録している中で、この二人の場合は、殊に心情を明確に表現している。それだけ二人は、名子にとって信頼に足る後援者、助力者であり、心の支えであったのであろう。このように、重ねて自らの悲しみを綴ることができる作者が、夫公宗の場合はどのような描き方をしているだろうか。下二は、公宗の十三回忌の記事であるが、「憂

世に耐えたるつれなさも、さらに驚かれつゝ、十年あまり三年の秋を迎へぬ」と書き起こすだけで、後は、行事の次第を記録するのみである。あえて一般的な言い方を選び、臙化させている。しかも、この記事の直後に、公衡の三十三回忌の記事を続けて、殊更西園寺家の法事という一連の行事の中の一つという位置付けにしかすぎないような配列にしている。また、初瀬の観音を信仰してきていることについて、下段では、「なべて神仏をも恨めしく思ひし世に、捨て果て聞えしかど、さてもあらず」と昔のつらかった頃に触れてはいるが、ここでも、それと推し量られる程度の表現で、決してその「神仏をも恨めしく」思った事件については、具体的なことを描かない。永福門院の強い意向で、実俊と共に再び北山第に戻った折も（下段）、本当は当時の事をまざまざと思い出してしまったであろうが、「何処もありしに変わねば、面影浮ぶ事多し」と簡単に書くのみである。ここにも具体的な叙述がない。

『竹むきが記』中、唯一それらしい感情を比較的露に出しているのは、下段である。ある人の夢の中で「昔人」（公宗のことであろう）が「思ひ置くそれをば置きて言の葉の露の情などなるらん」と詠んだと伝え聞いて、「人の御心ども、恨み給事もあるにやと思ひ合する事もあるに、更に悲しう思ひ続けらる」と記している。自分の直接の体験でない伝聞の記事をどうして入れなければならなかったのか、またこの記事が、尊氏との交流に関わっての永福門院の和歌と、女院の不調の記事との間に配置されていることは、どういう意味があるのか。その話を、ちょうど「その頃」聞いたので、そのまま日次で入れたとも、また前段に「例の家門の沙汰あれば」とあるのでその関連でここに入れたとも考えられる。そうであるとすれば、この伝聞が名子に与えた衝撃の大きさを

証するものといえはしまいか。名子は、夫公宗の意志でもあるが如く受け止めたのではないだろうか。だからこそ、聞いた時点で即記したものであろうし、恨みもあると「思ひ合」せ、「更に悲しう思ひ続け」ることになったのである。心の底に沈めていたものが、その衝撃によって思わず浮かび上がってきたものであろう。それは、名子の心に癒すことのできない悲しみが継続して存在し続けている証左でもある。それにしても、ある人の夢を借りる形を採ってはじめて少しばかり正直に心情を吐露するというのは、衝撃のせいとはいえ、かなり屈折した心理状態と言わざるを得ない。余程の心構えで記事を選んでいるのではないかと推量される。この事件を慎重に回避しているのである。

右のように、作者はこの事に正面から対峙できないでいる。何年経っても、できれば触れたくない、思い出したくない、忌まわしく忘れ去りたい体験だったのではないだろうか。そうであれば、そのことを客観視して記録することなど、名子には到底できなかったのではないだろうか。それは、記録的態度からの大きな逸脱であったが、時間による解決を望めないほど、名子にとって深刻な傷であり続けたということの証であろう。『竹むきが記』擱筆の後、何年も沈黙を守ったまま死んでいったことにも、そのことが感ぜられる。これらの点から、中巻は始めから書かれなかったと考えるのが至当であろう。

それでは、この空白の時間に作者にとっての意味を見つけることができるだろうか。松本寧至氏は、このことについて、次のようにまとめておられる（註67）。

このように『竹むきが記』上下を構想的にながめると、『太平記』の記事のように、公宗の存在、というよ

り公宗の死と実俊の誕生が、その中心にすえられ、それによって、上巻に返り、下巻に発展して行ったことが考えられる。この事件は『太平記』にのみあって『竹むぎが記』にないが、実はこれらが上下という作品の核になっているのである。しかし、それはやはり書かれなかった。いや書けなかった。だが、書けなかったことが、そのまま上巻下巻を要求した。書かれなかった中巻ともいうべき空白のために、上下が書かれたともいえるのである。(中略)作者のとった方法は、まことに痛ましい発想といわねばならないが、一般論としていえばこれを日記文学の虚構性とも文学性ともいうことが出来ると思う。書いた部分が書かない部分によって支えられるのも文学上の重要な問題であるが、『竹むぎが記』のように、書かない部分のかわりに書くという大胆な構想もまことに意味深いことである。

『竹むぎが記』の構想の中心に公宗の死と実俊の誕生があり、それが上下巻を連結しているという作者の意識的構想論として捉える点について賛成するのはためらわれるし、空白の時間にこれだけ明確な意味付けをすることができのいかとも疑問である。しかし、名子は、少なくとも上下巻は確かに書いたのである。そのことは、氏の所説のとおり、つらい思い出に正面から対峙し書いてゆくことができなかったからこそ、書けることを書くことが彼女にとっては意味を持つ行為であることができた、つまり書けなかった中巻が、上下巻を要求したことを示しているものであろう。書けなかったことが、作者の書くエネルギーとなっていたという心理の推移は十分考えられる。どうしても表に出すことができない悲しみは、屈折しつつ彼女の胸の底に溜まっていくしかなかった。その上澄みを、書くことによってすくい取り、せめてもの慰めにしていったのではないだろうか。下巻二

・32の長講堂の思い出に浸った段につきのようにある。

弥生の比、若宮に詣でたるに、長講堂近く見やらるれば、車さし寄せて見巡る。昔供花の折など、心に浮ぶ事多し。花の下に立ち寄れるに、変らぬにも、見し世の春にめぐり逢ひぬる心地して、思ひ出づる昔語りもせまほしきを、花物言はぬ慣ひさへぞ恨めしかりける。何時の年なりしにか、御八講の比、人目もなくなりにし夕べに、二御所、女房あまた御供にて、何となき事ものたまはせしかば、二位殿・宰相の典侍などやうの人々、古今の事も聞え出でつゝおはしましし御面影をはじめ、をの／＼並み候ひし人々此彼と思ひ出づるに、同じ世なるも少く、或るは苔の袂のあらぬ世に立ち返、さらでも己がさま／＼に、よしあしにつけつゝ、身を変へぬるなど、取り集め思ひ続けるに、涙さへこぼれぬ。

感傷に浸るまま思わずほとばしり出た彼女の思いである。一般的な言い方、多くの縁あった人々について言っているようにぼかしてあるが、紛れもなくその思いの中心には公宗がいる。

夫の刑死によって、今までの生活すべてが破壊されるという体験は、作者の人生観や世界観に影響を及ぼさないではおかぬ。名子は、変わってしまった己の心底をこそ書き残そうとしたのではないかと考えているが、それは後述する。

第三節

書かれたものと書かれなかったもの

前節では、中断期間に焦点を絞って、その意味について検討したが、つぎには、『竹むきが記』の全体像と史実および作者の実人生との隔りというものについて考えてみたい。

一 各巻の冒頭章段・最終章段の意味

下巻擧筆の四年後（文和二年）、公重は、都を去り南朝方に走った。その四年後、延文二年には広義門院も崩御している。それから七ヶ月後の延文三年二月二三日に名子は亡くなっている（『公卿補任』・『愚管記』）。その間、無言のまま過ごしていることからしても、下巻の擧筆には名子にとって重大な意味があることが考えられる。貞和五年の時点で、この記を付けることをやめたしまった意味は、慎重に検討されなければならない。同様に、上巻冒頭・跋文の意味も下巻冒頭の意味も重要である。まず、この事について考察する。

現存のもの以前の記事の欠落がないと仮定しての話になるが、名子は、なぜ春宮量仁の元服の記事から、記述をはじめたのだろうか。『史料綜覧』の嘉暦三年の記事に次のようなものを見出すことができる。

六月三日、後伏見上皇、御願文ヲ日吉社ニ納メ給ヒ、量仁親王ノ登祚ヲ祈ラセラル、伏見宮御記録

九月四日、後伏見上皇、御願文ヲ賀茂社ニ納メ、皇太子ノ登祚ヲ祈ラセラル、後伏見院御額書

十一月廿一日、後伏見上皇、量仁親王ノ登祚ヲ石清水ニ祈リ給フ、伏見宮御記録

また、元弘元年、後醍醐天皇が禁裏を脱出し笠置山に潜行した折にも、

八月廿六日、後伏見上皇、願文ヲ賀茂社ニ上ラレ、天下ノ静謐、太子ノ登祚ヲ祈ラセ給フ、伏見宮御記録

という行動を起こしている。これらを見ると、後伏見院が並々ならぬ熱意を以て、広義門院寧子腹の量仁親王の登祚を望んでいたことがわかる。広義門院は、西園寺公衡女、公宗の叔母にあたる（『尊卑分脉』）。また、名子の父資名の残した日記『日野資名卿記』には、元徳元年二月八日の条に、春宮元服に関する議定についての詳しい記述がある（^{注 68}）。また、現存しないが『資名卿記』には、引き続き二月に「廿二日甲辰、此日。可^レ有^二東宮御元服^一而被^二延引^一」、「廿四日丙午。重被^レ定^二東宮御元服日時^一」、「廿八日庚戌。皇太子量仁親王^レ御年十四。院第一皇子。母廣義門院。」於^二紫宸殿^一被^レ加^二元服^一」などと量仁親王の元服に関する記述があったことが、『續史愚抄』に記されている。これらのことは、後伏見院も資名とともに量仁親王の元服について強い関心を持っていたことを示している。名子が、この記事を冒頭に選んだのには、そのことが関係していると考えられる。

資名は父であるからともかく、後伏見院の関心の在り所に名子はなぜ影響されたと考えられるのであろうか。名子の出仕先については、早く和田英松氏が広義門院としておられたが（^{注 69}）、それに対して岩佐美代子氏は、「名子は最初後伏見院の女房であり、光厳天皇践祚の際に典侍として内裏方に移ったもの」と推定されている（^{注 70}）。根拠として氏が挙げておられるのは、次の点である。

一、内裏出仕以前に彼女の仕えた可能性のあるのは後伏見院・花園院・広義門院の三者であるが、このうち上巻の記述の中で最も主語としてその名のあらわれる事の少ないのが後伏見院であること。このことは名子が後伏見院に最も近い立場にあった事を示している。

二、広義門院は量仁親王（光厳天皇）の生母であるが、その養育にかかわる面は甚だ少なく、親王は後伏見・花園・永福門院の三者の協力で育てられている。従ってその踐祚にあたって内裏方に選ばれる主だった女房が広義門院方から出る可能性が少ないこと。

三、御禊の行幸を見物する院・新院御幸の記（上35）において、後伏見院については主語を全く省いてくわしくその装束を記しているが、花園院については「新院、西妻戸より出御なる。その程に、御前の声、華やかに聞ゆ。（後伏見院が）御隨身を譲り奉らせ給へばなるべし」とのみある。その書きざまは、明かに後伏見院方に立ってのものであり、花園院方の女房のそれではありえないこと。

この推定は、十分な説得力を持っていると考えられる。さらに付け加えるならば、例えば下34、御堂にて「昔御懺法の頃」の思い出を辿るところで、後伏見院に名子が「暗き夜に一人御供」して「さま／＼に乱れ遊び」しているところをのぞき見る場面がある。そこで院は遊びで作った「ちやすこし」の五文字を頭にすえた折句を名子に書かせて、知られないように置いて彼らがどう言いかと戯れを仕掛けていく。この夜のことを名子は「はかなき事も御情をそへられしなど、その世の御面影も更にぞ浮び侍ける」と懐かしく回想している。この状況は、名子が院と非常に親密な関係にあったことを物語っている。そしてそれは、量仁親王自身への親近感ともなったであろう。後のことになるが、量仁親王（光厳天皇）は彼女の一子実俊と非常に深く関わってくることになる。いずれにせよ仮にそうであるとすれば、名子のこの選択にも故ありと判断することができる。名子と最も親しい関係にあった後伏見院の第一皇子の元服という慶事は、引き続きであろう踐祚への幸い多き書き出しとなったは

ずである。そしてさらに、「内裏の儀」の「指図」の縮写が後伏見院に感心され「御日記に継がれ」ることになった、つまり女房としての自分の働きが宸記に書き継がれて後々まで残ることになったという記事は、彼女にとってこの上なく名誉な出来事で画期的なことであつたろう。この記事は是非とも書かれなければならなかったのである。

上巻の跋文は、「いといみじう聞き所なきいたづらの問はず語りは、なを残り侍べきにやとぞ」である。これは自分以外の読者を意識した表現であると同時に、ここで筆を擱くといった印象を与える。この直前には、「忍びたる住あなど、改まるべきにや」と西園寺家に正妻として迎えらるることになったことを婉曲に述べ、その不安を「いかになり行く身ぞと、万に浮きたる心地して思ひ乱るべし」と記している。公宗の愛情を疑うわけではないが、通い所の一つでしかないかもしれない境遇から、家格の違いを乗り越えて晴れて西園寺家に迎えらるることになったことでもって、記録を終えることにはどういった意味があるだろうか。岩佐氏は、この表現について「きわめて醜化された、屈折した表現ではあるが、やはりこれは名子としての愛の勝利の揚言であろう」とされた上で、「一見何の奇もなく、むしろ昏迷した印象をしか与え得ぬようなこの一文こそ、実は名子自身にとっではぜひとも本記上巻の末尾にすえるべき、最重要な章段であつたに違いないと思われる」としておられる（註71）。上巻の後半部は、公宗との関わりで記事が選択されることが多いことからして、自分の将来が決定された時点で、一つの区切りをつけようとしたとも考えられる。二年後の公宗の刑死に触れまいとすれば、この辺りで区切りをつけたいと考えるのが自然だからである。

()

下巻は、「今年、この君真魚の事あり」と改まった書き出しとなっており、続いて「十二月廿一日に右大臣殿に渡り給」云々とその行事の次第を女房日記的な筆致で叙述する。次いで、この儀式にあたっての感想を「世の中静まらぬさまなれど、既に絶えさせ給へる御流れ、改められぬる、いとめでたき御事になん。かゝる光に逢ひ聞えぬる入道の世覚え、並ぶ方なういみじ」と述べる（下2）。この冒頭の章段では、まずこの喜びを語っておきたかったのであろうか。「かゝる光に逢ひ聞えぬる入道の世覚え」とは、外孫である実俊が、いよいよ主家にあたる西園寺家の当主になる情勢となったことを喜んでいるであろうと世の人々から噂される作者の父資名の姿であろう。それほど慶事であった。『公卿補任』によると実俊は、建武四年一〇月八日に初めて従五位下に叙せられている。実俊に焦点を絞れば、本来は、この叙位から記事は始められるべきであろう。しかし、何度も確認してきたように、この記は基本的に女房日記としての性格を有しており、作者は女房でなくなった今も、その視点を捨て切れてはいない。雌伏の時を経て、西園寺家の家督をとりもどそうとするこの時点で、作者は日記の再開にふさわしい書き出しの記事を選ばなければならなかった。それはやはり公事に準じるような晴の行事である必要があった。それならば実俊の真魚始めと五十日百日などを一挙に行ったこの記事がふさわしかったのではないだろうか。それはまた、真魚始めも五十日も百日も、ともにその時点で行うことができなかった事情（逼塞の期間があったこと）を物語るのでもあるし、実作者者にとって記録に留めるべき実俊に関する行事としては、これが実俊誕生以降初めてのものであったといえるのではないだろうか。そのあたりの事情を、この記事は反映している。そうであったにしても、上巻が、将来の栄光を予想させる量仁親王の元服の記事から始められたよう

に、下巻も西園寺家当主としての実俊の将来の安泰を予感させるものにしたかったのではないだろうか。

下巻は、鷹司の老人との和歌の贈答に引き続く形で、次の二首の和歌で締めくくられている。

藻塩草かきて集むるいたづらに憂世を渡るあまのすさみに

なき跡にうき名やとめんかき捨つる浦の藻屑の散り残りなば

この和歌の内容をみると、摺筆にあたっての総括の詠のように思われる。この跋に至るまでの構成を見てみると、貞和五年に入ってからの記事は、下88から96まで自分の道心・仏道修行を振り返っての感慨を述べ、下97で一旦日野家の塔頭に詣でた貞和五年の七月まで筆を進めている。にもかかわらず、下98では「貞和五の睦月に、院・新院御幸始、この山へ成らせ給ふ」と筆を返して、改めて書き始めている。これは日付の錯簡というよりも、この日記を終えるにあたり、重要な事柄について、それぞれ作者なりの決着をつけようとしていると考えた方が自然である。下98 北山第への御幸、下99 両院との対面、下100 実俊の中納言直任、下101 和歌の贈答にかこつけての現在の心境の表明という整然とした記事の配列からみてもそうであるし、また下97の日野家の塔頭への参詣も象徴的である。この点から、作者は意図的に記事を終えようとしているのがわかる。

作者にとって記録するに値する事柄が無くなってしまったというよりも、この時点で、名子自身から書く意欲が失われたと考えるべきであろう。それは、書いてゆくことの意味が失せたことでもある。名子をして執筆に向かわせていたエネルギーが消失してしまったのは何故であろうか。一応西園寺家の復興、実俊の家督相続の問題が解決したからだろうか。しかし、この時点で、公重は依然として大納言正二位であり、同年九月一三日には内

大臣になっている（『公卿補任』・『園太暦』^{（註72）}など）。その後正平七年（一三五二）には、北朝の一時的な衰退もあり、実俊は北山から芝禪尼の許に移った上、西園寺家の家門を一時期公重に譲ったりしている（『園太暦』）。こうしてみると、実俊の家督相続も不安定な政情と相俟って決して安泰とは言い難く、それをもって擱筆の大きな要因とは、考えにくい。

とすれば、やはり原因は名子自身の心の在り様であると考えざるを得ない。先に、下巻になると名子の宗教への傾倒が強く表面に出てくると指摘しておいた。それは、様々な神社、仏閣への参詣や談義への聴聞などの具体的な行動として現れ、また率直な宗教への疑問、悩みの表白という形でも現れるようになる。実俊の公的な動向、関係の深い人々の訃報、朝廷の動きなどの話題の中に、それらの要素が挿入されて、下巻の構成をより複雑にしている。下巻では、名子の関心の大部分は、そのことに向いているのである。そういった自分の心の問題に、この時点で一応の決着をつけることができた、揺れていた己の心がとりあえず安住できる境地を見い出せたと思えたのではないだろうか。だからこそ、鷹司の老人との贈答歌では心静かな心境を詠めたのではないだろうか。しかしこれは、一切を放下したといった宗教的な悟達の境地^{（註73）}を意味するものではないと考える。このことについては、次章で詳しく検証したい。

二 北山第への行幸の記事

ここでは、北山第への行幸についての記事から作者の意識を探ってみたい。北山第は、言うまでもなく西園寺

()
家の本邸というべき場所で、永福門院も長く里邸としている(註74)。そこに、天皇・上皇の行幸を仰ぐことは、西園寺家にとって名誉であったはずである。上巻では、名子はまだ北山第に正式に迎えられていないこともあったか、言及することが少ない。史料から拾ってみると、上巻の期間には、つぎのような行幸・行啓があった。

元徳二年 一月 九日 後醍醐天皇、御方違行幸 春宮大夫公宗の北山第 『統史愚抄』他

元弘元年 三月 三日 中宮禧子、北山第に行啓 九日まで逗留 同右

四日 後醍醐天皇、「花御覧」のため行幸、一〇日まで逗留 同右

七月一三日 後醍醐天皇、行幸 二九日まで逗留 同右

元弘二年 一月 二日 光厳天皇、後伏見、花園両上皇と方違の行幸 『花園天皇宸記』

二〇日 後伏見、花園両上皇、行幸 同右

二月十六日 光厳天皇、後伏見、花園両上皇、方違の行幸 同右

このうち本記に記事のあるものは、元弘二年一月二日だけである(上22)。この行幸は、記事の配列から考えると、元弘二年の正月の行事の一環として記録されたものである。しかし他方、この記事は、特にこの年あたりから親密になったと思われる公宗との関係を反映しているものとも考えられる。上22にある「思ひかけず旅寝の床に夜を明かす事なん侍し比、二月の初め、例の宿りに立ちとまれるに」の書き様は、二月には既に関係が

深まっていたことを示している。とすれば、感情的にも名子の目は、この頃は公宗関係の動きを追っていたという可能性が高い。

ここで、この前年十一月の本記に公宗が初登場する場面(上二五)を注目してみたい。

十一月朔日、日蝕なり。夜より雪降りていみじう積りしかば、裹み込められたる折節の御恨なるに、西園寺大納言殿籠り侍はせ給しかば、上の御局を少し開けられて御覽ぜらるべき由、聞へ給へば、成らせ給。人々も参り給へど、例の埋もれにたる身の癖は、ふとしも立たれず、火のあたり去らぬを、大納言殿、「こはいかなるにか。雪に怖づるにこそありけれ」などありしもをかし。後にさし出て見侍しかば、竹の台の、程なきに埋もれ伏して下折たるも、火焼屋のいとさゝやかに埋もれたるなど、めづらしうをかしくのみ見なさる。永福門院に御文など奉らせ給。紅葉襲なる薄様にて、砌の竹に付けらる。雪もさながら落すまじうぞ侍し。

『続史愚抄』などによると本記記事の掲載期間中に日蝕^(注15)も月蝕も何回があるが、名子はこの段にしか記録していない。つまり、日蝕や月蝕は、名子の関心の外であったことになる。それなのに、この段は「十一月朔日、日蝕なり」とことさら公的日記的な叙述でもって始めている。「日蝕」はこの場合、直接次の記事には繋がっていかないのである。であれば、この「日蝕」は、何か特定の日時を示すものであったのではないかと考えた方がよいのではないだろうか。「日蝕」の日に関わる、作者にとって何か特別な思い出があったと考えられはしまいか。「日蝕」という言葉は、作者の特定の記憶を呼び起こす指標であったと考えられる。これが、公宗の初登場の段であることは先述したが、この一見何気ない記録のように見える章段を注意深く読み解くと、そこに名子

()
の女としての公宗への感情がたゆたっていることが見えてくる。女房として、特に典侍として天皇・上皇の側近く仕えていた作者と当時権大納言正二位の公宗とは、公人としての立場では以前からお互い見知っていたであろう。公宗は、正中二年（一三二五）から春宮大夫に任ぜられており（元弘元年九月二〇日止職、『公卿補任』）、職掌上の接触は当然あったはずである。その公宗から、この夜、「こはいかなるにか。雪に怖づるにこそありけれ」と親愛の情のこもった言葉をかけられた。それが「日蝕」とともに作者にとって非常に印象深く記憶されたのではなからうか。もとより想像の域は出ないが、このような軽口を言いかけられたのがうれしく、作者が公宗と女として初めて出会った瞬間がここにあったのではないだろうか。

このように考えれば、この段の直前の次のような女房日記的な叙述の中にも、作者の「西園寺」側に立った心情というものが読みとれる。

玄上は朝餉の御厨子に置かるべきを、この頃の世には心苦しかるべしとて、夜の御殿に御二階を立てて置かる。覆、紫の絹也。裳を着ずしては手掛くる事なかりき。／常の御所の御厨子はなべてよりも大にて、一具也。金の截金をひたと細かにふせて、蜜絵の、内は沃懸地にて、杏葉を貝に摺る。萩戸の御調度は桐竹と鳳凰也。仁寿殿の御厨子は唐国の蜜絵也。いづれも綺羅、艶なべてならず。故竹林院入道左の大臣、沙汰し置かれ給御調度どもなれば、まことになをざりなるべきにもあらず。女房の曹司どもに置かれたる棹なども、好ましげに美しかりき。

前半部は、玄上についての有職故実的な記述であるが、それを受けて、後半では、「常の御所の御厨子」、「萩

戸の御調度」、 「仁寿殿の御厨子」と連想されて、それらすべては公宗の祖父である西園寺公衡の配慮によるものであることを明らかにした上で、「なをざりなるべきにもあらず」「好ましげに美しかりき」と褒め称えている。また、この記事は西園寺家と自分との結びつきができてから後の思いとも受け取れ、執筆時に書き加えられた可能性さえ考えられる。このことを見ると、上「も」も作者の意識の中では一つの流れであったことがわかってくる。

このことからしても、名子は自分の感情に基づいて記事を選んでいる可能性を指摘できるのである。先の北山第への行幸の記事のうち、なぜ元弘二年一月二日が選ばれたのかを、このような視点からも見るができるのではないかと考える所以である。

このことも考え合わせれば、上巻の記事は、公宗との出逢いと結婚までを主軸として取捨されているといえそうである。作者の女房としての出仕も、結果として公宗との邂逅のきっかけとなったものであり、この出仕がなければ、家格の違う日野家と西園寺家との縁組は、いくら混乱した世情の当時でも到底あり得ないことであっただろう。

さて、下巻では、北山第への行幸について計三度触れているが、特に(下26)では、「今年御幸始、この山へ成らせ給。(中略)久しく絶えぬる御幸にて、珍しき御事なるを」とあり、その喜びを「いとめでたかりき」と記している。岩佐氏は、新古典文学大系の脚注において「今年」を「暦応五(康永元)年(一三四二)正月二十八日光厳院御幸始」としておられる。また、「久しく絶えぬる御幸にて」については、「暦応三年暮の方違御幸

は『女院の御方へ内々』の儀であったから、西園寺家として正式に御幸を仰ぐのは正慶以来十年ぶりの事である」としておられる。しかし、その前年の同日にも北山第への御幸はあったのである。暦応四年と五年の北山第への御幸について、それぞれに関する史料を挙げてみる。

○ 暦応四年一月二八日 「光嚴上皇御幸始、北山殿ニ幸シ給フ、」（『大日本史料』項目）

『師守記』 「『史料纂集』所収」

廿八日、丙巳、天晴、（中略） 今日御幸始云々、「北山殿歟云々、」供奉人可尋記、

（裏書） 廿八日 後日尋記之

北山殿 御幸 / 公卿 按察大納言／殿上人 （正親町） 忠季朝臣 宗雅朝臣 （以下略）

『中院一品記』 「『歴代残闕日記』所収本には該当記事がないので『大日本史料』掲載に拠った」

正月廿日、自仙洞被進勅書於入道殿、御幸始通——（冬）供奉事也、即被申領状了、敍位執筆事、有歆感可自愛歟、（以下略）

○ 暦応五年一月二八日 「光嚴上皇、北山殿ニ幸シ給フ」（『大日本史料』項目）

『通冬卿記』 「『歴代残闕日記』所収本には該当記事がないので『大日本史料』掲載に拠った」

正月廿八日、天晴、今日院御幸北山殿、「永福門院○伏見天皇皇后藤原鐔子、御座」 供奉公卿、春宮權大夫、

「實夏、香狩衣、」へ傍書、指貫薄色堅文藤丸云々 三條宰相中將、「實繼、薄青狩衣緯白、文櫻立涌、裏同色、指貫薄色浮文藤丸遠文、」殿上人濟々焉、散状迫可注入、北面五位安部親憲、「香狩衣、」六位五人、召次所二人、御車、「八葉、」上皇御直衣、「烏帽子、」被卷御簾、予於西京邊令見物了、

○是ヨリ先キ、御幸始ヲ延引セラレシコト、二十六日ノ條ニ見エタリ、

『統史愚抄』

廿八日庚子。院幸某所。即還御歟。

「御幸始」が、「讓位してから初めての御幸」、例えば、『古事類苑』帝王部にある「讓位後御幸始」と限定するならば、暦応四年のそれこそが、「御幸始」と呼ばれるべきものであろう。しかし、史料の用例を見ると、新年となって初めてのものも「御幸始」と呼んでいる（『古事類苑』帝王部にも「讓位後御幸始」と並んで「年始御幸始」とを項目として挙げている）ので、この用語だけでは判断できない。そうではあるが、暦応四年のそれが、讓位後初めての北山第への御幸であるのだから、これが内々のものであるはずはなく、「久しく絶えぬる御幸にて、珍しき御事なる」と書かれるにふさわしいのは、史実からみれば、この年の御幸であることは疑いようがない。しかも、『通冬卿記』によると暦応五年の御幸始は、北山殿といっても「永福門院御座」となっていることも、暦応四年のそれこそが、本記の記事に該当する「御幸始」であることを示唆している。

一方、この記事に至るまでの記事の配列をみると、次のようになる。

下18 「暦応四年四月」

19 「八月に御幸始、この前なる永福門院の御方へ成らせ給ふ儀なるべし」 ここは、徽安門院の御幸

20 「神木、長講堂におはしつる、九月に御帰座あり」 史実は、暦応四年八月一九日

21 「院の御方の姫宮（中略）十月にぞ入らせ給ぬる」

22～24 「同十二月七日、元服の事あり」

25 「春の除目に中将になり給ふ。八歳なり」 史実は、暦応四年二月二日左中将（注76）

26 「今年御幸始、この山へ成らせ給」

また、この記事に引き続いて日付についてふれているものは、次のとおりである。

下27 「如月の中の十日余りに、忍びて石山に詣づる事」

31 「弥生の比、若宮に詣でたるに」

35 「暦応の比、例の家門の沙汰あれば（中略）卯月ばかりに」

38 「五月七日失せさせ給ぬ」 永福門院崩御 暦応五年五月七日

下35の「暦応の比」とは、世がまだ改元（暦応五年四月二七日康永と改元）前で「康永」ではなく「暦応」であった頃という意味ととれる。そうであれば、日次にも合致する。本記の日順は必ずしも正確とはいえないことは構成表で確認できるが、おおむねは日付に従った記述となっている。この場合、比較的日付を明らかにした記事が多く、文脈を辿れば下25・26あたりが暦応四年と考えるのは不自然であり、下18～24までが暦応四年のこと

で、下段から暦応五年の記事という配列であった、少なくとも作者の日付の認識としてはそうであったと考えられよう。

それでは、暦応四年の「御幸始」を、暦応五年のこととして記録したのはなぜであろうか。実際には暦応四年十二月二十二日の「臨時の除目」だった実俊の中將昇任を、「春の除目」としていることも気になるのである。実俊が、八歳である「春の除目」は、暦応五年一月五日となるはずである（『公卿補任』実俊初出の年、康永三年に「從三位 実俊、正月五日叙」とある）。この「春の除目」で、実俊は「從四位上」となっている。

このことを、中將任官と勘違いしたとも考えられるし、意図的な改変の可能性も全くないわけではない。

そこで、問題の二段について、本文を検討してみる。

今年御幸始、この山へ成らせ給。 「いつしかかゝる御光を待ち受け奉らせ給ふも猶異なりける御家の名残にこそ」など、世人も申侍とかや。元服の後禁色宣下ありしかば、織物の直衣指貫也。大御酒、内々の儀也。御馬・御牛、例にまかせて参る。御覽あり。然るべき殿上人、口を取る。常の如し。其儀、夜にぞ入ぬる。久しく絶えぬる御幸にて、珍しき御事なるを、外様ばかりはあかぬ心地して侍れば、宝蔵をたづぬるに、三尺余ばかりなる花立を一对求め出ぬるをぞ奉る。「色も姿もなべてならず、いと由々しう」など、様々の御沙汰どもにぞ及び侍ける。／「主の作法進退、末頼もしき様なれば、朝家の為家の為、悦思し召さるゝ」などさへ仰事賜はせぬる、いとめでたかりき。後にも女院の御方へ、くれぐれ聞えさせ給ぬるを、「かばかりめでたき勅書なれば」とて給はり置き侍ぬる。

()

西園寺家の名譽と実俊の末頼もしい様子とともに、それに積極的に協力する当主の母としての誇らしげな作者の姿が描かれる段である。ここに「元服の後」とある。実俊の元服は、下22に「同十二月七日」としているので、暦応四年であることは動かせない。とすれば、この「御幸」はどうしても五年のもでなければならぬ必然があるのである。暦応四年の「御幸始」では、実俊はまだ元服前だからである。本文に従うと、後日女院の御方に光厳院から賜った書き物を、「かばかりめでたき勅書なれば」という永福門院の意向で「給はり置」いたということである。そのような確実な、しかも尊い拠り所となるものがあるにもかかわらず、その日付を勘違いしたり、記憶が定かでなかったりするものであるうか。はなはだ疑問である。しかもこの場合、作者が「手控え」を付けていたであろうことは本文の詳細な記事内容から容易に推測できる。このように史実と照らし合わせてみると、この段は短い記述の中に、矛盾を抱え込んでいることがわかる。敢えてそのような記事にした作者の意識を探ってみると、そこには、久方ぶりの御幸という西園寺家の名譽の復活を世に知らしめる晴の行事を、その当主たる実俊の慶事と重ねることによって一氣に盛り上げ、高らかに謳い上げようという意図があるように推察できる。そのためには、実俊は元服し、中將となっており、その進退の確かさを院に喜ばれるものでなくてはならなかったのである。それならば、先の「春の除目」で云々といった記事も勘違いなどではなく、意図的にこの年の「春」にもってきたといえるのではないだろうか。西園寺家の「春」に集中させたいという作者の意識的な操作ともいえる。それを、作者のささやかな虚構と考えておきたい。

もう一度、記事の配列について詳しく検討する。下19では徽安門院の永福門院の第への御幸に同行した光厳院

が実俊を評した「行末も頼もしきさまなるは、心安く、喜び思さるゝ」との言葉に「いと嬉しう侍ける」と感想を記す。この言葉は「女院の御方へも様／＼聞えさせ給由」と永福門院から聞かされた事に注目しておきたい。これに続いては、神木の長講堂からの帰座(20)、院の御方の姫宮が永福門院の許に入られた話(21)と一見何のために記録されたか理由を推測し難い記事が並ぶ。しかし、神木の帰座を「女院の御方へも棧敷への御出座を成し聞」えた点を見る時、これらが永福門院を中心にして選ばれていることが明らかになる(へ／＼筆者注)。

また、下22の実俊の元服に関する記事は、おそらく「手控え」を基にしたであろうと考えられるほど、行事の次第から装束まで細かに綴られている(このあたりも上巻の記述と通じる作者の記録者の本質である)。続く23段では、元服の儀式の翌朝、別当(柳原資明)から「昨夜の儀よろづいと由、しう、昔に恥ぢざる由など、様／＼に賀侍て」歌が贈られてきたことを記し、將軍(尊氏)からも「馬・太刀」を贈られたことも書き添えた上「更にめでたくぞ侍」と重ねて家名の復活を祝っている。その流れの延長線上で、24段が書かれたのである。この段でも「後にも女院の御方へ、くれ／＼聞えさせ給ぬるを、『かばかりめでたき勅書なれば』とて給はり置き侍ぬる」と永福門院の意向が語られる。このようにみると、これらは、二つの意識から選択されているのではないかと考えられてくる。一つは、家門の再興であり、いま一つは、力強い後援者であった永福門院への名子の思いである。西園寺家の復興と実俊の名誉の喜びとともに、これに対して大きな影響力をもってあたってくれた女院への感謝の思いも、ぜひとも書き留めておきたかったのではなからうか。しかし、それらは底流するだけで、それとわかる程明確に表面に浮き上がってはこない。その思いは、永福門院崩御に際しての「朝夕の事わざにつ

()
けても頼もしき御事なりつれば、一方ならぬ御名残も言はんかたなし」(下88)という形で出てはくるが、それも、溢れるような思いとして噴出することはない。これも作者の気性ゆえの表現方法なのであると考える。次には、その点について検討したい。

三 『竹むきが記』を通してわかる作者の性向

『竹むきが記』の特殊な表現方法の要因として、作者の気性が考えられる。そこで本記の本文からうかがわれる作者の性向・性質といったものを明らかにしておきたい。

まず、本記中、作者が自らを評している箇所は上5で、「例の埋もれにたる身の癖は」とある。「うづもる」は、『角川古語大辞典』によると、「②人目につかないようにする。身をひそませる。人に知らせずに黙っている」ことである。それが「例の」、「癖」といっているということは、作者の常として何事にも控え目で、消極的であったということができであろう。このような性向は、本記の別の叙述からもうかがえる。

上5の、いよいよ北山第に入ることになった折には、「此所にありとて喜びつゝ、やがて車あれど、ゆくりなくうかれ出でむといかならんとつゝ、ましかれば、動くべき心地もせぬを、人々もすゝむれば心弱くぞ立ち出ぬる」と北山第入りを、迎えの車がやってきている段階になっても、なお躊躇している。もちろんそこには、「ゆくりなくうかれ出で」ることを「つゝ、ましく」思った配慮があったことは否めない。ここに、家格の低い日野家の人間の西園寺家に対する劣等感をみることもできよう。しかし、己の愛が実り、晴れて西園寺家に北の方として入

ることが可能になったことを、単純に喜んでばかりはいない自省的で思慮深い作者の姿が映し出されてもいる。また、下巻に至って、再び北山第に実俊とともに移り住むよう永福門院から言われた折には、次のように考えている(下15)。

かゝる程に、侍従の君移り住み給へう、女院の御方急ぎ立たせ給ふ。やがて添ひ聞ゆべうあれば、さるべきにこそはあらめと、いかなるべきにかと、心一つに思ひわづらふ事しあれば、二位殿にて女院の御方さまへもこの趣を聞えたるに、いと僻／＼しき事と諫めさせ給つゝ、差し放つべきにはあらぬ由、さま／＼にのたまへるも御理なれば、心弱く思ひ立たれぬ。二位殿もあからさまにおはします。誰も／＼皆参るべし。小御所を竹向かけてしつらへり。何処もありしに変わねば、面影浮ぶ事多し。(以下略)

名子母子にとって最大の後援者である永福門院の強い意向にもかかわらず、ここでも立ち止まり、周囲の状況へ思いを巡らし、自分に問いかけていることが、「さるべきにこそはあらめと、いかなるべきにかと、心一つに思ひわづらふ」からわかる。またこの場合「北山第」は、つらい思い出に直結する場所である事も作者の躊躇の要因であったことも推量できる。それでも、結局は、女院の意向と「理」に負けて、「心弱く」移住する作者である。ここには、感情よりも「理」が優先する、少なくとも「理」で自分を納得させて行動を起こすという性向を認めることができる。

下85・86は、後伏見院の十三年の法事に関する記事である。作者は、「花びらの事、内裏よりうけたまは」っていたが、それに加えて特別に「御心ざしの為に、寿量品をし奉」り、「御布施には金十裏、紫染め分けたる薄

()
様に裹む。金の柳筥に据ゆ。ことさら取りそへて奉る」のであった。親密だった後伏見院への作者の特別な思いがうかがわれる箇所である。だからこそ「御導師」は、「昔仕へし世をかけて、この御心ざし」とその特別豪華なしつらいに感銘を受けたのであろう。それでわざわざ「解説の序に供養あるべきに、いつも夜に入事なれば、御経のさま、念なかるべきによりて、昼に引き上げら」れ、「同じくは聴聞あるべう」とのことであつたのに、「思ひも立たれず」であつたという。表だって華やかな場所に出ることを嫌う慎ましさからか、気恥ずかしさからか、それとも別の何か、屈折した感情からのことなのか。これらが、この作者の不可解な行動の原因として考えられる。しかし後伏見院が亡くなって十三年も経っていることを考えれば、特別の供養をすることも、非常に率直な気持ちからで、そこに屈託はなかったであろう。そうしてみると、これはやはり「例の埋もれにたる身の癖」であつて、作者の本質は年を経ても変わっていないということにならう。

公宗から正式な求婚の和歌が贈られてくる上⁵⁵では、

里に侍し年、春立つ日、人の許より、紅の薄様に匂ひいたくしめつ、

新玉の年待ち得てもいつしかと君にぞ契る行く末の春

同じ色の紙にて、

行く末の契もしらぬながめには改まるらん春も知られず

ことなる障りならでは待ち見る事となりぬるも、ひたみちに身をなしつる心地して空恐ろしう悲し。

と、感想を述べている。「ひたみちに身をなしつる心地して空恐ろしう悲し」という感想が何時のものか推断は

できない。本記執筆の時点で書き加えられた可能性も否定できないからである。同様に、この和歌の詠歌時が、その時点であったかどうかもわからない。しかし、このような重要な和歌を作者が独断で創作するとも思えず、恐らく公宗からの薄様とともに「手控え」ていたのではあるまいか。この贈答は、正慶二年当時のものであると考えて差し支えない。低い家格の者が清華の西園寺家に嫁ぐとなれば、いくら公宗の愛情を頼りにするからとはいえ、世間一般の感覚からしても、なにがしかの不安は覚えるはずであろう。しかし、作者のこの詠いぶり、度を越して悲観的である。身に余る幸せに酔いしれるどころか、これから先の人生に深刻な悩みを抱え込んでしまいそうな程である。一片の甘さもない。そこにまた作者の悲観的で消極的な性向を見ることができる。

一方、作者は『竹むぎが記』において、責任感の強い、積極的な姿をも見せている。次に例証を挙げてみよう。正慶二年閏二月二四日、後醍醐天皇は、配流先の隠岐を密かに脱出、それに呼応して赤松の軍勢が入京する。世情は一気に緊張し、光厳天皇、後伏見、花園両上皇は六波羅の北方へ行幸されることになった。その折、名子は、「我も人もたゞあきれまよふほかの事なかりしかば、僻事もあらむとて、書きもとめず」としながら、次のような行動を起こす（上163・64）。

女房など候ふべきやうもなけれど、さてもおはしますべきにもあらねば、少く参り給。いかなる御式にても参るべき心地なりしを、あさましう便悪しきさまなれば、いと見苦しかるべき事に、さま／＼言ひとむる人ありしかば、あからさまにだにと思ひ立ちて、二位殿伴ひ聞えてぞ参り侍し。（中略）その夜より候ふべき心地なりしに、暁、寄すべき由聞ゆとて、女房なども出さるべき由、武家奏聞あれば、取りしたゝめ、里

ざとに車召しなごせしかば、折しもいと本意なかりき。

仮の御所ゆえ不便もあらうと、止める人があったにもかかわらず参上している。我が身の上のことには、「心弱く」人の言に従う作者が、このような非常時には制止を振り切って出かけてゆくという強さを持っていることが現れた場面である。赤松の軍勢が押し寄せてくるということで、やむを得ず退出することになるが、この時も「折しもいと本意なかりき」と、ひどく口惜しい様子である。このような責任感の強さから、「典侍」としての作者の在り様が推量される。

また、下巻における実俊の母として、というよりも西園寺家当主の母としての名子には、積極的に補佐を務めようとする姿勢が見られる。例えば、下巻の久方ぶりの北山第への御幸に際しては、次のように記す。

久しく絶えぬる御幸にて、珍しき御事なるを、外様ばかりはあかぬ心地して侍れば、宝蔵をたづぬるに、三尺余ばかりなる花立を一对求め出ぬるをぞ奉る。「色も姿もなべてならず、いと由ゝしう」など、様々の御沙汰どもにぞ及び侍ける。

西園寺家の復興を、御幸という目に見える形で確認できた喜びが、作者にこのような行動をとらせたものであるうが、「宝蔵」にまで行って献上物を選ぶという行為には、当主の母としての自信と責任感が作用しているとも考えられる。

このように作者名子は、表だっては出にくいものの、その本質として意志的な強さを持っているということができよう。だからこそ、あの苦難の期間を生き抜いてこられたともいえるのではなからうか。

()

下巻になって表れる信仰への傾倒にしても決して単純に受け入れるのではなく、あくまでも慎重な態度をとっている。下44・45によると、まず「十悪五逆の捨て給はずと聞く弥陀の願力を頼みつゝ、悲願あやまらずは来迎引接定めて疑ふべからずと、偏に念仏の数をぞ積」んできたが、「いさゝか不審なる事侍ける」と浄土教の信仰に疑問を抱いている。その後は、「今の長老、道学ともに其徳高く聞」えていた靈鷲寺へ出かけて「如何にしてかまさに生死を出づべからん」と率直に疑問をぶつけている。即座には答えを得られず不審を抱えたまま過ぎたが、「まことに生死の根を切らん事はこの修行なるべきにこそと思ひ知」ったと記している。ここに、非常に理知的で真摯な作者の姿をみることができる（作者の道心については次章で考察する）。

第二章第三節で考察した心情の記録においても、感情をそのまま表出しない抑制的な姿勢が認められた。そのような自省的で内向的で理知的な作者は、自分の生の感情を、そのままに表に出せない、表現できないのではないだろうか。実俊への母親としての生の愛情にしても同様で、直截な愛情表現は『竹むきが記』のどこにもない。実際は、実俊は、公宗の遺児であり、二人の愛の証でもあり、作者の西園寺家での立場を支える存在でもある。作者が愛しく思わないはずはないのである。にもかかわらず、先述の如く、あくまでも西園寺家当主としての扱いを崩さず、距離をおいた叙述しかない。下二では深綴に際して、実俊の様子を頼もしいと永福門院が、ことのほか喜ばれたということを二位殿からつぎのように聞かされる。

「推し量らせ給へるにも過ぎて、行末頼もしきさまに」などいみじうぞ喜びの給ふ。山水を御覧じつゝ、
「何処より来たる流れにか」と本末を尋ね聞え給ければ、「直人にはあらじ」と不思議がらせ給て、いみじ

う興ぜさせ給ける」など、二位殿さまにぞ語らせ給。

この時もただ、「伏見院の御自筆一卷、松の打枝に付けられて賜はらせ給ふ」とのみ記録し、自分の感想を全く記さない。まるで永福門院に肩代わりをしてもらっているような記述で、無関心とさえ感じさせる。しかし、作者はこの話を記事にすることで満足しているのである。素っ気ない記述にかえて作者の誇らしい心情を読みとるべきかもしれない。

右のような性向の作者が、それではなぜこの日記を書いたのか、書かざるを得なかったのか。自分の感情を生じる形で表現できない者が、書いた。しかも、最も書きたかった悲しみは書くことが出来ない。その相剋が、本記の屈折した表現方法を取らせたのではないだろうか。したがって、このような書かれている表現の中から、書かれていない形の作者の心情の表現を汲み取ってゆくことが、本記を読み解く際の重要な観点となってゆくのである。

作者の実人生と日記の間には、ある隔離がある。いつの場合も、誰の場合も、記録の取捨選択には記録者の意識が介在するものである。それは時には、例えばいつもに変わらない事柄は端折ってしまうといった類の大きな意味のない省略かもしれない。しかし、本記の場合は、ひどく屈折した形ではあるが、記事の取捨選択によって自らの意識・感情の間接的な表明をしているのである。それは虚構と呼べるほど意識的なものではなかったのかもしれないし、それほど明確に、大量に指摘できるものでもない。しかし、書いたもの、書きたくても書くことができなかったもの、書かなかったものという三つの層の間隙を探っていくことにより、はじめて作者の本当に

書きたかったものの姿を捉えることができるのではないだろうか。

本節では、日記の書き起こしと摺筆の意味、北山第への御幸、名子の性向の三点に絞って考察し、本記の特異な表現方法と作者の真意を少しでも明らかにしようとした。次章では、その総括として、この『竹むきが記』で、作者は一体自分の何を書き残したかったのか、作者の心の軌跡について考えてみたい。

第四章 『竹むきが記』作者の心の軌跡

第一節 作者名子の求道

『竹むきが記』上下巻のそれぞれの世界の相違については先にふれたが、上巻にたく下巻に至って初めて現れるのが、道行きに関する記事と宗教に関する記事である。このことから、下巻に特有の要素は、作者の道心ということができる。それは、夫の死刑の無念を胸底に秘めたまま生きてゆかなければならなかった作者が、心の抛り所として獲得していったものではないだろうか。そのことが下巻の世界を規定していると考えられる。本節では、名子の求道の在り方、彼女の道心の特質について検討してみたい。

一 出離の思い

第三章第二節で、本記の中断期間に作者がどのような体験をしたかについて考証した。死を免れるはずの夫が斬罪に処せられたという過酷な現実、作者がどのように対処していったのか、どのような苦しみを味わったのか。作者は、このことについて沈黙している。したがって、その間のことは推測するしかないが、彼女は、夫の後を追って自害することもせず、出家することもせず生きる道を選んでゐる。それは、偏に、その時おそく懐妊中だった実俊のためであったと考えられる。そして苦難の期間を生き抜いた後は、西園寺家の家督を取り戻す

という願いのため、生き続けた。それはつまり夫の無念を晴らし、名誉を回復するということに他ならない。しかし、その生き方は非常な意志の力を必要とし、己が心に負担を強いる。名子は、一方では夫を奪われた悲しみに耐えながら、一方では、それを表面に出すことなく、押し寄せる現実に立ち向かっていかなければならなかったのである。

そのように生きてきた名子の心中には、当然のことながら無常観が存在していたはずである。また、来世での往生を願い、生死から解脱したいという思いも次第に芽生えていったのではなからうか。

夙に指摘されていることであるが、『竹むきが記』下巻には、名子の周辺の人物八人の死が記録されている。記載順に挙げ、それに対する作者の感想を添える。

○資名 建武五年五月二日（下7）

遂に未の刻ばかりに空しう見なしぬる心の中ども、言はん方ぞなき。（中略）時の間にかゝる夢をも見る業にこそと、憂世の理もさらにぞ驚かれける。

○前右大臣（今出川兼季） 暦応二年一月一六日（下9）

同正月に失せ給ぬる、いとあへなくあはれになん。

○東北院僧正（覚円、永福門院弟） 暦応三年六月一九日（下14）

十九日、朝の露と消え給ぬ。あはれにいみじとも、言へばさらなり。

○永福門院 康永元年五月七日（下38）

五月七日失せさせ給ぬ。朝夕の事わざにつけても頼もしき御事なりつれば、一方ならぬ御名残も言はんかたなし。

○菊亭大納言（今出川実尹、兼季息） 康永元年八月二一日（下43）

もしさるべき人にやと思ひ置き給事あれば、終の家督となるべう定め置かるゝも、あはれに悲しうなん。

○大宮入道右大臣（季衡、公宗伯父） 貞和二年五月二五日（下64）

今更ならぬ世の慣ひも、差し当りてあへなくあはれになん。

○靈鷲寺の長老 貞和四年七月八日（下87）

既に法滅の期にやと心細くなん。

○法皇（花園院） 貞和四年十一月二一日（下92）

院・新院、いみじう御歎きども、疎かならずぞ聞えさせ給ふ。（作者の感想なし）

下43、康永元年八月「菊亭の大納言殿」の死の記事直後に、この記初めての宗教に関する記述があることから、作者が信仰というものに正面から対峙しはじめるのは、身近な人の死、特に同年五月の永福門院の死を契機としたことがわかる。

下65でも、永福門院、菊亭大納言、大宮入道右大臣の打ち続く死に、次のように記している。

留まらぬ世の慣ひ、更にぞ驚かれ侍ける。／厭ふといへど存するは人の身、惜しむといへど死するは人の命也。老たるは理の道として留まらず、若きは不定の境として止めがたし。されば、あはれと言ひなつかしと思ふ

も、たゞ刹那の語らひ、須臾の馴染なり。何に心を止め、何れの所にをいてからき世を厭はざるべき。岩佐氏は、新大系の脚注において「何れの所にをいてからき世」について、「『ら』は『う』の誤写で、『何れの所に於てか、憂世を』か」としておられる。ここには、身近な人の死にこの世の無常を観じ、出離の思いにとらわれている作者の姿を見ることが出来る。

生あれば滅あり、人必ず免れざる理、目の前なれば、さすが惡道も恐しければ、十惡五逆の捨て給はずと聞く弥陀の願力を頼みつゝ、悲願あやまたずは來迎引接定めて疑ふべからずと、偏に念仏の数をぞ積みける。下々において、作者はこのように自分の宗教觀を語り始める。これは、まさに「諸行無常」「厭離穢土」という無常觀を前提とした觀念による淨土教への帰依といえる。人の死を通じて世の無常を觀じるのが常であるから、最も身近な人、夫の刑死を體驗している作者は、それを思い知らされているはずである。それが、ここに至って道心という形として顯れてきたということであろう。名子は、まず、当時の貴族にも一般的であり、おそらく身近に触れながら過ごしていたであろうこの教えへの帰依を、自然に志向したのではないだろうか。

しかしながら、

さても猶九品往生の儀を思へば、上中品はまづ置きて、下品の趣を見れば、二七日を経て蓮花開くる時、甚深の十二部經を聞き終りて、信解して無上道心を起し、十小劫を経て百法明門を具し、初地に入る事を得。三宝の名を聞きて即ち往生すと言ひ、或は蓮花の中にして十二大劫を満てて花まさに開くる時、觀世音大勢至、それが為に諸法の実相除滅罪の法を説き給を聞き終りて、歡喜して即ち菩提心を起すと説けり。かの国

土に生じ終りて、法を聞きて次第に果を得たり。現在にしてかの法を聞く事あらば、順次に生死を出づべきにやと、いさゝか不審なる事侍ける。

と記すように、この教説に対して、釈然としないものを感じるに至る。その要点は、「かの国土に生じ終」れば、「法を聞きて次第に果を得」ることができるのであるが、「現在」、今自分が生きているこの世において「かの法を聞く事あらば、順次に生死を出づべきにや」という疑問であった。右の表現は、『観無量寿經』に拠っている。いま岩波文庫『浄土三部經』に拠って当該部分の書き下し文を挙げてみる。

仏、阿難および韋提希に告げたもう、「へ下品上生」とは、あるいは衆生ありて、もろもろの惡業を作る。

方等經典を誹謗せずといえども、かくのごときの愚人、多くもろもろの惡を造りて、慚愧あることなし。命終らんと欲する時、たまたま善知識、(その人の)ために大乘十二部經の首題の名字を讀えん。かくのごときの諸經の名を聞くをもつてのゆえに、千劫の極重の惡業を除却す。(この)智者、また、(その人に)教えて、合掌・叉手してへ南無阿彌陀仏」と称えしむ。仏の名を称うるがゆえに、五十億劫の生死の罪を除く。その時、かの仏、すなわち化仏と化觀世音・化大勢至を遣わして、行者の前に至り、讚えていたもう、『善男子よ、汝、仏の名を称うるがゆえに、もろもろの罪消滅す。われ、來りて汝を迎う』と。この語をなしおわるに、行者、すなわち化仏の光明の、その室に徧滿せるを見る。見おわりて、歡喜し、すなわち命終る。(そのとき)宝蓮華に乗り、化仏のしりえ後に随つて、宝池の中に生まる。七七日を経て、蓮華すなわち敷く。華の敷く時にあたりて、大悲の觀世音菩薩および大勢至(菩薩)、大光明を放ちて、その人の前に住じやうす。

(立) し、ために甚深の十二部經を説きたもう。(かれ、これを) 聞きおわりて信解し、無上道の心を發す。十小劫を経て、百法明門を具し、初地に入ることをう。これを「下品上生の者」と名づく。(かれ) 仏の名と法の名を聞き、および僧の名を聞くことをうればなり。三宝の名を聞かば、すなわち往生をうるなり。』
仏、阿難および韋提希に告げたもう、「『下品中生』とは、あるいは衆生ありて、五戒、八戒および具足戒を毀犯す。(中略) 命終らんと欲する時、地獄の衆火、一時にともに至るに、善知識の、大慈悲をもって、ために阿弥陀仏の十力の威徳を説き、広くかの仏の光明の神力を説き、また、戒・定・慧・解脱・解脱知見を讀えるに逢わん。この人、聞きおわりて、八十億劫の生死の罪を除く。地獄の猛火、化して清涼の風となり、もろもろの天華を吹く。(その) 華の上に、みな、化仏・(化) 菩薩ありて、この人を迎接したもう。一念の頃ほどに、すなわち七宝の池中の蓮華の内に往生することをう。六劫を経て、蓮華すなわち敷く。華の敷く時にあたりて、觀世音・大勢至、梵音声をもって、かの人を安慰し、ために大乘の甚深の經典を説きたもう。この法を聞きおわりて、ただちに、すなわち無上道の心を發す。これを「下品中生の者」と名づく。」

仏、阿難および韋提希に告げたもう、「『下品下生』とは、あるいは衆生ありて、不善業の五逆・十惡を作り、(その他) もろもろの不善を具す。(中略) かくのごときの愚人、命終る時に臨みて、善知識の、種々に安慰して、ために妙法を説き、教えて仏を念ぜしむるに遇わん。この人、苦に逼られて、仏を念ずるに遑あらず。(かの) 善友、告げていう、『汝よ、もし(仏を) 念ずることあたわざれば、まさに無量寿仏(の

()
名)を称うべし』と。かくのごとく、至心に、声をして絶えざらしめ、十念を具足して、〈南無阿弥陀仏〉と称えしむ。仏の名を称うるがゆえに、念々の中において、八十億劫の生死の罪を除き、命終る時、金蓮華の、なお日輪のごとくにして、その人の前に住するを見ん。一念の頃ほどに、すなわち極楽世界に往生することさえ、蓮華の中において、十二大劫を満たし、蓮華まさに開く。(その時)観世音・大勢至、大悲の音声をもって、それがために、広く諸法の実相と、罪を除滅する法を説く。(この人)聞きおわりて歓喜し、ただちに、菩提の心を発す。これを〈下品下生の者〉と名づく。(下品の三種の往生の観想)これを〈下輩の生まるる想い〉と名づけ、〈第十六観〉と名づく。」

傍線をもって示した箇所が、作者が利用している表現である。『観無量寿経』で「七七日」としているものを、本記で「二七日」とするのは、作者の勘違いではなく、おそらく伝写の際の誤記であろう。

「上中品はまづ置きて」と断るように、「下品」のうち、「下品上生」と「下品下生」の者の往生について触れている。この経には、この他に「下品中生」の者についてもあるが、それは略したものであろう。『観無量寿経』のこの部分では、命終の時、どのような悪人も「諸経の名を聞く」こと、「仏の名を称うる」ことにより、「極重の悪業」や「生死の罪」を除くことができ、「蓮華」の中に迎えられると説いている。それが、「かの国土に生じ終りて」の示す内容であろう。しかる後に、ある一定の期間をおいて、観世音・大勢至の導きにより、甚深の法を聞き、往生することができるという。これが、「法を聞きて次第に果を得」るにあたる。このように、『観無量寿経』では、二段階にわけての往生を説いているのであるが、作者の引用部分は、どちらもその後半部

(第二段階) についてのものである。したがって、作者の関心は、その後半部にあるといえよう。下品の者がまず、「この国土に生じ終るためには、「大乘十二部經の首題の名字」を聞き、または「阿弥陀仏の十力の威徳を説き、広くかの仏の光明の神力を説き、また、戒・定・慧・解脱・解脱知見を讃」え、または「至心に、声をして絶えざらしめ、十念を具足して、へ南無阿弥陀仏」と称」えることにより、「五十億劫」「八十億劫」の「生死の罪」を除かれることが、大前提であると説かれているにもかかわらず、その点に作者はあまり関心を持ってはいない。第一段階としての、この世の罪を除却することには関心がないようである。このことは、作者に生きることで自体の罪について、深い自覚がなかったということを示しているのではないだろうか。

『観無量壽經』等で、説かれている浄土に対する認識は、おおよそ次のようなものであろう。いま『仏教大辞彙』（仏教大学編纂）の「浄土宗」の項中「教義（二）教判」から引用する。

釈尊一代の教を判じて聖道・浄土の二門となす。浄土とは他力を仰いで次生浄土に往生し、彼処に於て仏果を証するの教なり、即ち正しく浄土の三經（無量壽經・観無量壽經・阿弥陀經）に説示せられたる法義なり。聖道とは自力策修の功を以て此土に於て仏果聖道を証悟するの教なり。即ち浄土の三經已外に説示せられたる八万四千の教法、大小・頓漸・半満の法なり。聖道の法は此土に於て願を起し、行を修し以て証果を期す。些少の仏力加被なきに非ずと雖、多くは自力なり、浄土の法は此土微少の願行、仏願力に乗托するが故に彼土に往生し、浄妙の土に於て行業円満して仏果に至る。些少の自力心行ありと雖、多くは仏願他力に托す、彼は多く自力なるが故に難行にして陸路の歩行の如く、此は多く他力なるが故に易行にして水道の乗船の如

し、故にまた彼れを難行道と云ひ、これを易行道と云ふ。今時末代澆季の世、智解微淺にして、聖道難行に堪へず、宜しく浄土の門に入り、弥陀広大の悲願をたのみ、順次の往生を期せざるべからずとす。

(引用に際して、漢字は新字体に改めた)

浄土教の根本理念は、「阿弥陀仏の極楽浄土に往生し成仏すること」(『岩波仏教辞典』)であり、その前提には、末世に入った現世(此岸)では、悟りを開き成仏することは障礙が多く衆生には不可能なことであるという思想があった。現世での開悟や成仏を諦めているのである。当時も浄土教について、概ねこの様に理解されていたと考えておいてもよいのではないだろうか。

作者は、それに理解を示しつつも、彼岸での解脱を、此岸において保証されることを求めている。あくまでもこの世において、「かの法」を「聞く」行為だけで、それは保証されるのだろうか、納得できないのである。これは、生身の人間として当然の疑問であろう。ここには、通り一遍の教義に満足することなく、深く追尋していく作者の姿勢がみえる。それだけ希求する思いが強いということでもある。

先の段に引き続き、作者は下段で次のように記す。

諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅為楽。此四句、菩提心開けて天上に昇る階、煩惱の黒き雲を捨てて愛欲別離の海を渡る舟、八相成道の義果なりと言へり。彼を聞き此を思ふにも、まさに生死を出づべき道は尋ねまほしう侍に、この山の奥に靈鷲寺といふ所あり。(中略)今の長老、道学ともに其徳高く聞ゆ。この山に過ぎにし跡を残され侍を、代々の所に移し聞ゆべきを、いまだそのまゝにてをはすれば、踏みなる、山路

にて対面の序も侍れば、「如何にしてかまさに生死を出づべからん」と尋ね侍に、一句を示さるゝ事あり。更に又言葉なし。それよりこゝをあげみるに、思ひ得る方ぞなき。されども自ら不審もあれば、尋ぬる事もありて過ぐる程に、まことに生死の根を切らん事はこの修行なるべきにこそと思ひ知らるゝ。

靈鷲寺は、現存しないが臨済宗の寺と推定されている^(註77)。名子が浄土教の次にその問いの答をもとめたのは、西園寺家とも関わりの深いこの寺の長老であった。「如何にしてかまさに生死を出づべからん」、まさに真摯にして、直截な問いかけである。その時は一句を示されただけで「思ひ得る方ぞな」かったが、以後作者は、この長老に帰依し、教えを乞うていたことが、本記の記事からもわかる。

貞和の初の年、十二月十五日に、靈鷲寺に談義侍れば聴聞すべきを、折しも雪いみじう降りて二尺余ばかり積れる、分けがたきさまなれど、ことさらに心ざす事しありて、例の老人誘ひ聞えつゝ思ひ立ちぬ。輿舁の分けかねたるさま、いといみじ。入もてゆくまゝに、やゝ深くなりて、其処と見えぬ行先なれど、岨の懸路の一筋に迷ふ方なきをしるべにてぞ分けける。人々あまた侍にも、この道を分けける心ざしは浅からざらんかしなど見渡さる。^(下82)

「ことさらに心ざす事しあ」ったので、二尺以上の積雪にもかかわらず出かけていったとある。聴聞の人々の志が「浅からざらんかし」と言っているが、それは自分自身への言葉でもあろう。名子の特別の志とは何であろうか。位藤氏は、「名子が殊更に志すことと言っているのは、亡夫公宗の菩提を弔う事であったのであろうか。それとも、家門の安全を願うことであつたのであろうか」^(註78)と推測されている。しかし、臨済宗の談義である

()
から、現世利益的な目的で行ったとは考えにくいし（本記中、靈鷲寺に関する記事で現世利益的な言説が出る箇所はない）、また先に靈鷲寺への道を「踏みなる、山路」と言っていたことから、公宗の菩提を弔うためにたびたび通っていたらしいことがわかるので、そのために雪の道を難儀してまで出かけたとも、また考えられないのである。ここは、「岨の懸路の一筋に迷ふ方なきをしるべにてぞ」という「雪の道のしるべ」と「求道のしるべ」との両方の意味を掛けていると思われる表現からも、まず聴聞することにその動機があったと考えるのが自然であろう。先に述べた信仰に対する疑問の解決を求めていることと考えられる。

この長老の寂滅の際の作者の感慨が、下段に記されている。

我、今逢がたき善知識に逢へる宿善を喜ぶといへど、心もとより愚にして、朝には暮を頼み、夕には又明日を後する程に、光陰移り過ぎて、年去り年来りて五の春を送るまで、まことある事なくして今滅後に逢へり。先非を悲しめど、後悔先に立たざれば、恨千万といへど、さらにかひなし。

ここから、名子がこの長老をどれほど敬慕し、信賴していたかがわかる。名子は、この長老を頼りとして修行に臨んでいたのである。その修行は、下段にあるが如きものをめざしたのであった。

いかにして堅固の道心を勧め侍べきや。大方、諸法は一心より生ずといへり。心の善惡によりて物に善惡あり。果報は業因によりて感ずべし。菩提心は仏身を成ず。慳貪の心、これ餓鬼となり、瞋恚の心、猛火となり、畜生は愚痴の心これなり。業量、秤の如し、重き物まづ引くといふ事あり。又善は少けれども、多き惡には勝つとも言へるなるべし。妙法の功能は因果の道に越え、大乘の作用は邪正なし。この法の力にあらず

は、いかでかこれらの重き咎を滅する道あらん。よく常に一心を修むべきなり。／それたゞ一句の公案を挙げみて、これを思ふ事これに在るが如くして、行住坐臥、退転あるべからず。悪にはいかにも遠ざかり、善には必ず近づくべし。麻の中の蓬は矯めざるに直く、松にかゝる葛は自ら千尋に昇るといへる、まことなるべし。

作者は、「諸法は一心より生ずといへり。心の善悪によりて物に善悪あり。果報は業因によりて感ずべし。菩提心は仏身を成ず」という唯心論的な考え方(註 79)に基づいて、「常に一心を修む」ことを肝要としていた。それには、「たゞ一句の公案を挙げみて、これを思ふ事これに在るが如くして、行住坐臥、退転あるべからず」というように、いつもいつも心にそのことを思い続けること、一句の公案(法)に寄りかかることによって、己が心を直く保ち続けること、つまり善の状態に近づけることを目指そうとしている。

それからしても、作者が「いかでかこれらの重き咎」としているのは、具体的には心の在り方、「慳貪」「瞋恚」「愚痴」などをさすものであろう。この叙述にも、作者の生きることの罪への認識の程が示されている。作者は、己が心の「善なるもの」を信じようとしている。換言すれば、己の存在そのものが罪であるという自覚はなく、精進によって心を善く保ち、開悟へと向かえるものと信じていたということになる。

しかし、先にも記しているように、いかに「逢がたき善知識に逢」えたとはいえ、その修行の実態は次のような有様であった(下46・47)。

騒ぎ紛るゝ営にてのみ日を暮らせば、座を定むる事は難ければ、立ち居、起き伏す所に心をつけつゝ、明かし

暮らす。冬の夜、一人起き居たるに、窓をたゞく嵐も常に烈しく吹呟えつゝ、いとすさまじき夜の気配なるに、熾し火さへほのかになりぬ。明けぬと驚かす鐘の音にも、覚むる現はいつならんと悲し。

あはれこの眠らぬ床に見る夢を覚ます現の暁もがな

内には道行を励み、外には家門安全を念ずれば、内外ひまなくして、花を遊び月を愛づる情も知らず。さすが世に経る慣ひにて、さりがたき友に誘はるゝといへど、心にとまらざれば興遊にもあらず。憂世の色は自ら捨て果つる心地すれど、なを晴れがたき心の闇は、澄まさんとする山水もかつ濁るらんかし。

この世に生きる限り、そう簡単に修行の果を得て、悟りを得ることなどできないのであった。しかも、彼女には仏道修行だけに専心できない、この世のほだしがある。「外には家門安全」を念ずることも、また彼女には捨てるべきものではなかったのであった。本記中には、この他にも自省の言葉が記されている。

事にふれつゝ、心をすゝむる便りあり。かゝれども居所を改めたるのみなれば、心ざしの至らざる事を身づから辱かしむ。且はいよゝ心をすゝましむるほかの他事なし。(下94)

名子は、靈鷲寺の長老の導きにもかかわらず、また自らの精進にもかかわらず、未だ解脱の境地に至ることができないでいる。その悔恨の情が、またあらたな精進の道へと赴かせる心理がうかがえる。

作者は、出離を希求する烈しい思いを持ちながら、決してこの段階で、開悟できてはいないのである。

二 現世利益的志向

一方、これらの心の中の問題と併存する形で、家門の安泰を願ひそれを神仏に祈るという現世利益的な志向も作者にはあった。本記から、その志向のうかがえる記事を掲載順に挙げてみる。

①春日詣 (康永四年、正月月中旬) 下59

かしこまるしるしと御幣など捧ぐるに、いさゝか思ふ事侍て、

頼みつゝ畏れみ仰ぐ我方になびかざらめや神の木綿四手

和光同塵の垂跡、平等方便の利益には、我しも空しからめやと頼もし。八相成道の終、涅槃妙法真大乘般若の法衆は、随喜の笑を含みましゝて、二世の願成就せしめ給とかや。

藤原氏の氏神である春日神社に参詣して、二世、つまり現世と来世の利益に自分も預かれるはずとの思いを抱いている。

②初瀬詣 (貞和三年一月二十八日) 下68~72

いかに思ひ初めけるにか、初瀬の観音を頼み奉りて、朝ごとに香花を供養しなど侍しを、なべて神仏をも恨めしく思ひし世に、捨て果て聞えしかど、さてもあらず、願など立て置く事あれど、遙けき道にすがゝしくも思ひ立たれず、年月を送る程に、貞和三年正月に夢想の事あるに驚きて、忍びつゝぞ思ひ立ち侍。睦月の廿八日に宮こをたちて、その夜は奈良に泊る。(中略) 暁、まだ暗き程に宮廻に出でて、大宮の御前に念誦するに、山際いさゝか白みそめて、人の気配もまだ見えず、いと静かなるに、昔をかけて思ひ続ける事あるにも、さすが捨て果てさせ給まじきにやと、頼みをぞかけ聞えける。

神や知る引く注連縄の打延へて一筋にのみたのむ心を

(中略) 年比持ち奉れる本尊を中尊として、三十三体を造り供養し侍を、ことさらこの寺にて供養すべく思ひ給へし、その心ざしをぞ遂げぬる。過ぎにし頃より家門の事わづらはしき子細ども侍うへ、大方代々の流れ久しかるべき安全を、思ひ心ざしなるべし。(中略) 濟度利生の空しからざる事、古に旧り今に流れて初瀬川の音絶えず、大慈大悲の深き色は八入の岡の木々に染めても、猶喩とするに及ばざるにや。現世猶頼みあり、いはんや出離解脱の方便、いと頼もしかるべし。

この叙述からは、かなり長期にわたる信仰がうかがえる。しかも、三十三体供養では、その「心ざし」は、はっきりと家門の事、代々の流れの安全という現世における安寧を祈誓することであったとしている。それに加えて「現世猶頼みあり、いはんや出離解脱の方便、いと頼もしかるべし」とここでも二世にわたる方便利生を頼みとしている。

③ 十一面観音供養 (貞和三年十二月一日) 下

宿願侍て、十一面観音の像を造り奉る。御丈、長谷の一丈六尺になぞらへて、一尺六寸とす。仏舍利三粒東寺、御家門相伝也、水晶の塔納寿、十一面卅三体木像、観音經一卷自筆書写、金字札拜、料紙、故大納言殿御手、裏を返す、これらを御身中奉籠。貞和三年十二月十八日、三身堂にして供養し奉る。法印静宴なり。いさゝか心中に祈念の旨侍し。

宿願があり十一面観音の像を造ってこれを供養したという記事であるが、冒頭に「宿願」といい、末尾にも「い

さ、か心の中に祈念の旨」があったと重ねて記している。その宿願の具体的内容は、例によって書いていないのだが、胎内に、「御家門相伝」の「仏舍利」と「故大納言殿御手、裏を返」して書写した観音経を納めたということからは、その宿願が公宗かあるいは西園寺家に関わったものであった可能性が高いことを推量できる。この年の秋に公宗の十三回忌を済ませていることも考え合わせれば、公宗の菩提を弔い、ひいては家門の安全を心中に期したものであろう。これも、現世における利益に預かろうとしてのものと考えられる。

このように作者の行動には、多分に現世利益的なところがある。しかし、作者は現世における幸せをのみ願っているのではない。「二世の願成就せしめ給とかや」(下59)、「現世猶頼みあり、いはんや出離解脱の方便、いと頼もしかるべし」(下71)などに、その志向が明確に表れている(後述)。作者に、現世か来世かの選択はなく、現世と来世、二世における利生を念じているのである。

三 作者の道心の特質

いま二点に分ち、作者の求道の実態をみてきた。作者には、出離の願いと現世利益を求める思いと二つの志向があることが確認できた。しかも、それが作者の中でなんら矛盾しないで共存しているのである。このことは、作者の求道における姿勢の大きな特色である。渡辺静子氏は、この点について、名子の中で相剋はあったとして、次のように言っておられる(註 80)。

鎌倉末期に観念されていた一般教養的無常観は、作者において、家門意識という現世執着とそこから脱出し

ようとする宗教志向との葛藤によって、人生探求、自己確立の立場から飛躍し、道念として人間開眼へ赴く契機をなした。つまり名子の無常観念は、その心象の中で燃焼され、人間のあるべき真の姿をみつめる内なるものによって、開眼し啓示されたといえる。

「家門意識という現世執着」と「そこから脱出しようとする宗教志向」との葛藤という構図で、名子の求道への志向を捉えようとされている。しかし、『竹むきが記』の本文には、この二つの観念の深刻な対立、葛藤、相剋といったものは描かれていないのである。本記の場合、その特異な表現方法からして、描かれていないものが即ちなかったものと直結することは、慎まねばならない。葛藤はあったのに書かなかったという可能性もあるからである。それでは、今考えてゆこうとする問題、求道については、どうであろうか。先に引用してきた信仰に関する記事をみるに、作者は、比較的率直に自分の心境を綴っているようである。こと自身の修行、求道の問題については、何ものにも、誰にも憚ることなく書き付けることができたのではないだろうか。とすれば、この問題に関する限り、作者には書き残さなければならぬ程の葛藤はなかったものと思われる。

それは、先に指摘しておいた次のような叙述からも証される。

和光同塵の垂跡、平等方便の利益には、我しも空しからめやと頼もし。八相成道の終、涅槃妙法真大乘般若の法楽は、随喜の笑を含みまし／＼て、二世の願成就せしめ給とかや。 (下59)

神は仏が仮の姿、衆生を救済しようというその功德は、「二世の願成就せしめ給とか」であると、「平等方便の利益」と「二世の願」の成就とを何の躊躇もなく結びつけている。

()
初瀬に詣でた折には、観音の利生についてその頼もしさをいっている(下71)。

観音の利生方便は異なる上、この山の靈地、世に勝れて、一度もこの地を踏む者あらば、長く三惡道に墮つべからずなどぞ申侍。御足に踏ませ給なる瑪瑙の石は、天竺国・補陀落山・この山、三界の中に三所にのみありと申伝へたるは、まことにや侍らん。濟度利生の空しからざる事、古に旧り今に流れて初瀬川の音絶えず、大慈大悲の深き色は八入の岡の木々に染めても、猶喩とするに及ばざるにや。現世猶頼みあり、いはんや出離解脱の方便、いと頼もしかるべし。

垂迹説に基づいた初瀬観音の濟度利生についての記述である。慣用的な表現で、聴聞から得た知識かもしれないが、ここでも「現世」の頼みと「出離解脱の方便」の頼みさとを同列に扱うことに対する怏屈はない。

また、すでに何度も引用したが、下72では、

内には道行を励み、外には家門安全を念ずれば、内外ひまなくして、花を遊び月を愛づる情も知らず。さすが世に経る慣ひにて、さがたき友に誘はるゝといへど、心にとまらざれば興遊にもあらず。憂世の色は自ら捨て果つる心地すれど、なを晴れがたき心の闇は、澄まさんとする山水もかつ濁るらんかし。

内と外という二つの方向性で求めるものがあつたので、ゆっくりと花鳥風月を眺めやる隙もなく友との興遊もせず、ひたすら「憂世の色」は捨て去つたと思つていたのに、「心の闇」はなお晴れることがないといっている。しかし、その理由を、徹底して現世を捨てきれなかつたせいだとは、作者は考えていない。内も外も作者にとつては、同じ次元の希求だつたといえよう。この段に引き続き「さるは折につけたる興遊も、世にありがたき住ひ

にぞありける」と北山第を讃美するもの、その現世利益の頭れの一環として捉えているものであろう。

岩間をくぐる清水は代々にすみける流れ絶えず、結ぶ手の雫に濁る恨だになし。事にふれつゝ憂世を忘るゝ
つまにぞ待べき。(中略)

ことに成就心院は座をさまさぬ不断の勤め、嚴重の御願なれば、安貞二年十一月に始置かれけるより、今貞和五に至るまで、一時も退転あることなし。昼夜朝暮の勤の音、霞に余り霧に漏るゝ鈴の声絶えず、松を払ふ冬の嵐には、峰に答ふる声は煩惱の雲を分けて法性の空にや響くらんと、心も澄みて聞ゆ。

などに作者の姿勢が反映されている。おそらく平安期からの「この世に現出される浄土」という発想を背景とするものであろうが、作者の中では、現世の清らかな様も、出離解脱を求める心とあい響き合うものとしてとらえられており、それらが渾然一体となって存在するのである。

以上のように、名子においては、普通求道の妨げになると考えられる現世的充足への執着が、何の相剋もおこさず、そのままの形で受け入れられている。それは、公宗の後を追っての自害もせず、出家もせず生きて行くことを自らの意志で選んだ作者の、自然な形の求道であったといえよう。

現世への執着を残したままの求道は、不純であると言うこともできようし、一宗派の立場から見ると作者の行為は徹底しない不完全な姿勢と言わざるを得なくなるかもしれない。しかし、それでも作者は、「如何にしてかまさに生死を出づべからん」(下45)、「いかにして堅固の道心を勧め待べきや」(下66)という己の心の深奥からの問いかけに対し、ごく一般的な教義の理解に満足することなく、あくまで真剣に対峙して、追ひ求めている。

ったのである。そういう点において、作者にとっては、浄土宗とか禅宗とかといった宗派の垣は全く意味をなさないものであったのである。彼女は、ただひたすら先の問いへの答えを追尋したかったのである。このことは、作者の希求する心の厳しさと激しさ、彼女の意志の強さを示すものといっていよう。

史実からみて、本記の欄筆時点で実俊は、権中納言（正三位）である（『公卿補任』貞和五年から文和二年二月二十九日まで在官）。本記の記述からも、西園寺家当主として順調に滑り出したらしいことがうかがえる（しかし、この家督相続も決して安泰といえるものでなかったことは、先述のとおりである）。公宗を奪われて以後、実俊のため、西園寺家のため、生きてきた作者であった。彼女は、その責任という重い荷物を、実俊の成長に应じて少しずつ軽くしてきたのではないだろうか。その一つの表れが物語であろう。家門の繁栄を祈願するということは常に意識されていたであろうが、既に指摘した如く、物見遊山の風情さえ感ぜられる叙述もある。この心境の変化を反映するように信仰への傾斜を強めていったと考えられる。次節では、作者の心の在り様の変貌ということ、つまり作者の書き残したかったことについて考えたい。

第二節 作者の変貌―名子の行きついた場所―

先の名子の道心の特質については、さまざまな捉え方があり得る。そのことについて今一度ここで検討することにより、そのような道心を持つに至るまでの作者の心の在り方と、欄筆時点で作者が至り得ていた境地という

ものについて考えてみたい。

玉井幸助氏は、早く名子の求道について、次のように捉えておられる（註 81）。

名子は、非業の死を遂げた亡夫の追善に心を用いて仏事供養を営み、また自らの仏道修行に志して常に求道生活を続けたのであるが、しかし敢えて出家遁世をするということなく、俗界の義務を遂行することの中に仏道の真義があると諦観していた。

この説に対し、位藤氏は先の論考で、「名子が仏の慈悲を信じ、靈鷲寺の長老などに導かれて、宗教の世界に目を開かれていったことを否定はしない。乱世に生きる母は、そこに没入できなかったというのである」とされた上、「正しくいえば、信仰の世界に入りきれない不安を、俗界の義務という形で解消しようとしたものであろう」としておられる。「俗界の義務」と「仏道修行」との関係を、玉井氏は、前者を後者に取り込む形で位置づけようとされ、位藤氏は、後者の不徹底を前者で補うという形で捉えられている。しかし、名子の中で「俗界の義務」と「仏道修行」とは、はっきりと区別されて意識されていることが、「内には道行を励み、外には家門安全を念ずれば、内外ひまなくして」という表現をとっていることからわかる。この二つの志向は、別々のものとして意識されているが、二つながら存立しており、場合によっては渾然一体とすることがあることは、前節でみたとおりである。作者の意識の中では、どちらかが他方に包摂されるとか、どちらかでどちらかを補うとかといった関係を持ち得るものではないと考えられる。

また、渡辺静子氏は、「名子の悟道」について、次のように結論されている（註 82）。

貴族の世界に浸透していた浄土教の他力本願による往生思想が、教養としてだけでは疑問が多く、自力による自己規律の厳しい天台の正統的教理と修行における唯心的思想が名子には必要であったのであろう。自らの内的心法によって菩提心を得ようとする中世草庵の禅的精神が、こうした彼女を捉えてやまなかったと思われる。それは無常の事実を幾つも体験した名子なりの信仰であり、解脱開悟への方法でもあったのである。厭世的来世欣求思想の観念は、名子において、禅師の教導を受け、現生的実践行の主張となった。いずれの教義にも宗派にも屈せず、超宗派的に自由に人生を探索して、人間開眼を志向する隠遁者のあり方と名子のそれとの接点をここに見出すことができる。即ち名子は、在家にあって信仰をもつ隠者の心に近い心をもったものといえることができる。

現世への執着をもったまま求道するという行為に、兼好に相通じる「中世草庵の禅的精神」を見い出そうとされ、「名子が深い人生凝視の立場から、貴族社会に生きながら、長老、道学に教えられた禅思想を摂取した結果が、兼好と全く相反するものでなかったことだけは確かであろう」としておられる。名子は、「中世草庵の禅的精神」の影響下にこのような道心を持ったわけではないので、特に名子の道心を草庵的な思想に結びつける必要はないと考えるが、結果的に隠棲しないままの求道を目指したことに共通項を見い出されたものであろう。

これとは別に、宿世観も厭世的来世欣求思想もなしながら、結論として名子の道心に同様の禅的開悟の志向を認められるのが、小松茂人氏である（註 93）。

当来^{（註 93）}の世は、彼岸的来世ではなく、現世の延長としての未来である。名子が現当二世の願に惹かれるものが

あったということは、名子の道心が現世的・此岸的であったことを示唆するものではないだろうか。(中略)
総じてこの「日記」には、退嬰的な宿世観も、厭世的な来世欣求の思想も見られないところに、名子の道心を示唆するものがあると言えるであろう。

とされ、最後に名子の求道を次の三点に要約されている。

- 一、名子の道心は彼岸的・来世的ではなく此岸的・現世的であること。
- 二、右の特質の当然の帰結として、名子の道心は現世的生の充足の希求と背反しないこと。(出離的ではないということ。)

三、自己規律的開悟を志向し、無心超脱を理想としたらしいこと。

作者にとって、現世的生の充足の希求と矛盾しない道心の在り方が出離的でないということにならないのは、今まで確認してきたとおりである。作者は、「如何にしてかまさに生死を出づべからん」(下巻)という問を抱き続けていたのであるから、出離的でないとはいえず、彼岸的・来世的でないともいえない。ただ、家門の安全を願うことが、求道の妨げになる妄執の一つであるという認識が、作者にはなかったのである。

このような様々な見解を生むのは、作者の求道の在り方が、普通の求道に対する概念と異なる点を持つからである。道心と妄執と、本来相容れないものを作者の中で、本来の姿のまま位置づけようとすると、右のようにどこか偏った解決を求めたくなる。しかし、作者は、生きることの無常を覷じ、煩惱の束縛から逃れて迷いの世界から離れたいと念じ続けながら、家門の安泰という現世的充足も求め続けていた。そのことに何の疑念も抱いて

はいない。それを作者の道心の限界といってしまうこともできる。しかし、その二つのものの関係を測ることよりも、作者がなぜ求道において現世への執着を相剋もなく受け入れていったのか、そのような特異な道心を持つに至った作者の必然を検討する方がより重要な問題と考える。

あえてこの点に理由を見い出そうとすれば、それは名子が夫の刑死に会い、それでも生きてゆこうと決意したことである。その時点で、その後の彼女の観念の全てが、規定されたといっているのではないだろうか。作者にとって、生きてゆくことは、即ち家門の再興を願うことであつた。彼女の「生」の大前提には、西園寺家の、夫公宗の名譽の回復があり続けた。それあつてこそその彼女の現在があり、道心があつたのではないだろうか。だからこそ、家門の安全と求道の姿勢とは渾然として在り続けたのではないだろうか。そこにこそ彼女が生きつづけてゆく意味があつたと考えられる。

また、下巻でも確認できたように、作者にはもともと身に付いたものとして観音信仰があつた。「なべて神仏をも恨めしく思ひし世に、捨て果て聞えしかど、さてもあらず、願など立て置く事あれど」といつている。おそらく公宗の事件の頃のことを指していると思われるが、その辛苦を体験してもなお、観音信仰を捨てていないことがわかる箇所でもある。このような宗教的素地を持ちながら、彼女は自分の現在に応じた求道の思いを発したと考えられる。そういった作者の生の意味を勘案すれば、そこに現世利益と出離の葛藤はあり得なかったともいえるのではないだろうか。

そこで、ここで改めて『竹むぎが記』における名子の生き方について、彼女の心の在り所という観点から概観

しておきたい。

上巻前半部は、主として公的行事の記録といえるが、その中に、女房として行事に立ち会う立場にあった自身の姿とその時の心情が綴られてもいる。また記事の選択にも、作者のその時の心境の反映が見られる。公人として、女房としての心境の記録といえる。

上巻後半部は、公宗との交情と北山第に正妻として入ることになった経緯とを記している。ここには、公宗への思いと結婚への不安が綴られる。いわば公宗と出会った女としての作者の心の軌跡の記録ともいえよう。

下巻は、家格の隔たる日野家から西園寺家に正妻として入った者としての自分、また当主実俊の母としての自分の生き方と心境とを描き、それと並行して求道者としての自分の心を正直に表白してもいる。

右のような視点からみると、本記の構成は、まさしく作者の心の変遷をも追っていることに気付かされる。女房日記的な傾向の強い上巻前半の記事も、表面的には公的な行事を追っているようにみえるが、その底流に作者の心情があることは、先に見てきたとおりである。上巻後半部に主として描かれる公宗への愛情も、その萌芽は、二人の出逢いとともに、すでに上巻前半部にさりげなく語られていたりもする。

中断の期間に作者を襲った悲劇と、それによる境遇の激変とが作者の姿を変貌させている。それは、上下巻の世界の変化という形となって、この『竹むぎが記』に反映されている。上巻で慎み深く、控え目に公宗の愛情を受け入れていた作者が、下巻では、西園寺家の再興を願い、西園寺家の当主として実俊を育てる意志的な女性としての姿も見せるようになっていく。そうした生活の中にも、物詣でに出かけられるような状況的、心理的な余

裕も生まれてくる。真摯な解脱への希求も心に芽生えてくる。そしてその疑問を解くために作者は、積極的に行動している。大まかにその変貌を捉えようと、このようになろう。

この変貌の要因は、このようにして生きざるを得なかった境遇でもあろうが、やはりそこに、生きて行くことを選び取った作者の意志の重さを見るべきではないかと考える。書くことができなかった中巻によって、上下巻は書かれなければならなかったと捉えることができる点については、先に確認した。作者が自分の何を書いておこうとして筆をとったのかを考えると、それは己れの実人生を記し留めようとしたというよりも、そういう生き方によって変わっていった自分の心の深淵を覗き、それをこそ書き残そうとしたととらえることができるまいか。作者は、己の心の在り方と、その変貌の軌跡を何よりも書き留めておきたかったと考えることができるのではないだろうか。

そうした作者が書くことをやめ、筆を擱くことになった、その心境は如何なるものであったのか。作者は、下巻以下で、関わりの深い様々な問題に自分なりの決着をつけて、この記を終えている。その部分で、自分の道心については、「事にふれつゝ、心をすゝむる便りあり。かゝれども居所を改めたるのみなれば、心ざしの至らざる事を身づから辱かしむ。且はいよゝゝ心をすゝましむるほかの他事なし」といい(下94)、「あはれなり柴の庵の柴の垣うき世中の隔てと思へば」ともいっている(下95)。このことからして、この時点での作者の最大の関心事であった解脱については、開悟の境地に至り得ていないことを自覚していたことが判明する。その後、日付を戻して、北山第への「院・新院御幸始」の記事を載せ、その折、作者は両院と対面し、「今よりは常に成ら

()
せ給べき御あらまし」との言葉を頂戴している。今後の、北山第ひいては西園寺家への寵遇を確約されたということ、次には、それを証するが如き実俊の中將直任という名譽の記事を載せる。この時点でも決して安定した政情ではなく、完全な保証など望むべくもない状況ではあったが、作者としては、一応安堵できる程度の事柄であったのではないだろうか。最終段では、鷹司の老人との贈答歌を記した上で、末尾に二首の和歌を添える。この贈答歌は、雨のためにやむなく花見を中止した折の鷹司の老人からの詠いかけに際して、お互いの心境を表したものである。

慕ひ見し山路の花の木のとめし心の程は知らずや

鷹司の老人

馴れしよりかゝる別れのあらんとは思ひながらも猶ぞおどろく

名残思ふ涙の雨のかきくれて花もしほれし帰るさぞ憂き

返事にそへて、

思ひやれ雨も涙もかきくれて名残しほれし花の木本

名子

いとせめてあかぬ名残の悲しさに馴れしさへ憂き恨みとぞなる

「鷹司の老人」については、岩佐氏の詳細な御論考⁸⁴があり、今はそれに従って名子の伯母、伏見院中納言典侍としておく。この人は「若くして夫を失い、ようやく成人させた息子にも幼児を残して先立たれるという、名子にも相似た不幸を味わい、更に伯母として名子の悲運の一部始終をも身近に見知っていて、名子が心を許すてうちとける事のできるほとんど唯一の人である」（岩佐氏）。その伯母との心安らかな交流を雨にけぶる北山

第の桜の姿と二重写しにして叙述したものであろう。ここには、心を許せる人としみじみと語り合う静かな時間が流れている。それを、岩佐氏は「多年の心労から解き放たれた名子の「寂しい充足感」と表現された。確かに作者の生の根源であった西園寺家の再興は、ある程度成し遂げられたといえよう。それを報告すべき相手、公宗がこの世にいないことが、その寂しさの要因である。しかし、名子は全ての責任から解放されたわけではないと考える。この後も生きていく限りは、背負っていかねばならない責任である。出家遁世でもない限り、それから逃れることなどできない。そして、そういう生き方を名子は自ら選んで生きてきたのである。そういった意味で、ここにあるのは、諦観とでも呼んでおもしろいような心境ではないだろうか。しかしこの場合の諦観とは、決して宗教的な意味合いではない。また、渡辺氏のいわれるような「すべてを放下して、生を楽しむ境地に近い、達観的心境」でもなく、「名子の悟道精神の到達地点」でもない（註）。この程で満足としよう、自分の人生はこの程度のものなのかもしれないという心境ではなからうか。それが、名子の至り得た境地であると考えたい。やや肩の重荷を軽くでき、実俊の将来にも目処がつけられたと感ぜられたこの時点を、一つの区切りとし、筆を擱いたものであろう。

末尾に添えられた二首の和歌に、それが表されている。この二首は、本記全篇の跋としての述懐歌でもあるが、また、その時の作者の心情をも詠い込めているものと考えられる。

藻塩草かきて集むるいたづらに憂世を渡るあまのすさみに

なき跡にうき名やとめんかき捨つる浦の藻屑の散り残りなば

「藻塩草」の一首には、謙遜の意が強い。しかし、一方、「いたづらに憂世を渡」ってきた「あま」である作者自身をもそこに投影している。「あま」には、もちろん「海人」と「尼」とが掛けられているが、作者の中に自分を出家の体をとってはいないが、意識としては尼であると位置づけたい思いがあったこともまた確かである。

「なき跡に」の一首は、渡辺氏も指摘されるとおり^(註 86)、公宗の遺言歌ともいえる上66の次の歌と遠く響き合っているようにも見える。

忘れずは形見とも見よあはれこの今日しも残す水茎のあと

「なき跡にうき名やとめん」「散り残りなば」に、公宗亡き後、その心に応じようとして、あえて自害することもある出家することなく、懸命に生きてきた作者の述懐の情が濃く映し出されている。二首ともに使われている「憂世」、「うき名」にも、そのつらい思いがにじみ出ている。もう一步踏み込んだ解釈が許されるならば、ここには、亡き夫、今も慕わしい公宗への作者の心のつぶやきが託されているとも読みとれる。私はここまでこうして生きてきましたよ、と。このように人に知られぬ形で、それとなく公宗に語りかけて作者は、この記を閉じたのではないだろうか。

そういう作者の心情を付度してみると、『竹むきが記』全篇を通じて、作者の公宗への思いが影を落としているともいえる。変貌を遂げた作者の心の中で、不変のものは、ただ夫公宗への慕情だったのかもしれない。名子はこの記を書くことにより自分自身への問いかけ、自己確認をしていったのであろうが、それは同時に、亡き夫

への密やかな「語りかけ」でもあったのではないだろうか。それでこそ名子は書き綴っていくことができたのであろうし、ある種の魂の救いを得て、少しばかりの心の平安を取り戻せたのではないだろうか。名子の辿り着いた場所は、宗教的な悟りの境地とは異質のものであるが、作者特有の心の在り方に規定された清閑な諦観の境地であったといえるであろう。

おわりに

『竹むきが記』は、平安時代から続いた女流日記文学の掉尾を飾る作品である。そしてまた、これを最後にしてしばらくの間、女流の手になる文学作品は歴史の時間の中に埋もれ、文学史へのふたたびの登場は明治を待たねばならなかったのである。そういう意味でも、意義深いものと考えてみる。

本研究は、記録的筆致の中に表現された作者の心情を具体的な文脈から読みとることによって、作者の真の執筆意図を探ろうとした。そのために、まず作品の背景となる中世という時代の特徴と、その中から作者の周辺に絞って作者の置かれていた環境をも把握することにつとめた。中世は、端的にいつて政治的にも思想的にも激動と混沌の時代であったととらえられる。その混沌の中にあって、作者は北朝方に仕え、北朝方の主だった公達であった西園寺公宗と出会い、家格の違いを越えて正室となる。しかし、間もなく西園寺家の復権を目指した夫公宗は、謀叛の疑いをかけられ斬罪に処せられる。一子実俊を身ごもったまま残された作者は、公宗の後を追うこともせず、出家することもせず生きてゆく道を選ぶ。やがて北朝の時代となり、実俊も順調に昇進してゆけるようになる。しかし、政治の実権は武家が握り、もはや公家方には国を動かす力は戻らない情勢となってしまうのである。作者の生涯は、時代のうねりに翻弄された悲劇ということができよう。そのような生を送りながら、作者は、本記を書き綴ったのである。

次には、この日記の持つ基本的性格について考察した。その際、作者の典侍としての出仕、女房生活の経験が

及ぼす影響の大きいことが確認できた。すなわち、作者はその本質として、「女房日記」の記者としての記録的態度を保ち続けていたことである。それは、私的記事の多くなる下巻に至っても変わらない。にもかかわらず、本記は単なる「女房日記」の域を越えて、「日記文学」であり得ることを検証しようと試みた。結果として、公的記録の中にも作者の真情が織り込まれていること、文学的鑑賞に耐えうる叙述を持つこと、自然観照と同時に自己観照をもしていると読みとれる部分があること等から、本記は紛れもなく「日記文学」であるということができると判断した。

その次の段階として、それでは作者は何を書き残しているのか、作者の実人生と本記に記されている記事との隔離を具体的に明らかにしようとした。そのため、まず現存の史料を可能な限り調査し、史実の再現を試みた。その史料の少なさから充分な結果は得られなかったが、作者が何を書き残し何を書かなかったのか、ある程度は明らかにできた。そして、そこから、この日記を書き綴るという行為が作者にとってどういう意味を持つのかを考えてみた。作者は、夫公宗の事件を慎重に回避している。また、その悲しみを直截に表現することもしていない。そのことは、この事件が時間によって癒せない傷を作者に与え続けていたことを物語るものである。ではなぜ、書けないことがあるにもかかわらずこの日記を書いたのか。その書けない部分が書くことを要求した、書けないことを抱え続けていたからこそ、作者は書かざるを得なかったといえるのではないかと考えた。これらの作業から、次のようなことが総括できる。

『竹むきが記』は、その平明な表現や記載内容にもかかわらず、難解な作品である。それは、その表現の背景

となっている中世の宮廷の生活文化などの実態がよく把握できていないためでもあり、作者独自の屈折した表現方法により、簡単に作者の真情を読みとれないためでもある。「日記文学」が「己が心の記」である以上、ある程度他者を意識しながらも、他者を拒む部分があることは宿命である。特にこの記の場合のように「書くことができないもの」を抱えているとおさらであろう。本記は、「女房日記」の慣習の上に成立し、基本的には「女房日記」の体裁を保っている、保とうと志向し続けている。しかし、公的記事や西園寺家を象徴する実俊の復権の過程を克明に記録することによって、作者が記録しようとしたのは、その望みが少しずつ充足されてゆくにしたがって変化してゆく己の心の様であったのではないかと考えられる。その心境は、表だっては書かれないので、その記事の選択や文脈から描かれていない作者の真情を読みとってゆくしかない。下巻での寺社詣での道行の部分では、作者に心の余裕が生まれていることを読みとれる。このような心理状態に至ってこそ、作者は自分の心の深淵を覗き込むことができるようになるのではないだろうか。そこから「如何にしてかまさに生死を出づべからん」(下45)の答えを求めている作者の心の旅が始まっていったのである。本記擱筆後も、作者の求道は続けたことであろうが、作者はこの時点で筆を擱いている。そのことを考えると、その時作者が辿り着いていた場所、宗教的な悟達の境地とはいえないまでも、静かな寂しさに満ちた諦観であったといえるのではないだろうか。本記の「跋」ともいうべき最後に掲げられた和歌二首は、作者の人生の総括であると同時に、亡き夫公宗への報告の意味合いもあったのではないかという踏み込んだ解釈も許されると考える。そうであれば、作者は、この日記を書き綴りながら、自己確認の営為と公宗への密やかな語りかけも行っていたのではないだろうか。それ

であってこそ作者がとても書き付けることなどできない深い傷をもちながら、何かを書かずにはいられない衝動にかられた意味を理解できるのではないだろうか。

本研究では、このように特異な表現方法をとっていることを具体例から明らかにした上で、その前提にたち、表現の底流、裏側に隠されている作者の真情を少しでも探りだそうとした。しかし、本記研究の問題点（序章）で指摘したことを、充分克服できたとはいえない。調査しても、なお不明な点が多いのである。したがって、先の考察は現時点での帰結であって、決してこれですべてが解決したというものではない。また、結果として、位藤氏の「中世の女流日記は、一見『公的』に見える叙述を通して、『私』を表現している。（中略）混沌とした中世という時代に『私』を見つける一つの方法は、世の中に起こるさまざまな出来事で自分を相対化してみることであったと思う」（87）との所説を追跡確認する作業に終わってしまったかとも考えるが、一つ一つの作品の位相の中での細かな作業によってこそ全体像の把握も可能となろう。今後、この課題を視野に含みつつ『竹むきが記』が作者にとってどのような意味を持つものであったのか、作者が書き残そうとしたものは一体何であったのかを引き続き探ってゆきたいと考えている。

注

- (1) 水川喜夫氏『竹むきが記』、「解説」(勉誠社文庫28、昭和53)、松本寧至氏『竹むきが記』、「解説」(古典文庫第275冊、昭和55)による。
- (2) 和田英松氏「竹むきの記について」(『史學雜誌』第貳拾貳編第六號、明治44)。なお、和田氏は、この論文で、書名について「同(帝國)圖書館の目録には、竹むきう記とあれど、のの字の寫しうの如く見えたるより、誤りしにて、竹むきの記を正しとすべし」としておられるが、同年八月の『史籍雜纂第一』では「竹むきが記」と訂正され、後、昭和一四年に当該論文が再録された折にも「竹むきが記に就いて」と改訂されている。
- (3) 『禁裡御藏書目録』「黒御擔子 第七」(『大東急記念文庫善本叢刊』第十一卷『書目集』、汲古書院、昭和52)所載による。
- (4) 『公卿補任 索引』(『新訂増補 國史大系』吉川弘文館、平成3)には、宗綱、基綱について、それぞれ次のような注記がある。
 宗綱 藤原〔松木〕 文正元年參議正四位上—永正十五年出家准大臣從一位(大永五年六月三日薨)
 基綱 藤原〔姉小路〕 文明十年非參議從三位—永正元年薨權中納言從二位(法名常心)
 基綱については、他に、源流、藤原流〔石野〕の二人がいるが、時代が合わない。
- (5) 玉井幸助氏『日記文学の研究』(塙書房、昭和56)。
- (6) 注2に同じ。『諸家系圖纂』は、写本及び版本にあたることでできなかったため、和田氏の論文からそのまま引用させていた。
- (7) 『竹むきが記』本文は、新古典文学大系『中世日記紀行集』(岩波書店、岩佐美代子他校注、1990)所収による。以下も同じ。また、『花園天皇宸記』は、『史料纂集』88(続群書類従完成会、昭和61)により、『頼定卿記』は、『歴代殘闕日記』巻

五十六(臨川書店、昭和45)による。

(8) 『尊卑分脉』第二篇(『新訂増補 國史大系』吉川弘文館、平成3)による。

(9) 注2に同じ。

(10) 伊藤敬氏「室町文学史私注 二序の章―『竹むきが記』の周辺―」(『藤女子大学国文学雑誌』21、昭和52・6)。

(11) 岩佐美代子氏「『竹むきが記』私注(続編)―長講堂供花と作者の女房経歴について―」(『國語國文』第四七卷第十号、昭和53・9)。

(12) 『公卿補任』第二篇は、『新訂増補 國史大系』(吉川弘文館、平成4)による。『愚管記』は、『続史料大成1』(臨川書店、昭和42)による。

(13) 下巻が先に成立したと想定するのは、白水直子氏である。「『竹むきが記』の成立について―特に執筆態度を中心として―」(『甲南国文』第36号、1989・3)によると、氏は、上巻の上限を足利尊氏が征夷大將軍となった暦応元年とし、下巻は貞和五年とその数年後の書き継ぎとするが、過去回想助動詞「き」と「けり」の使用法、執筆のテーマ、時日の記し方などから下巻から書き始めた結論する。そして、上巻の執筆は、下巻執筆終了後ではなく、その途中から書き始められたとする。しかし、氏の推論は組立に少々無理があり、首肯できない。

(14) 福田秀一氏「竹向が記試論―特にその成立と史的意義について―」(『武蔵大学人文学会雑誌』第4巻第1号、1972・7)。

(15) 松本寧至氏「竹むきが記の研究」(『中世女流日記文学の研究』第五章、明治書院、昭和58)。

(16) 渡辺静子氏「『竹むきが記』考」(『中世日記文学論序説』第三章「鎌倉後期の女性の日記」第一節、新典社、1989)。

(17) 水川喜夫氏「竹むきが記全釈」、『解説』(風間書房、昭和47)。

(18) 前田美稲子氏「『竹むきが記』の形成」(『名古屋自由学院短大研究紀要』4、昭和47・2)。

(19) 玉井幸助氏「竹むきが記」(『学苑』、昭和37・1)。

(20) 岩佐美代子氏「日記・紀行研究の概括と展望」(中世文学会編『中世文学研究の三十年』所収、昭和60・10)。

- (21) 永原慶二氏「南北朝内乱」(『岩波講座日本歴史6』「中世〔2〕」、岩波書店、1963、所収)、小川信氏「南北朝内乱」、新田英治氏「鎌倉後期の政治過程」(同講座、1975、所収)による。
- (22) 『史料綜覧』巻五「鎌倉時代之二」(東京大學史料編纂所、昭和40)。
- (23) 『尊卑分脉』第二篇には、資朝、俊基について次のようにある。
- 資朝 元亨四十二依天下事配佐渡国 元弘二「正慶二也」五卅於配所被誅
俊基 元弘元年七月依天下事被虜下向関東被誅了
- (24) 永原慶二氏、注21に同じ。
- (25) 小川信氏、注21に同じ。
- (26) 『岩波講座日本歴史6』(1963) 所収。
- (27) 田村完誓氏「中古天台の形成」(『講座東洋思想Ⅱ 東洋思想の日本的展開』第三章「天台思想の日本的展開」第二節、東京大学出版会、1967) には、本来的な「本覚」の意味について、「衆生の妄心におおわれた内在的な仏心の謂」であるとし、『大乘起信論』を次のように訳しておられる。「いわゆるさとりのとは、心の本体にかえり、迷いの妄念を離れることである。妄念を離れたときの心の相は虚空^{すうくう}に等しく、遍く宇宙法界にゆきわたり、これこそ如来の平等法身ともいふべき存在となる。心の本性は、このような法身なので、本来さとの性をそなえている(本覚)といえるのである。何故ならば、本来さとの性をそなえている(本覚)からはじめてさとする(始覚)といえるのである。はじめてさとする(始覚)ことは、本来さとの性をそなえている(本覚)と同じことだからである。はじめてさとする(始覚)といふことは、心が本来さとの性をそなえている(本覚) という理由によってさとする(不覚)といふことを想定している。さとする(不覚) から、はじめてさとする(始覚) といふことがいわれるのである。」また、『岩波 仏教辞典』(中村元・福永光司・田村芳朗・今野達編、岩波書店、1989)「本覚思想」の項には、「叡山天台における本覚思想は、中世にいたって徹底した現実肯定につき進んだ。まず生死に関して、真の永遠・絶対の生命は生と死の対立を超越した不生不滅(無生無死) ないし生死不二のところにあり、そこから

現実の生死二をふり返って見れば、生も死も、ともに生死不二の現れとして肯定されてくる。ついで同様の論法を仏凡・迷悟の二にあてはめ、仏のみならず、迷いの凡夫もまた仏凡不二の現れとして肯定するにいたる。凡夫こそは現実に生きた仏のすがたであるとして、凡夫本仏論さえ打ちだされ、ひいては日常の行為・生活のほかに、とりたてての修行は必要なしと説かれた。／本覚思想は仏教哲理の究極的なものとして価値高いといえるが、迷いの凡夫までも肯定するにいたった点は、仏教の一線を逸脱するものであり、そこには現実肯定の日本思想が関係していると思われる」とあり、「歎心」の項には、「己心こころを対象に観法すること。天台止観では、仏教には種々の観法があつて広く高度であるため、初心者はまず自己の心を観すべきことを説く。(中略)己心即仏と観じて阿弥陀仏を念ずるのを〈観心念仏〉と称し、日本中古天台で、己証を中心に口伝を尊ぶ法門を観心主張とする」とある。

(28) 赤松俊秀監修『日本佛教史Ⅱ中世篇』(法蔵館、昭和55)所収。第五章「旧仏教の中世的展開」(石田善人氏執筆)、2「口伝教学の大成」。

(29) 『岩波 仏教辞典』「台密」の項には、「伝教大師最澄以来、天台宗に伝承されている密教。(中略)台密の教相の特色は、第一に大日経・金剛頂経と法華経との一致説、第二に毘盧遮那如来びるおのそらと釈迦如来の一体説、第三に胎蔵・金剛界・蘇悉地の三部立て、第四に胎蔵界は十三会の曼荼羅、金剛界は八十一尊曼荼羅であること、第五に瑜祇経ゆぎきょうによる胎・金合行灌頂を行うことなどがあげられよう」とある。

(30) 家永三郎監修『日本佛教史Ⅰ古代篇』(法蔵館、昭和55)所収。第四章「平安仏教の成立」(園田香融氏執筆)、2「最澄と空海」。

(31) 注28に同じ。第一章「中世仏教の成立」(赤松俊秀氏執筆)、1「法然と専修念仏」。

(32) 注30に同じ。第六章「平安仏教の展開(その二)」(菊地勇次郎氏執筆)、3「藤原時代の浄土信仰と浄土美術」。

(33) 『講座東洋思想10』第五章「禅思想の日本的展開」第一節「臨済禅」(鎌田茂雄氏執筆)。

(34) 注28に同じ。同章、1「南都仏教の復興」。

- (35) 大隅和雄氏、前掲書。
- (36) 注28に同じ。同章、3「僧侶の政治関与と庶民教化」。
- (37) 『増補語林 倭訓栞』下巻（名著刊行会、昭和43）。
- (38) 『伏見天皇宸記』（『増補史料大成』3、臨川書店、昭和55、所収）。
- (39) 橋本義彦氏「勅修寺流藤原氏の形成とその性格」（『平安貴族社会の研究』、吉川弘文館、昭和51）。
- (40) 『国史大辭典』13（吉川弘文館、平成4）「名家」の項（橋本義彦氏執筆）。
- (41) 本文は『神皇正統記 増鏡』（日本古典文学大系、岩波書店、岩佐正・時枝誠記・木藤才蔵校注）による。
- (42) 作者の父資名が、「五月日馳下關東」（『公卿補任』嘉暦元年条）とあるのは、おそらく父の死と関連性のある行動であろう。なお、『公卿補任』同条では、俊光について「五月十五薨（于時在關東）。去四月廿八爲勅使下向關東」としている。
- (43) 『花園天皇宸記』卷三、注7に同じ。
- (44) 本文は『太平記』（日本古典文学大系、岩波書店、後藤丹治・釜田喜三郎校注）による。
- (45) 『公衡公記』第二（『史料纂集』続群書類従完成会、昭和45）、『本朝皇胤紹運録』（『羣書類従』第四輯「系譜部」巻第六十、經濟雜誌社、明治38）による。
- (46) 『續史愚抄』前篇（『新訂増補國史大系』第十三巻、国史大系刊行会、昭和16）による。
- (47) 『園太暦』巻一（続群書類従完成会、昭和45）。
- (48) 橋本義彦氏前掲書、第一部「貴族政治の構造」、「院評定制について」。
- (49) 注48に同じ。
- (50) 『国史大辭典』3（吉川弘文館、昭和56）「関東申次」の項（田中稔氏執筆）。
- (51) 木村正中氏「日記文学の成立とその意義」（『国文学解釈と鑑賞』第28—1、昭和38・1）。
- (52) 秋山虔氏『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』、「解説」（日本古典文学全集18、小学館、1988）。

(63) 石原昭平氏「日記文学における時間―回想・他者・語り―」（『女流日記文学講座』第一巻「女流日記文学とは何か」所収、勉誠社、平成3）。

(64) 三木紀人氏「中世の日記・紀行」（『研究資料日本古典文学』第九巻「日記・紀行文学」所収、明治書院、昭和59）。

(65) 木村正中氏「女流日記文学の史的展開」（『女流日記文学講座』第一巻、所収）。

(66) 宮崎莊平氏は「女房日記」について、「女房日記とは、少なくとも、女房の身分にある、あるいはあった筆者が女房の立場で書き記した日記である、と限定的に定義づけられるべきであろう」とされている（『女房日記の論理と構造』第九章「宮廷女房日記の展開―中古から中世へ―」、笠間書院、1996）。

(67) 序章の作品の成立の項で少し触れたが、下巻を二部構成とする説および五部構成とする説がある。二部構成とするのは、福田秀一氏（注14）、渡辺静子氏（注15）、水川喜夫氏（「『竹向が記』の構想と執筆意図」、『女流日記文学講座』第六巻「建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記」、勉誠社、平成2、所収）、白水直子氏（注16）等である。福田氏は、下巻の前半を「今貞和五に至るまで」を含む章段までとし、下巻後半は「康永三年に改まりぬ」からとされる。構成表で私に付した章段番号で示せば下158/下59/101という区切りとなる。渡辺氏は、下巻の前半は実俊を中心とし、後半は作者の行動が中心となっているとされる。その境界について明言されないが、康永二年の記事がまったくないことなどの指摘から福田氏と同様、59と60の間にその境を想定されているようである。水川氏は、前半を「西園寺実俊の中将拝任の拝賀」（下53）までとされ、後半を「菊亭大納言の逝去」（下53）からとされる。白水氏は、二部構成とされながら、その境界について言及されないのが不明。これらに対して、五部構成とされるのは、祐野隆三氏（『中世自照文藝研究序説』、和泉書院、1994）である。氏は、下巻第一部を「実俊中将拝賀」（下53）まで、第二部を、広義門院の五種の行修行の折の光厳院との再会の記事（下54）まで、第三部を賀茂社詣でから初瀬詣で（下76）まで、第四部を公宗十三回忌から日野の塔頭に詣でた記事（下97）まで、第五部を、「貞和五の睦月」の院、新院の北山への御幸始めから最終章段までに分かち。しかし、構成表からも判明するとおり様々な記事が錯綜しており、作者に明確な構想意識があったとも考えにくいので、判然と構成を分けるのは無理ではないかと考える。ただし、康永二

年の記事がまったくないこと、「貞和五に至るまで」の言い方と末尾部分の「貞和五の睦月に」（下98）、「その年の春」（下100）、「同春の頃」（下101）等の言い方がそぐわないことなどを重視すれば、福田氏の所説のごとく「康永三年に改まりぬ」以下が貞和五年以降「恐らく一、二年乃至数年の後」に書かれた、つまり二部構成との想定も可能となろう。

(58) 『光厳院御即位記』（『續羣書類従』第十輯下、卷第二百七十四、続群書類従完成会、大正15、所収による）。

(59) 『後宮職員令』第三（『令集解 第一』、『新訂増補國史大系』、吉川弘文館、昭和51、所載による）。

(60) 三角洋一氏「竹むきが記について」（『ミメシス』4・5合併号、昭和56・57）。

(61) 渡辺静子氏「『竹むきが記』の歌とその周辺」（注5に同じ。同章第二節）。

(62) 注2に同じ。

(63) 塚本康彦氏は、市古貞次氏が東大での講義において、「かかる悲惨事、そして後醍醐方の詮議を避けての逼塞の期間に当る。つまり鉛の海に沈められたみたいな呪わしいこの過去をば、はたして作者は後年上下巻を記したように記し得たか疑わしくも考えられる」と講じられたことを報告しておられる（「竹向の記」、『日本文学』第33巻第15号、昭和56・15）。玉井幸助氏は、「上下の間に三年ばかり欠けているのは、夫公宗の非業の死を中心とする建武年間で、書くに堪えなかった為であろうか、それとも中巻もあつたのが散逸したのであるか」（注5に同じ）とされ、福田秀一氏は、「恐らく本作の中巻は書かれなかった、少くとも書き残されなかったであらうと、筆者は思ふのである」（注1に同じ）との判断を示されている。

(64) 位藤邦生氏「『竹むきが記』の特質」（『中世文芸』44、昭和54・7）。

(65) 『公卿補任』康永三年（一三四四）の実俊初出の条には、「^{西郷}實俊」とあるので、建武二年八月二日時点で作者が懷妊中であつた可能性は非常に高く、『太平記』の描くとおおり公宗の百ヶ日に出産したということもあり得る。

(66) 例えば、下38に、永福門院の崩御に際して「八日、石蔵へ入らせ給ふ。御輿寄に竹林院殿参らせ給ふ。『いまはの御際にしも、御本意ならぬ御事ならんかし』と、人々も皆あきたる様どもなり。三条坊門大納言を催されて、領状にて侍ける、俄に故障ありければとぞ聞え給」とある。作者の感情とともに、永福門院も生前、公重に対してよい感情を持っていなかった様子が

察せられる叙述となっている。

(67) 注15に同じ。

(68) 『日野中納言資名卿記』（『歴代残闕日記』巻五十六、臨川書店、昭和^六、所収による）。岩橋小弥太氏は、『花園天皇』（吉川弘文館、昭和^三）四「皇太子量仁親王」の章段において、後伏見上皇が量仁親王の登極を待望していた旨を述べておられる。「もとの伏見宮の御文書の中に、文保二年（一二三二）正月二十日、何れの社壇に納められたのか、『かずひとの親王せんそ^{（後）}さうそく^{（前）}にまちつけば』という御願文の御下書がある。当時親王はわずかに六歳、まだ花園天皇の御在位中である。しかしこの時両統御和談の最中で、大略天皇の御譲位もほぼ内定していたのであるから、次の御理運を望まれたのであろう。（中略）その二十六日後醍醐天皇踐祚、三月九日邦良親王立太子、次の皇太子に量仁親王が予定せられているのであるが、上皇は待遠しく思し召したのか、元亨元年（一二三二）九月日野俊光を鎌倉に遣わして、それが進展するよう運動せしめられ、十月四日に石清水八幡宮に宸筆の御願文を納めて祈願せられた。」ここにも俊光がからんでいることを知るのである。

(69) 注2に同じ。「本書、及び花園院宸記、頼定卿記、園太暦、太平記等によりてその事蹟について考ふるに、もと光厳天皇の御乳母に参りて、典侍に任ぜられて、中納言典侍と稱し、正慶元年三月廿二日、天皇御即位に褰帳を奉仕せしによりて、同四月十一日従三位に叙せられたり。但し光厳天皇の御乳母たりしによれば、もとは天皇の御母廣義門院の女房なりしもの、如し」とある。

(70) 岩佐美代子氏「『竹むきが記』私注（上巻）」（『國語國文』第四一卷第二号、昭和47・2）。

(71) 注70に同じ。

(72) 『園太暦』貞和五年九月一三日の条に「任大臣節會事」として「今日左將軍^{（公）}可有任槐事云々、年齒過二毛纔一年、無指賢才譽、又非家門正嫡、早速昇遷、戚里之重寄、累門之餘慶、誠可嗟歎事也」とあり、公賢の公重に対する評価も甚だ低かったことがわかる。

(73) 渡辺静子氏「『竹むきが記』の無常観」（注16に同じ。第三章第五節）。

(74) 岩佐美代子氏「永福門院の後半生」(『京極派歌人の研究』第三章「後期の歌人」第二節、笠間書院、昭和49)。

(75) 『古事類苑』「天部・歳時部」(吉川弘文館、昭和3)。「日蝕」の項、「禁秘御抄」の引用に「日月蝕 主上當「日月蝕」之時、御愼殊重、(中略)不然年非輕、天子殊不當其光」、雖蝕以前以後、不當其夜光、日月惟同、以席裹迴御殿、如供御不當其光、日蝕未明前、月蝕未暮前、月不出前人々可參籠」とある。

(76) 『公卿補任』康永三年(一三四四)の条(実俊初出)に、次のようにある。「從三位 西園寺 實俊⁺ 正月五日叙。左中將如元(中略)故正二位行權大納言公宗卿男。母故入道權大納言正二位藤資名卿女。建武四十八從五下(于時實名)。――從五上。曆應二正五正五下。同三八二從四下。同四十二廿二左中將。(以下略)

(77) 位藤氏、前掲論文。岩佐美代子氏「『竹むきが記』私注(下巻)」(『國語國文』第四一巻第三号、昭和7・3)。

(78) 注64に同じ。

(79) 『岩波 仏教辞典』「唯心」の項には「あらゆる存在はただ心の現れにすぎないとみる見解。仏教はもともと唯心論的傾向が強い思想であるが、華嚴經においてははじめて『あらゆる現象世界はただ心でしかない』という〈三界唯一心〉の考えが前面に打ち出された。この華嚴經の唯心説に大きな影響を受けて、『唯識』という新たな思想が唯識派によって唱えられた」とある。

同「三界唯一心」の項には、「三界(欲界・色界・無色界)の現象はすべて一心からのみ現れ出た影像^{ようざう}で、心によってのみ存在し、心を離れて別に外境^{げいきやう}(外界の対象)が存在するのではないという意味である」とあり、「唯識」の項には、「あらゆる存在はただ識、すなわち心にすぎないとする見解。般若經の空^{くう}の思想を受けつぎながら、しかも少なくともまず識は存在するという立場に立って、自己の心のあり方をヨーガの実践を通して変革することによって悟りに到達しようとする教えである」とある。

(80) 注73に同じ。

(81) 注6に同じ。

(82) 注73に同じ。

- (83) 小松茂人氏「『竹むきが記』の一考察―作者名子の道心について―」（『芸文』4、昭和47・11）。
- (84) 岩佐美代子氏「竹むきが記作者と登場歌人達」（注24に同じ。同章第四節）。
- (85) 注732同2。
- (86) 注612同2。
- (87) 『時代別日本文学史事典』中世編（有精堂、1989）第三部「散文I」第一章「日記・随筆・紀行」「I日記の実録化」（位藤邦生氏執筆）。

付 構成表対照表

第三章に掲げる構成表の各章段の範囲は次のとおりである。当該章段の終わりとした箇所を『新古典文学大系』の頁数・行数で示した。

上1	二七四・六	上16	二七八・一〇	上31	二八六・一三	上46	二九三・一一
2	一〇	17	二七九・三	32	二八七・八	47	二九四・一六
3	一五	18	九	33	二八八・六	48	二九四・四
4	二七五・二	19	二八〇・一	34	一一	49	一〇
5	三	20	九	35	二八九・一三	50	一四
6	四	21	二八一・四	36	二九〇・三	51	一六
7	七	22	一〇	37	八	52	二九五・二
8	一〇	23	二八二・二	38	一四	53	五
9	一三	24	一五	39	二九一・一	54	八
10	一六	25	二八三・一六	40	五	55	九
11	二七六・七	26	二八四・一五	41	二九二・一	56	一〇
12	二七七・二	27	二八五・一五	42	二	57	一五
13	四	28	二八六・二	43	九	58	二九六・四
14	一三	29	四	44	二九三・三	59	一〇
15	二七八・六	30	六	45	七	60	二九七・五

()

61	二九七・七	下1	三〇四・九	上19	三二〇・一	下37	三二七・一
62	一三	2	一二	20	六	38	一三
63	二九八・六	3	一五	21	九	39	三三八・一
64	一六	4	三〇五・四	22	三一・一・一五	40	四
65	二九九・六	5	六	23	三二・一・四	41	八
66	一〇	6	六	24	六	42	三二九・六
67	三〇〇・六	7	一二	25	七	43	一〇
68	八	8	一六	26	三三・一・二	44	三三〇・五
69	三〇一・一	9	三〇六・三	27	九	45	三三一・一
70	七	10	一二	28	三二四・九	46	六
71	九	11	三〇七・九	29	一五	47	一
72	一〇	12	一二	30	三二五・四	48	三三二・五
73	三〇二・一	13	一四	31	八	49	三三三・一
74	七	14	一五	32	一五	50	五
75	九	15	三〇八・九	33	三二六・三	51	二
76	一三	16	三〇九・三	34	一三	52	三三四・一
77	三〇三・三	17	一二	35	三二七・二	53	八
78	九	18	一四	36	七	54	三三五・一

55	三三・五・九	73	三三三・四	91	三四〇・一〇
56	一三	74	七	92	一一
57	三三六・三	75	九	93	一六
58	八	76	一五	94	三四一・七
59	三二七・八	77	三四・八	95	一四
60	一二	78	三三五・九	96	三四二・三
61	三二八・一	79	三三六・四	97	七
62	七	80	一〇	98	三四三・六
63	一六	81	一四	99	一〇
64	三二九・六	82	三三七・一	100	一二
65	一一	83	六	101	三四四・九
66	三三〇・六	84	三三八・一		
67	一三	85	一一		
68	三三三・一一	86	三三九・一		
69	一三	87	七		
70	三三三・五	88	一二		
71	一一	89	一六		
72	一五	90	三四〇・七		

『竹むきが記』関係研究文献目録

一 研究書

玉井幸助	日記文学の研究	塙書房	昭和40年
岩佐美代子	京極派歌人の研究	笠間書院	昭和49年
松本寧至	中世女流日記文学の研究	明治書院	昭和58年
今関敏子	中世女流日記文学論考	和泉書院	昭和62年
渡辺静子	中世日記文学論序説	新典社	1989年
祐野隆三	中世自照文藝研究序説	和泉書院	1994年
宮崎莊平	女房日記の論理と構造	笠間書院	1996年

二 論文

和田英松	竹むきの記について	史学雑誌二二—六	明治44・6
塚本康彦	竹向の記	日本文学一三—二二	昭和39・12
玉井幸助	「竹むきが記」と乱世の悲劇	國文學解釈と教材の研究一〇—一四	昭和40・12
松本勝美	『竹むきが記』（上巻）の誤写	國文學踏査八	昭和43・2

- 位藤邦生 「竹むきが記」の特質 中世文芸四四 昭和44・7
- 神谷道倫 「竹むきが記」(下巻) 本文考 富倉徳次郎博士古稀記念論文集 『古典の諸相』 昭和44・11
- 岩佐美代子 「竹むきが記」私注(上巻) 國語國文四一—二 昭和47・2
- 同 (下巻) 同 四一—三 同 3
- 同 (続編) —長講堂供花と作者の女房経歴について— 國語國文四七—一〇 昭和53・9
- 前田美稲子 「竹むきが記」の形成 名古屋自由学院短大研究紀要四 昭和47・2
- 前田美稲子 竹むきが記の記録性をめぐって 国文研究一 昭和47・3
- 福田秀一 竹向が記試論—特にその成立と史的意義について— 武蔵大学人文学会雑誌四—一 昭和47・7
- 小松茂人 『竹むきが記』の一考察—作者名子の道心について— 芸文四 昭和47・11
- 小松茂人 『竹むきが記』の自然感 聖和一〇 昭和48・3
- 前田美稲子 「竹むきが記」における元弘三年・夏 国文研究二 昭和48・4
- 三角洋一 「竹むきが記」について ミメージス四・五合併号 昭和49・9

伊東明弘 竹むきが記作者の一族をめぐる 慶応義塾志木高等学校研究紀要五 昭和50・3

福田秀一 竹むきが記と太平記 国文学解釈と教材の研究二〇—一六 1972・12

神谷道倫 「竹むきが記」人物考証—宰相典侍・妹の君・女院の御方・やうせいのことなど—

駒沢国文一四 昭和52・3

伊藤敬 室町文学史私注 二 序の章—『竹むきが記』の周辺—

藤女子大学国文学雑誌二一 昭和52・6

松本寧至 『竹むきが記』作者伝拾遺—名子の死—

解釈二二—八 昭和52・8

市井外喜子 「竹むきが記」歌意索引篇による語彙の分析—二—

日本文学研究一八 昭和54・1

岩佐美代子 とはすがたりと竹むきが記 国文学解釈と鑑賞四六—一 昭和56・1

渡辺静子 『竹むきが記』—南北朝の動乱に生きる—

国文学解釈と鑑賞五〇—八 昭和60・7

白水直子 『竹むきが記』の成立について—特に執筆態度を中心として—

甲南国文三六 1989・3

渡辺典子 中世女流日記文学の語彙について 国文七二 平成2・1

渡辺静子

中世文学研究への提言―かな日記の構造と表現―

日本文学研究二九

平成 2・2

松菌斎

中世の女性と日記―「日記の家」の視点から―

金沢文庫研究二八五

平成 2・9

位藤邦生

女流日記文学における『竹向が記』の位置

『女流日記文学講座』六

平成 2・10

水川喜夫

『竹向が記』の構想と執筆意図

同

岩佐美代子

『竹むきが記』の引歌

同

渡辺静子

『竹むきが記』の生と死

同

藤田一尊

『竹むきが記』の世界への窓

同

水川喜夫

『竹むきが記』の世界

水茎一一

平成 3・9

鈴木裕史

『竹むきが記』の尊敬表現―構文要素別敬語使用率の観点から―

國學院雑誌九三―八

平成 4・8

小島明子

『竹むきが記』の主題意識―反復表現の検討―

國語國文六一―九

平成 4・9

三 注釈その他

松本寧至解説

竹むきが記(古典文庫二七五)

昭和45年

水川喜夫他

竹むきが記全釈

風間書房

昭和47年

水川喜夫解説

竹むきが記(勉誠社文庫二八) 勉誠社

昭和53年

渡辺静子・市井外喜子編

竹むきが記総索引(笠間索引叢刊六七) 笠間書院

昭和53年

福田秀一・塚本康彦編

校注中世女流日記

武蔵野書院

昭和56年

次田香澄・渡辺静子校注

うたゝね 竹むきが記

笠間書院

昭和59年

今井卓爾監修

建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記(女流日記文学講座六)

勉誠社

平成2年

岩佐美代子校注

竹むきが記(新日本古典文学大系51「中世日記紀行集」所収)

岩波書店

1990年

四 その他、関連する文献

家永三郎・石母田正他編

岩波講座日本歴史6中世〔2〕 岩波書店

1963年

朝尾直弘・石井進他編

同講座

1975年

宇野精一・中村元・玉城康四郎編

講座東洋思想の 東洋思想の日本的展開 東京大学出版会 1967年

()

家永三郎編	日本佛教史Ⅰ	法蔵館	昭和55年
赤松俊秀編	同 Ⅱ	同	昭和53年
村岡典嗣	日本思想史概説	創文社	昭和36年
橋本義彦	平安貴族社会の研究	吉川弘文館	昭和51年
中世文学会編	中世文学研究の三十年		昭和60年
大曾根章介・堀内秀晃他編	研究資料日本古典文学 九 日記・紀行文学	明治書院	昭和59年
今井卓爾監修	女流日記文学とは何か（女流日記文学講座一）	勉誠社	平成3年
森茂暁	太平記の群像	角川書店	平成5年
伊藤敬	南北朝の人と文学	三弥井書店	昭和55年
岩橋小弥太	花園天皇	吉川弘文館	昭和57年
長坂成行	『太平記』における公家の形象―坊門清忠と西園寺公宗―		
	青須我波良二二		昭和56・6
木村正中	日記文学の成立とその意義	国文学解釈と鑑賞二八―一	昭和38・1